

忘れ残りの記「四半自叙伝 後編」(吉川英治)

小さい筆禍

川村印章店は馬車道から横浜公園へ向って柳並木になっていた住吉町通りの角から東側へ二軒目のちんまりした一店舗だった。中村梧竹の篆字で「川村印房」とした彫看板が表二階の屋根半分を隠していた。その小さい商品棚に、紫水晶、象牙、めのう、水牛などの印材朱肉入れの類が並んでいるのに気づかなければ、ちょっと見、何屋だか分らない構えだった。わざわざお客の足を入り難くしているのかと疑われるような重い硝子^{ガラス}がいつも内と往来をびたりと立てへだてていた。店内の小狭い土間は凸字形になっていて支那風の磚^{かわら}で埋めであった。客用の腰掛が三つ四つ不愛嬌に備えてある。畳敷きの上がり^{かまち}框は、その凸字形の土間から両側へ区分されていて、店主は這入って右寄りの方の畳の間に紫檀^{したん}の小机をすえ、好みの文房具やら印譜などを並べて、ちょっとした煎茶家^{せんちやか}か文人の書斎めかしたそこへ坐って、時々、頼杖ついているにすぎなかった。そして左側の畳敷きが徒弟机の並んでいる仕事場でもあり、また時々、這入り難い硝子障子をあけて這入ってくるお客の御用を^{うけたまわ}承るほんとの店先でもあった。

新しい角帯前垂れを着せられて、ベソを掻き掻き近藤小母さんに連れられて行った初奉公のぼくは、勿論、店の表つき

を見て這入ったわけではない。その家のしきいを初めて踏んだのは露地の裏口からであった。隣りの土蔵裏にさえぎられている陰気な勝手口からおずおずと近藤小母さんのあとに尾いて内へ上がったのである。何か冷やっこい他人の家と足の裏に感じたとき、又してもぼくはここで一と泣きしたくなった。

下町の商家の奥というものは一体に何処の茶の間でも鈍い光線と妙な冷氣をもつて暮しているが、その嵌^はめ込み筆筭^{ひしゆ}だの交^{ちが}い棚^{たな}だの長火鉢といったような調度類は薄暗い中にもチリ一つとめない神経質なまでの几帳面さの中に置時計の針のチクタクまでがいやに^{いかめ}厳^いしい静けさを守っているものだった。店境いの障子一重あけて店へ出れば、どんなお客に対しても、つねに平身低頭して愛想を作っていなければならぬ隠忍の習性が、ひとたび茶の間へ返ると主人の位置に直って今度は「あるじ」として奉公人へ臨む身になるので自然こうした居間好みや自己の厳肅化にもなってくるのではあるまいか。

けれど近藤小母さんは、ここのおかみさんとは姉妹同様な仲と云っていた通りに、いきなりおかみさんの見える長火鉢を挟んでこちら側の厚ぼったい座蒲団の上に、その肥^こえた体を不行儀に坐り崩すと、忽ち何かおかしい笑いをしはじめていた。それは全くぼくとは無関係な話題であったし、初めて耳にするおかみさんの声柄や調子にしても、ぼくには何かはしたなく聞えて、自分の育った家庭で聞き馴れた日頃のものとはまるで勝手の違う雰囲気^{ふんいき}に思われた。もっともそれは後で知った事だが、近藤夫人もオテイちゃんを生むまでは

洋妾であつたのだし、従姉妹であるこのおかみさんも又、以前はらしやめんかそれに似た水商売の婦人だったものらしい。従つて、前身も似たり寄つたりの女同士が二人きりで氣をゆるした話をしあうと、自然に以前の若いときからの調子が弾はずんで出るものらしかった。

ぼくには何ら関係のない年増としま同士の冗談ばなしをさんさん長火鉢でやっていた近藤小母さんは、やがての事、やっとぼくに就て何か語り出していた。時々、おかみさんと声をひそめてから、中廊下の蔭にしょんぼり佇たたずんでいたぼくの方を茶の間の内から振向いて「英さん、ここへ来て、御あいさつなさい。今日からよろしくお願い申しますッて」と、その二重頤ふたえあごでさし招き、ぼくが側へ行つて畏かしこまつたお辞儀をすると「こちらが、おかみさんよ」と、無造作に言つた。

おかみさんは四十前後に思われた。近藤夫人とはあべこべに瘠しやうせ過ぎてゐる。薄化粧をしていてさえ黄痘病おうとうびんのような艶のない皮膚をしていた。銀杏返いちようしというのか、ひつつめた日本髪に結つてゐるので、生え際の薄い毛がみな眼ジリを吊り上げる為にあるものみたいに見えるのである。それに歯まで黄色くて汚らしい。よほど煙草好きなのであろう、長煙管ながぎせるを手から離さず持つていた。そしてぼくが初めて主家の主婦から云われたことばは、

「ま、ずいぶん小っちゃいわね。十四なの。これで十四」ということだった。

ここへ来る時、家から人力車に積んで来た大きな荷物が、ほかの奉公人たちの手でそこへ運ばれた。おかみさんは「あ

ら、あら。たいへんなお荷物ね」と、ちよつと呆れ顔して近藤夫人へ何か又、ぶつぶつ口叱言くちごをもらしていた。近藤夫人は親代りにしても卑下し過ぎるほど従順に、云われる儘まま大きな風呂敷づつみを解き初め、一応おかみさんの前に持参品の点検を乞うといった風だった。——中にはぼくの蒲団やら着更えやら、また日頃の愛読書だの学校用具まで入っていた。母が、初めてわが子を奉公に手放す気案じの思い過ぎなまでの物がそれには一ぱい詰まつていたのである。

ところが、おかみさんの眉はみるみる不機嫌になつて「なアにこれ？ 冗談じゃないわよ、おまえさん」と近藤夫人へ向つて、「まるで、へ々なお嫁入り荷物じゃない。奉公人が、友禅の夜具蒲団をかついで来るなんて、持たせてよこす親の氣も知れないけれど、おまえさんの考えだつて、間違つてるわよ。うちでは、小僧を世話して貰いましょうとは云つたけれど、何も、よそのお坊っちゃんを預かるなんて云つたわけじゃないものね」と、けんもほろろに、煙草のヤニだらけな前歯を遠慮なく見せたあげく、「いいわよ、蒲団なんかは、前にいた正どんの夜具があるから、これは持つて歸つて頂戴。そして、この子の親御さんによく云ツつてよ。宅では、徒弟とていとしてお預かりするんですからつてね。徒弟だつて、六、七年は仕込まなければ一人前に成りやしないのよ。それまでは丁稚奉公のつもりでいて貰わなくちゃあ」

おかみさんに云いまくられると、近藤夫人は一も二もなく黙つてしまふ。何か頭の上がらない仲でもあるのか、何でも怒られッ放しで唯にやにやなのである。けれどもその二人の仲のよいのは無類であつた。女中が台所から出てゆくと、ま

もなくお寿司が来たり、風月のぜんざいが出たりした。そして晩の灯りがつくと、近藤夫人はやおら又、ぼくに不似合いな物をより分けて一と荷物とし、それを人力車へ運んで、「じやあいいかい、英ちゃん、辛抱しなくっちゃ駄目よ」と、俵の蹴込みから何度も云い、ぼくの影を露地の角へ残して帰ってしまった。

あくる日からぼくは店に出て、店番兼仕事机の位置を店の隅ツこに与えられた。

その朝初めて、奥の主人夫婦の食卓の前で、旦那様へ目見得をした。おかみさんとは、どう見ても似つかわしくない人だった。少し頭の地が見える頭髪をきれいに分け、商人でもなし職人肌でもない、瀟洒な市井の君子人肌といったような旦那であった。声までが低めで温厚な女性音をふくんでいる。それに反しておかみさんが喋々と昨日の仔細を告げるのを、主人はほとんど横耳に「……そう。あ。そう。居てごらん」と、箸を片手に、汁椀の上から上わ目で、ちよつと、ぼくの方を見て云ったきりであった。

店の徒弟机は三つ並んでいた。それに硯、朱筆、印台、刻刀などの印刻道具一式が揃えてある。もうじき年期明けとかいう倉どんが上座にいた。まん中の机にいた正どんは病気で実家に帰っているとか。その空きを一つ措いて「きょうからおまえはここに居るのよ」と、おかみさんは指さしてぼくをそこへ据え、「倉吉、いじめちゃいけないよ、こんど来た小僧で、英どんというのだよ、おまえ兄弟子なんだから、よく面倒をみておやり」「へい」と、倉どんは印材挟みを左に、右の

手に刻刀を持って、印材の面をパリパリと彫っていた細やかな手先をちよつとやめて、「よろしく」と、猫背の恰好をした儘、小肥りな体をぼくの方へ折り曲げて見せた。

店にはめったに客はなかった。仲通りの仲買店とか、関内芸者の花柳地が近いので、お茶屋の帳場印だの、往來の客がふと実印や認め印などを稀に註文しに入って来るぐらいなものだった。それでどうして関内の目抜き通りに商戸を張っていられるのかといえ、べつに二、三の外交員がいて、税関、裁判所、市役所、商館などの大所をたえず註文取りに廻っていた。そしてたとえば郵便局の消印みたいな大量納品になると、これは同業間の入札になるらしく、旦那自身がそれには出向いて行くといった風の経営なのである。もちろんそんな大量仕事は、店先で彫りきれる物ではないから、その下請けをする印刻師もどこかに持っていたのであろう。とにかく店は看板だけのもので、常にそんな程度の閑散であったから、倉どんとぼくの二人は、主人夫婦が見えさえしなければ、どんな話も出来、また何を読み何を書いていようと叱られる惧れはなかった。

自分が生い育って来た從來の家庭とは、全く水が違っていったという適応の戸惑いが総てだったというほかはない。初めての奉公先としては、近藤小母さんも保証した通り、至極のん気で居よい家には違いなかった。けれど、ぼくにはどうしても馴じめない猫みたいに、この家が冷たくてならなかった。どこがと聞かれると答えも出ないが、硝子戸越しに往來を眺めていると、夕方など涙が出てきてしやうがなかった。

他人の中を初めて嗅いだせいであろうか、倉どんと並んでいると、倉どんの体や座蒲団から腋臭^{わきが}をもっているような体臭が鼻をついてくるし、奥へ入ると日当りの悪い茶の間特有な冷たい匂いが身をひき締め、勝手元へ立つとそこにも一そうつよい他人の家の匂いがする。わけて毎朝厭だったのは、二階の主人夫婦の寝間の掃除だった。掃除は何でもないが、朱塗りの木枕と男枕の並んでいる夜具を疊んで押入れに押し込むあいだ、何ともいえない少年の潔癖と反骨がうずいて、蒲団の起す生温い風やチリに顔をそむけた。

台所には女中もいるのに、それをぼくの朝仕事に課したのは、ぼくがまだ何も分らない年少のチビと思ってさせた事だったにちがいない。何がといって、主人夫婦の二つの枕を手に持って片づけるほど厭だった思いはない。板の間で冷や飯を食べ、雑巾バケツの側で叱られ、又、おかみさんの足腰を揉ませられる事よりも、それは奴隷的な屈辱感に汚される心地であった。人間の最下級の仕事であるように子供心にも思われた。

これが済むとお極りのランプ掃除であった。横浜市もまだ全市電灯になっていなかったとみえ、街灯も殆んどまだ青白い瓦斯灯^{ガス}だった。よほど大きな問屋とか病院とかでないとその瓦斯灯もまだ各家庭にまでは普及されていなかったように思う。

ランプ掃除は、ぼくら少年は家庭でもよくやらせられたもので、これはさして辛いとも思わなかった。しかし、食後にもう一つ日課があった。それは茶の間と次の間に据えてある桐箆^{つやぶきん}筒やら用箆筒に艶布巾^{つやぶきん}をかけることだった。現代の家庭

ではそんな丹念な暇つぶしをしている家は見かけないが、その頃の主婦はよくやったものらしい。うこんの布^{きれ}を疊んで持ち、毎朝、桐の家具を精かぎり撫で廻すという仕事であった。これがなかなかおかみさんの気に入るようには出来ないし、少年の根気には耐えられない、つまらなさでもあった。

来てから幾日目に、ぼくは初めて戸外へ使いに出された。生まれて初めて土を踏んだような心地がした。同時に、前垂れ角帯の自分の小僧姿がまだ自分のものと思えず、人中では極りが悪くて仕方がなかった。通学へ急ぐ同年輩の中学生や女学生の姿を往来中に見ると、故^{ゆえ}なく体じゅうから睨^{にら}みで熱くなった。羨望と卑下とに小さい身なりを一そう小さくして街路樹の蔭々と拾って歩いた。家にいた頃はべつに身に沁みて考えられもしなかった学問への意欲が急に飢渴を知った胃のごとく疼^{うず}いて来、その学問の出来る境遇から落伍したと感^{かん}じることが、口惜しくもあり恥かしくもあって、何とも複雑な少年期の感傷にくるまれて来るのであった。

その朝のお使いは、港橋河岸の乾物屋からクサヤの干魚^{ひもの}を買って来ることだった。何枚かのクサヤをくるんだ紙包みを片手に持ちつつそんな思いにふかふか歩いていたせいだろう、おかみさんは紙包みを開けてみるなり「あら、これだけ？」と、ぼくの顔とクサヤの数を見くらべた。途中でこぼしたか、犬にでも啗^くえて逃げられたのか、何故かその干魚の数が足りなかった。「しようなない小僧サンだね、お使い一つろくに出来やしない」と、おかみさんは台所から茶の間へ引っ込むまで後ろ姿でぽんぽん云った。

こう書いてくると、いやな記憶ばかりを持ち、やたらにセンチな少年だったようでもあるが、厭な事だけが朝夕だったわけでもない。何といっても、親の膝を離れた当座は、寢床へ這入ってから独りペソを掻きつつ泣き入りする夜も何度かあったが、しかし根本はやはり子供で、至極単純だったのである。ちよつと気が反れるとすぐ親恋しさなどは忘れていた。そして、おやつ時に茶の間へ呼ばれて、倉どんの分と自分の分との今川焼や塩せんべいなどを、おかみさんからうやうやしく戴いて退がって来るのも、ちよつとした愉しみだったし、台所でボソボソ食べる箱膳の御飯やおつけも、いつか美味しくなっていた。

また何よりは旦那なる人が、一こう無口でぼくらにも優しい事だった。初めのうちは、「旦那さま」とか「おかみさま」とかいう敬称が口に出ないで困ったが、それも馴れたし、わけてこの男主人の方には、毎朝の二つ枕を片づけるあの折の感情はべつにして、だんだん尊敬に近い気もちが持てるようになっていた。

主人の川村氏は、俳号を呉竹といつて、俳友も多いらしく、ぶらりと店の紫檀机を訪れにくる人は「呉竹さんいますか」とか、「これ、呉竹さんに渡しといて下さい」とか云つて、よく判者点のついた社中の句巻を配って来たり、どうかすると数名の俳人仲間がぶつかつて、俳談に耽りあう夜もあったりした。

店の戸をおろすまでは、夜業はぼくら徒弟の通常だった。ぼくは主人から与えられた隷書千字文の手本を横において習字したり、ツゲ材の稽古判を印挟みに挟んで、刻刀を持つ初

歩の稽古彫りなどをそろそろやり初めていたが、それもよそに俳人たちの雑談に聞き耳立てているのが又なく愉しみの一つであった。

その頃の横浜俳壇にも、当然、ホトトギス派や根岸派などの俳流もあったであろうが、多くは旧派といわれる其角堂系の点者俳句が流行のようであった。雪中庵雀志とか、金港舎なにがしなどという宗匠の名がよくその仲間の口にのぼっていた。川村呉竹氏は元より俳句で飯は食ってはいないが、それらの正風俳句と称する社中では相当な古顔でもあり、文台披露といったような宗匠披露目もやった人らしかった。それと商売柄、筆蹟も良く、篆刻も上手ということで、俳友たちのことばつきからも一店主以上のべつな尊敬をうけていたことはぼくらにも察しられた。

名は覚えていないが二、三度主人の使いで行ったことのある俳人の一人で扇町に雜貨貿易の店舗を持っていた人がある。およそ風采のどこにも俳句気などは見えない美髯の横浜型紳士であったが、或る日の小雨のそぼ降っている晩、夕方から主人呉竹氏の紫檀机のそばに坐りこんで、雑談に時を過していたことがあった。

そのうち時々、主人とその人の眼が、ぼくの姿へそがれて来るのを、ぼくは体で感じとっていた。印刻の夜業ランプには、硝子玉のレンズを掛けて、その明りの焦点に印面をおき、先の鋭い印刀で、パリッパリッと、微細な印字を彫ってゆくのである。その稽古判にぼくは眼を赤くし、倉どんのように背を丸くしていたのであるが、ふと主人が「おい」と、

呼ぶので顔を上げると、俳友の客が、チックで固めた美髯にちらと微笑を見せて「おい。君あ、作文が巧いんだってね。今夜、雨が降ってるから、雨という題で一文そこで書いて見給え」という唐突ないいつけたった。

どうして、ぼくの作文などを、その人はもちろん主人も知っているのだろうか。ぼくは唯まっ赤になって俯向いた。すると主人も頻りに「題は何でもよい、何か、思った文章を書いてごらん、すぐそこで書いてお見せ」と云うのである。

書かなければいけない主命のように思つて、ぼくは鉛筆を取出して何か書き出した。文の内容などはすっかり忘れているが、硝子戸越しに、その晩の雨の往来を行き交う人力車の灯や蛇の目傘の人通りなどを見つめたりして、やつと写生文体にして書いた事だけは思い出される——で、それを畏る客と主人の前へ持つて出て引き退がった。それから二人の大人が、ぼくの作文を机にのせて、頬杖つきながら首を寄せ合っているのも長い時間であつた。その間じゅう、ぼくは胸が動悸していた。主人も客も、ぼくへは、うんともすんとも云わなかつた。そしてその晩はべつに何の事もなく客が帰ると戸を卸していつものように薄い蒲団にくるまって寝ただけだつた。

ところが、翌朝、ぼくは主人の前に呼ばれた。主人の見事な筆蹟で書いた、ぼくの父宛ての封書が前に置かれてある。それをちよつと指の先で突き出して「これを持って、うちへ帰んなさい。わけは中に書いてある。そしてね、荷物は後から誰でも取りにお出で」と云うことであつた。

川村印章店の台所口からぼくは往来へ出て行つた。堪らない情けなさで胸がつまっていた。暇を出されたという事はやはり大きな衝動だつた。そのくせ「家へ帰れる——」といううれしさが、こんこんとこの幾日か渴いていた心の何かを満たしてもいた。

けれど、母の手紙で、家はもう元の清水町赤門前を引払つてしまい、西戸部蓮池何番地という所へ移っている事だけを知つていて、以来まだ一度もその後のわが家は見えていないのであつた。

いつか店の使いで、戸部銀行へ納品に行つたとき、ふとわが家の引越し先を探しにうろついた事もあつたが、家を出るさい父から「奉公に出たら、どこまでも忠実に勤めなければいけない。使い先から家へ寄つたりしても決して家へ上げてはならないぞ」と、母も云われ、ぼくも云われていた事なので、父の顔恐さに、思い止まつて、途中から空しく帰つてしまつたのである。

だからまず第一に、暇を出されて帰つたら、父がどんなに怒るかという事のみが何より心配だつた。密かなうれしさの半面に、また小さい胸を傷めながら戸部の引越し先を探し歩いた。

字蓮池という所は、伊勢山から紅葉坂の反対側の方を西へだらだら降りて行つて、中途から狭い横道をまた右へ降りきつた一劃の窪地であつた。藪やら古い池の残痕やらを繞つて安ッぽい借家がぼつぼつ建て混み初めて来たといった風な場末であつた。その一軒の格子先に、紛うなきわが家の標札を見つけたとき、ぼくはこれがわが家かと疑つた。そしておず

おずと足を踏み入れるばかりな狭い土間の中へ入ってまず奥を覗いた。

家はたった三間ほどであった。以前の家庭にあったような家具や飾りは何一つ見当らない。父の姿も見えなかった。奥の六畳にまだおむつの要る妹が蒲団にころがって、狭い裏庭の外に物干竿へ洗い物を懸けている母の後ろ姿があった。

「おっ母さん」と、ぼくはまだ他人の家のように上がりもせず土間から首を伸ばして呼んだ。母の顔がその日向からこつちを振向いた。人ちがいするほどその髪の毛も頬のあたりも寝れて見えた。「あら……」と云ったまましばらく母は笑いもせずぼくの方を凝視していたが、その手から音をたてて物干竿が地へ落ちた。母はそれを拾い上げようとせず、縁へ這い上がり、座敷を小走りに駆けて、ぼくの顔のそばへ来た。そして「どうしたの、英ちゃん」とは云ったが、すぐ何かを察したようだった。ぼくは主人からの手紙を母の前へおくと、何も云えなくなつて唯泣き出した。母はそうした感情に揺られた容子もなく「おあがり」と、ぼくの手を取つて内へ入れ「何を泣くのさ」と、少し面倒くさそうにぼくを叱った。ぼくはまだ胸々たるものを胸に残しているので、「お父さんは？」と家の中を見廻し「……お父さんは何処へ行ったのと、何度も訊ねた。

母のことばに依ると、父の敗訴の始末やら多額な賠償金の算段をするために、先頃、郷里の小田原へ行ったので、ここ当分は留守だということであった。

その時は、母のことば通りな父の不在を信じて、僕は内心

ほっとしたものだが、しかしそれから一と月も経つと、ぼくにもいろいろ疑わしい節が感づかれて来た。母としては、そのさい、ずいぶん切ない思いだったに違いない。母の言は、子供へも打明け難いための、真赤な嘘だったのである。——ぼくが奉公先へ出たあれから後、父は大審院の敗訴で私書偽造横領罪とかいう判決の言い渡しをうけ、まもなく根岸監獄の未決監に収容されていたのであった。

もっともそれから服役までにも、訴訟相手の高瀬氏が願ひ下げしてくれるか、会社へかけた損害の賠償義務が果せなどしたら、あるいは体刑まで受けなくても済んだのかも知れないが、平素、借財はあつても預金などは皆無な父だったし、家財道具まで、一、二年の間に喰ひして始末なので、それも出来ず、高瀬氏の「吉川を横浜から屠る」と公言していた憤りをも、ついに又、解くことが出来なかったものとみえる。

それについても、ぼく自身、思い出されてならないのは、ぼくの義兄政広と、桜木町の駅で別れた日の事だった。その日、ぼくは義兄を見送るために尾いてゆき、汽車の出るまでホームに佇んでいた。汽車の窓に見せていた義兄の顔はいつになく沈んでいた。——あとで母から聞かされた事情によると、義兄は小田原の養家先である綾部家の山林を売払つて、父が生涯の急場を何とか救おうというつもりで帰郷したものらしい。あるいは、あの頑固な父も今は意気地を曲げて「頼む」と頭を下げてわが子へ頼んだものかも知れない。いずれにせよ義兄は事の至難を知りつつ小田原へ立ったのだった。憔悴した元氣のない顔をして「英ちゃん、これから苦勞する

ぞ」と、汽車の窓からぼくへ云い、そして思い出したように、左右田銀行から受取ったばかりの月給袋を洋服の内かくしから出して、「これを、お母さんへ渡しておくれ」と、ぼくの手へ預けた。

それが、義兄政広とぼくとの短い兄弟縁の最後であった。小田原での金策は、養家先の親類に嗅ぎつけられて、当然、非難と排撃をうけた事に終ってしまい、その為の不面目を父へ詫びての事であったか、それとも前々から、父親にいだいていた不満がその機に爆発したもののか、まもなく一片のハガキを父親宛てによこした義兄は、「少々志す事がありますので、不孝の罪重々ながら、日本を去り、外国へ行きます。おそろく終生再びお目にかかる事もないと存じます故、小生の一身は、世にないものとおあきらめ下さるよう」というような意味を告げた儘、それきり横浜へも帰らず、また勤め先の左右田銀行にも出勤せず、どこかへ姿をかくしてしまったのであった。

一時、この義兄の失踪騒ぎでは、父はいうまでもなく、母も知人も、警察から私立探偵まで頼んで百方行方を探し廻ったのであった。けれども郷里の小田原には全然消息を絶ち、東京へ出た形跡もなく、ついに杳^{よう}として三十幾年か、分らず仕舞いになってしまったのであった。——それが、ずっと後年、ぼくの文筆名を誌上などで見て知ったものだろうか、或る日突然、当時芝公園にいたぼくの家をふらりと訪ねて来たことがあった。——後日、そういう話もあるのであるが、もうその時は、とうの昔に父も死に、母も死んだ後だった。殊に、その辺の事は、まだここで語る順序ではないし、かanta

んにも語りきれない。——で今はぼくの唯一人の義兄も、父の入獄以前に失踪して行方不明になったという事だけを、ここでは云っておくにとどめる。

ところで、話は後へもどるが、どうしてぼくは川村印章店から——あんな温厚な主人から添書など持たせられて——突然、暇を出されたのか。その事情は、父宛ての手紙の内にも書いてはなかったが、後に、母が近藤夫人に会ってから聞いたことで、やっと先の真意が分った。

あの雨の晩、雨という題で一文書いてみせると、客と主人から云われた前々日の事、ぼくは飛んでもない大失敗をしていたのである。

——というのは、こうだった。昼間、奥の座敷に、おかみさんがいつも掛りつけの髪結いが来ていた。そして、おかみさんの髪を梳^すいていたのである。

鏡台を前にすえ、髪結いに髪を上げさせているおかみさんの半身が、ちょうど、ぼくの仕事机から店仕切りの中ガラスを透してよく見えた。

ぼくは恐らくおかみさんの顔に日頃から興味めいた何かを抱いていたのだろう。あの薄い生え際の毛へ、髪結いが、スキ櫛という歯の密な竹櫛を加えて、それを一と撫で一と撫で、いやというほど力をこめて梳くたび毎に、おかみさんの黄いろっぽい顔が紅くなつて、眼じりも小鼻も吊り上がってしまい、まるで飴^{あめ}が伸びるように顎から眉毛までを細長くして、反ツくり返りそうになっているのが、見ていると、何ともおかしくてならなかった。それを又、一体どういう心理であっ

たものか、ぼくは仕事机の上に雑記帳を拡げて、と見、こう見、セッセと、おかみさんの顔をスケッチし初めていたのである。元よりこっち側から見える中障子のガラス越しなら、当然、おかみさんの方からも横目で見えていたにちがいない。けれどそんな思慮もなく写生した雑記帳は、机のひき出しに入れた儘、すっかり忘れていたのである。

ぼくを使い何か何かに出した後で、おかみさんはさっそくぼくの机のひき出しをあらためた。そして、主人の呉竹氏にそれを示し「こんな恐ろしい子ッてありやしない。こんな小僧はさっそく追ん出して下さい」と色を変えて迫ったものだそうである。それでも主人の呉竹氏は「まあ、まあ」という風で取上げなかったそうだが、その翌晩ちようど遊びに来た俳友の一人に、ふとその事を相談したところ、その人も又「そういう小生意気なまねをする小僧はやはり考えものだな」という説で、一つどんな才なのか試してやろうという所から、ぼくへ向って、突然、あんな難題を命じたものだという。

それも生半可^{なまはんか}、ハイなどと答えて、即座に書かなければまだよかつたろうに、正直一途に小さな智恵をしぼって書いてみせた為、それが又、よけいに悪い結果になった。「こんな子は末恐ろしいよ、君」と、その人も呉竹氏へ云ったそうである。思えばその頃、わが家の没落初頭に、父は高瀬理三郎氏の禿頭に加えた一拳が禍いとなって、自身の生涯をどん底に落し入れたのみか、妻子まで離散と悲泣の運命へ追いやる序幕をここに作り、ぼくはぼくで又、おかみさんのあまりに細長い顔に興味を感じてそれをスケッチした為に、思わぬ筆禍に会ってしまい、それから次々に食う為の職をさがし

歩く路傍の小犬になってしまったのであった。

赤煉瓦

他人の飯というものを、ちょっぴり食べて帰ったに過ぎないぼくは、父の不在をいい事にして、毎日、古本屋覗きをして歩いたり、また好きな本と首っ引きで徹夜し、狭い家に隠されている母の苦勞も知らずぶらぶらしていた。

それでも母は何ひとつ叱言も言わず「おまえもほんとに変って来たわ。やはり世間に出て、よその御飯を食べたのが、いい薬だったのね」と云ったりした。

以前とちがって、猫の額みたいな借家だし、もう女中の手もなく、母一人で一切合財、立ち働きの生活だったので、ぼくも自然、台所の水汲みもやれば掃除もする、お使いにも渋らずに飛んで行くという風だったから、母にはわが子が良く変わったと見えたのであろう。けれど、じっさいのぼくは、箸の上げ下ろしにも恐いやかまいやの父親が居ないという家庭がただ珍しかっただけである。厳父の居ない慈母だけの家に、母と暮している愉しさが、自分を軽快にしていたのだった。

父の姿を家に見なかった幾月かの間、母は何して生計をたてていたのだろうか。この頃からぼくは母の代りに屢々、質屋のかどを潜った。母が新妻時代にでも使ったらしい鼈甲^{べっこう}の櫛^{くし}笄^{かんざし}やら簪^{かんざし}などを入れた小篋^{こばこ}と、ぼくの顔とを、質屋の主人にじろじろ見くらべられて、顔を真っ赤にしたばかりで

なく、足がふるえた事などが今も忘れえない。質屋の利用觀念も、人の見る眼も、今とはまったくちがっていた。

また度々、母の手紙を持っては、知人の家へ、貸金を返して貰いに行った事などもある。母は以前から父にも内緒で、親しい人とか出入りの大工、商人にまで、よく融通を頼まれては、用立ててやったらしく、それをこのさい、幾らでも、お返しを願えれば——と先方へ頼むわけだが、めったに返してくれた例^{たと}しはない。そればかりでなく、まだ自分に味わった事のない冷ややかな他人の素振りにぶつかるので、いくら母の頼みでも、このお使いには、時々ぼくも渋ってみせた。

それでもどうかすると、思いがけなく状袋に入れた何円かの紙幣と、その上、先方からお菓子まで貰って帰ることもあった。そんなときの嬉しさは無上であった。ほっとする母の顔には「これで幾日かはお米も買える」という安心がありあり見えた。お米はその頃、一升十六、七錢であったと思う。南京米だと三、四錢は安かった。ヒキ割り麦、押し麦などは、もすこし安い。だから母は、零落してからは、白米と麦を七分三分に交えていた。

何しろ母は育ちざかりを大勢抱え、一夜に戸部の場末に落ちて、貧乏生活の初歩から経験し出していた折なので、まず白米に麦を交えるぐらいな智恵が、耐乏決心の関の山な覚悟だったろうかと思われる。

その頃の事といえ、わが家の戸籍などを人前に出すのもどうかと思うが、母に苦勞させた喰べ盛りの口数を示すために、一応ここで幼い弟妹たちの名を並べてみるなら、まず長男の

ぼく十四を頭に、次男素助七つ、長女きの十二、次女カエ九つ、三女浜四つ、四女千代一つ、という揃いも揃ってヒヨコばかりが六人もいたのである。ほかになのお菊、国、スエの女子三人は乳児のうちに亡くなってい、三男の晋はまだ生れていなかった。だから全部あわせると、母は十人も産んだわけである。そのくせ、当時の母はまだ三十九でしかなかった。色が白いので貧しい近所界限の中では、よけいきれいな母に見えた。

だがその母も、長年欠かさない習慣だった起き抜けの薄化粧もいつかなくなっていた。当歳の乳呑み児を背に、朝は三人の子を小学校へ出すまで坐るひまもなく、その後は洗濯物や他家の仕立て物の内職を、乳を吞ませ吞ませ、夜遅くまで精出していた。その一つランプの下で、ぼくは暢氣^{のんき}に江戸文学や翻訳小説に読み耽っていた。深夜の灯一ツに、そうしてぼくが側に居るといふ事は、母にも何かの慰めではあったのだろう。よく父からは「英。まだ寝ないのか」と叱られたものだが、その惧れ^{おそ}れもなかったし「何を、くだらぬ物を読んでいるか。その本をちよつと見せろ」と、干渉される心配も母にはなく、母には辛い内職の針仕事であつたろうが、ぼくには自由なしんみりと愉しい毎晩の灯火であつた。

さかんに投書もしはじめた。投書は十二歳頃、時事新報社創刊の「少年」に短文が当選して銀メダルを貰ったのがやみつきで、金港堂の「少年界」「少女界」「ハガキ文学」「女子文芸」「中学文壇」「中学世界」「秀才文壇」と、手をのばし、しまいには「文庫」だの「明星」にまで、詩や歌などを送って

いた。だが、めったに掲載された事はない。わけて「万朝報」に週一回発表される短編小説には、熱を上げて何回も出したが、たった一度、選外佳作に入ったにすぎない。それでも秀才文壇、中学世界、ハガキ文学などでは幾回か和歌、新体詩、短文の賞を獲ては、ひとり得意になっていた。——そのうちに、投稿者の住所から同校生や近所にも、投書家仲間がいるのを知り、やがてコンニャク版の廻覧雑誌を作ったり、小費を出しあって幼稚な謄写版器械を買って、同人雑誌めいたものを刷って撒いたりしていたが、退学以後は、そうした友達とも、別れた儘になってしまった。会は斯文会と名づけ、雑誌は「野ばら」というのだった。仲間に甲賀太郎、今村均、木村某などというのがいた。それにぼくは大町桂月論などというのを書いたことがある。思えばじつに冷や汗ものである。そして誰も彼も雅号というものをもっていた。雅号でないと文学気分がわかないのだ。ぼくは霞峰と名づけていた。投書にも霞峰をつかって、やたらに出しまくったものである。女子文芸や女学世界には女名前を出していた。

その頃の横浜で文壇めいた雰囲気をもっていた人々は、磯萍水、高沢初風、小島烏水といった人たちで、「藻しほ草」という文芸雑誌が唯一の月刊物であったと思う。それと横浜貿易新報とか横浜毎朝新聞の文芸欄を中心に幾つかの詩社や歌会があった。俳壇では、虚子と同門の人だろうか、松浦為王という人がよく選者をしたり、小集の通知をくれたりした。貿易新報の新年号特別募集というのに応じて、ぼくの句が一等に推され、四打入の麦酒箱を貰ったときは途方にくれた。又、松浦為王氏の寿町の自宅で小集のあったとき、行ってみ

たこともある。しかし、席上の人々はみな紳士淑女のごとき大人ばかりだったので、会の端には坐ったものの、ぼくは唯、まのわるさにもじもじばかりして、人ともものもろくに云えないで帰って来た。それに懲りて会へ出たのは前後そのとき一遍だけだった。

貿易新報というのは、開港地の商報新聞にしては、道楽気のあるおもしろい紙面を見せていた。小川芋銭がコマ絵と称する写生図を毎日載せ、小説欄には、硯友社の作家の作品や前田曙山がよく登場して、因果華族という題名の小説などが受けていたようである。ぼくらはそろそろトルストイだのモウパッサンだの、やれ江戸文学では秋成か西鶴だなどと小生意気をいい出していたので、曙山や黙禪や幽芳などではあきたらなくなり、よく分らないくせに四迷、独歩を経て、また泉鏡花に傾倒していた。誰もいちどは罹るといふ鏡花病にぼくもそろそろ初期程度の徴候をもち出していた。

文学者になりたいとか、将来、その方面にどうかという考えなどを、ぼくは当時も以後も、いちども持ったことはない。とまれ唯好きであったに過ぎない。だから読書の選択なども手当たり次第で、押川春浪の冒険小説の類でも、その一冊に興味をもつと、春浪物全部を漁りつくして読破しなければ気がすまないという風だった。

こんな風に、いくらでも毎日退屈しない小境地をもっていたので、ぼくは奉公先から返されて来て後、その夏中ぐらいは、何か独り天下みたいない気になっていたような気がする。ところが或る日、母の留守に投げ込まれた郵便物のうち、

鼠色封筒に検閲判が押してある母宛ての手紙があった。裏には印刷で横浜根岸監獄署とあり、まちがいなく父からの郵書だった。

それより前に、ぼくは薄々もう覺っていた。母が早朝から何か小風呂敷に心をこめた物を抱え、嬰兒の千代を負って出て行くと、半日の余もかかって帰ることが多かった。ぼくから訊かない限り一切父に関しては、あれ以後、母が口に出した例しもない。だから「おっ母さんはぼくに何か隠している」とは知っていたが、しかし、監獄署からの郵便物を見るまでは、まだはっきり父の所在について何うこの考えも格別もっていなかった。そのくせ、父が入獄しているのだと明確に分つても、急に真つ暗な悲しみにくるまれたという覺えは少しも残っていない。なぜだろう？ かをいま考えてみると、父にたいする畏敬というか信頼というか、とにかく監獄にやられようが路傍で失業して居ようが、子にとっては、あくまで父そのものであって、それ以外何者でもない氣もちが子の根底になつているのである。

これは、ぼくだけでなく、明治の子には、共通なとも云えるものではあるまいか。もちろん教育もそう仕向けていたし、社会のしくみもそうだった。その点では家族主義の成功が国家の上に実をむすんでいた最盛期だったかも知からない。何しろ、どんな低い職業であろうと貧乏人の子であろうと、自分の父は世間の中でも一番いい人、正しい人として、信頼していたものである。少なくとも、ぼくの氣もちはそうだった。だから父が根岸の監獄にいと分つても、父と罪惡とを、あわせて考えることはできなかった。かえって、日頃恐い父が、

なつかしくなり、子供心にも、父の孤独な姿が想像され、少しばかり涙が出た。

夏の終り頃であつた。母は子供たち三人を学校へ出してしまふと、忙しげに自分で髪を梳き、束髪にきゅっと結んで、何か難しい書物だの鼻紙などを例の如く小風呂敷につつみ、千代を負ぶって「英ちゃん、またお留守番していてね」と、洋傘を手にした。

その日まで、ぼくは父の事は母へは何も触れずにいたが、無性に父が恋しくなつて「ぼくも一しょに行く」と云い出した。そして、下駄をはいて外へ出てしまった。母はおそらく当惑したことであろうが、何のかのと云いながらも、戸閉まりをし直して、黙つてぼくを連れて行つた。まだ電車もなく人力車にも、もう乗れる身ではない。母は当歳の赤ンぼを負い、四ツの浜ちゃんの手をひき、炎天の長い道程を根岸まで根よく歩いた。今でこそ何でもない近さだが、当時は川沿いや田舎道をさんざん辿^{たど}つて、あの高い赤煉瓦の塀が見えて来るまでには、足も棒になるほどだった。

監獄前に橋があり、河を前に代書屋や差入れ屋が軒を並べていた。その一軒に入つて、母は背の赤兒に乳をのませ、何か用をすますと「おまえは、ここで待つていらつしやい。子供は入れない所だからね」と、ぼくをおいて橋を渡り、鉄と赤煉瓦の大きな門の内へ隠れてしまった。ぼくは河べりに並んでいるオボコ釣りの人の間を見て歩いたり、惡戯事を見つけて、結構、飽きもせず遊んでいた。

だいぶ経つてから、母が戻つて来た。そして又、元の道を、

親子四人、日照りの下を黙々と歩いた。「ぼく、お腹が減っちゃった」と、恠こえきれなくなつて訴えた。たしか末吉町辺であつたと思う。小さい蕎麦屋へ入つた。そしてかけを一杯ずつ食べた。喰くべ終ると、母はハンケチで顔の汗を拭きながら、ぽつんと云つた。「英ちゃん、あんたも、しっかりしておくれね、これから、うちもたいへんなのよ」母が云う「たいへん」という意味が、この日には何かぼくにも身に沁しみみて少し頷うなずかれた。ぼくの見まもる眼が引き出したように母の臉に涙がいつぱいになつた。母はあわててもいちど顔を拭き、帯の間から毛糸編みの銭入れを出して銅貨を数え、蕎麦屋の盆の端へおいた。

あの頃の主婦は、洒落た紙入れなどという物は日常に使つていない。貨幣の通用度はあらかた銀貨銅貨ですんでいたからである。五厘ごりん（半銭）という小銅貨もまだあつた。だから編物製きんの巾着きんちやくなどが重宝じゆうほうだつたものとみえる。ぼくはその日頃から、朝夕に母が台所の濡れ手のまま帯の間から出し入れする編物の銭入れに、前とは違つた気もちで眼を凝らすようになった。母が巾着の底からまさぐる銭の間に、白い銀貨の多く見えるときはほっとしたし、一銭二銭の銅貨しか見えないと、すぐ明日のお米だとか、家賃の事などが心配になつた。そして、投書の郵便代だの雑誌や本を買つてくれなどという母へのねだり事も、以前のように甘えて云えなくなつていた。

母に云われたわけではない。ぼんやりと唯、こうしては居られない気が小さいばかりにもしてきたのである。「お父さん、いつ帰るの」或るとき、ぼくが恐々こわこわ訊くと「もうじきお帰りになるけれど」と、母は口を濁した。その時も、父について

はそれ以上触れたがらない顔いろだつた。ぼくは新聞を手にとすると、自然、職業案内欄へ毎朝顔を沈めるようになっていた。そして見つけ出したのが、横浜南仲通りの南仲舎印刷所の「少年エヲ求ム」という広告だつた。さっそく行って、翌日から通うように極めて歸つた。朝七時就業、午後五時まで、日給十四銭、残業は一時間毎に二銭を支給するという事だつた。ちようどお米一升の値に近い日給のわけである。その晩、母にわけを話すと、母はじつとぼくを見ていたが、とつぜん、鼻腔も唇もふるわせて、咽むせび泣いた。それから、ぼくを抱きしめて又泣いた。多産であつたし今年生れの子をもつていたので、母のふところはいつも垂れ乳でぐツしよりだつた。で、ぼくも何だか赤ンぼの郷愁きやうしゆみたいな快感に濡れて、母と一しよに泣いてしまつた事が今でも他愛ないものに思ひ出されて来るのである。まったく人生とは遠くを振返ると、たいがいは皆、他愛ないことにすぎないようだ。

南仲舎へはせつせと通つた。初めは工場の解版部で、活字ケースを運んだり油ブラシで女工員たちと共に追ひ使われていたが、そのうちに野線部けいせんの小僧に廻された。

南仲通りには、生糸取引所とか、米穀仲買商などが軒を並べていて、活版所はその喧騒の中にあつた。だからここで印刷されるのは、相場の気配新聞や商事関係が殆どといつてよい。野線部というのは、よその印刷所にはないかもしれない。簿記用の帳簿に見られるあの薄い藍と赤線を刷るのである。刷るといふよりあれは野線機械にかけて引くといった方が適切かも知れない。それと製本の膠仕事にかわ、単行本物の「折り」などがここの作業だつた。

本工場の倉庫の二階がその野線部で、暗い梯子段を上ると膠を煮るあの臭いが顔をつつむ。仕事場は畳敷きで、藍と赤のインキの汚染はわかるが畳の色は無いのである。年増の女工員が三人、次郎さんと呼ばれる角刈りの美しい男ぶつた若い熟練工と四十がらみの主任と、男もぼくを入れて三人。それだけの部であった。

朝は七時就業だが、ぼくだけは六時半に来なければならなと云われた。皆の来るまでに、下の小使部屋から火ダネを貰って、膠鍋の火鉢やら湯沸かしの下に火を入れ、お茶の支度もしておけとの事であった。そんな勤めは不平でも何でもなかった。けれど午後になると毎日この部員がアミダ籤じというのをやり、ぼくがお茶受けを買いにゆく。豆餅とか、せんべいとか、生菓子とか。それを喰べ喰べ五人の大人達が、毎日飽きもせぬ猥談わいたんに笑いこける。その猥談もぼくには決して厭ではない。むしろ異様な好奇心で聞いていた。がしかし、この休み時間が苦痛だった。ぼくは銭がないから、アミダ籤の仲間には入らない。だからといって、皆が愉しんでいる間、外へ出ているのも変だし、横を向いているのもなお変だった。つい隅の方で、相場日報とか生糸通信なんて、てんで心の通わせようもない印刷物などを読む振りをしている。すると誰かが「おい。こっちへ来なよ」と気がついたように、ぼくへその日の菓子か、せんべいなどを投げてくれるのである。おいと呼ばれて、皆の眼の中で、それを貰って喰べるのが、ぼくにとっては辛かった。自分のひがみだが、自分の姿が犬口に見えた。

帰るのも、皆よりは毎日三十分ほど遅く帰った。掃除をし、

火の用心を見、戸締まりして帰るのが役だった。ところが、女工員三名のうち二人までは、主任の細君と、文選にいる工員の妻らしかったが、もうひとりのお勢ちゃんという三十ちかい独り身の年増は、白痴美といったようなぼってり顔で、仕事中でも厚化粧の小鼻や髪の毛ばかり気にしているといった風な人だったが、このお勢ちゃんと次郎さんが、時々、用もないのに後に残っては、ぼくに下へ行っているとか、二十分たったら帰って来いとか、いわれなく、ぼくを追っ払うのであった。

ぼくの帰りがけの勤めを、すませてからにしてくれればいいとは毎度思ったが、お勢ちゃんと次郎さんの方にも、社の門を出る時間の憚りはばかがあったのだろう。ぼくは云われる儘になつていた。けれど時によると、野線場へ戻ってみても、まだ二人が何かヒソヒソしていることがよくあった。そんな時は自分達の手で、野線器械のすえてある所の窓の雨戸は閉めきつてあった。インキだらけな古畳と膠臭い暗がりの隅で逢曳あひびきの男女のする事が行われていた。たとえぼくの聲音あしおとに気づいても二人は慌てて起きることはなかった。人体の作りあつてゐる異様な形の物影は一そう深淵の物みたいに動かなかった。ぼくはその間、たいがい階段口の窓から外へ首を出しているのであった。相場町の鳴りの止んだ夕屋根やら伊勢山の空を眺めて、母を思い泛かべていた。台所の水音やら夕方の蚊唸りなどが耳にある。その背後を、やがて角刈の次郎さんとお勢ちゃんが、ふざけながら通って、階段を下りてゆく。一瞬、お勢ちゃんの髪油の匂いと、もっとそれに何か加わった感じのものが、ぼくの体にまで染まりつくほど残される。

名は忘れたが、小使部屋に、人の好いあばた顔の爺さんがいた。独り小使部屋に寝泊りしていて、なに屈托なく働いているふうだった。毎夕煤けた電灯が点く頃まで、ぼく一人が居残って残り火の十能だとか薬罐などを返しにゆくと「これあね、今日××商店の開業十周年に貰ったんだよ、喰べておいでよ」と、お赤飯に切りスルメや卵子焼の入った折をくれたりした。この小使の爺さんから貰う物には、ぼくは何も卑屈を感じなかった。半分残して、うちにいる弟に持って行ってやりたいというと、爺さんも「それがいい、それがいい」と、云ってくれた。何かにつけ親切にしてくれた。

そのせいで、ぼくはこの小使爺さんの噂には、自然聞き耳立てた。それに依ると、爺さんは南仲舎では最古参の勤続者らしかった。越後の人で南仲舎主人の同郷人でもあったらしい。で、数年前に、勤続何十年かの表彰とまとまった金を貰い、晴れて郷里へ帰ることになった。土産物まで買っていたそうである。ところが急に帰郷は止めると云い出して、以前とちつとも変わらず小使部屋に泊って黙々と働き出した。当座、理由が分らなかったが、近所の相場師仲間の口からやがて評判になった。三十年か四十年か知れないが、その功労で褒賞された大金と、それまでコツコツ稼ぎ溜めた貯金全部をおろして相場に賭け、一夜に元も子も失くしてしまったのだそうである。——そういう馬鹿だといって工員たちは噂が出るとよく笑うのだった。ぼくも子供心に、そういう人なのかと改めて爺さんを見直した。けれど爺さんの小皺にはちつともそんな大損をしたという影もなし、人に愚痴をこぼしたのを聞いたこともない。今以て、ぼくには唯、温かな爺さんとして、

そのあばた顔までが、かなり鮮明に眼に残されているのである。それにしても名を忘れたのは申しわけない。南仲舎にはぼくも僅かしかいなかったもので、いわば行きずりの人の温かさに過ぎない事ではあったけれど。

日給の支払い日は、月々十四日と晦日の二回であった。一日の欠勤もしないでも、居残り料が加わっても、一日十四銭では貰う袋の中の額は、いと些細なものである。

けれど初めて得た金、自分で働いた金、それを手にしたときは、日頃の何ものもなく快い昂奮だった。以前の川村印章店では、一銭の小費いも、徒弟初期には無い約束だったから、自分で働いて得た金は南仲舎が初めてなのだ。それをポケットにして帰る日の夕方には、やたらに何か買って帰りたいかった。弟や妹たちに与えてみたい物が果物屋にも菓子屋にも屋台の焼大福屋にもやたらに目について仕方がなかった。それと、自分で稼いだ金の値打を味わってみたくもある。けれど母に見せないうちは、一銭減らすのも何だか惜しまれた。だから、やがて家に帰って、今夜は牛肉のコマ切れを買おうとか、白い御飯にしようのという時は、率先して自分が使いに走り出した。そして、母にいつけられない予算外のお菜まで買ったりした。煮豆屋や安てんぶら屋の前に佇んで、よそのおかみさん達の中でまごするのも恥かしくはなく愉しかった。

南仲舎へは、ぼくは幾月ぐらい勤めたろうか。それが今、はっきり思い出せない。けれどまだそこへ通っていたうちは確かである。そして秋ぐちの気候も涼しくなってきた或

る宵だった。何気なく帰って来ると、上がり口の土間に見馴れない履物が脱いである。どこことなく家の内の空気がちがう。ぼくは、どきっとした。数日前に母から囁かれていた事がある。「お父さんが、じきお帰りになるのよ」といったその時の母には幾月にも見なかった欣しそうな、ほっとしたような容子があった。ぼくは奥の薄暗いランプの明りと静かな気配から、父の体臭を感じると、もうその土間を上がる下駄の脱ぎ方からして無意識にちがっていた。「……英ちゃんかえ？」と、母の声がする。「ただ今」と、台所へ弁当箱を置きに行つた。秋ぐちといつても、まだ寒いほどではないのに、今夜に限って、世間憚るように、間の障子が閉めてあつた。

内から障子を開けて、母が顔を出した。出合いがしらに「お父さんが、お帰りになつたのよ、英ちゃん」と、うるみ声にやや弾みをおびた調子で囁いた。中へ入って「お帰んなさい」と云つたとたんに、ぼくも肱を曲げて顔を隠してしまつた。こめかみがずきずきして、耳鳴りを熱くしていたせいか、そのときの父のことばは一言も覚えていない。が、何も云わなかつたようにも思う。ただはつきりしているのは、父が細の黒っぽい着物に角帯をしめ、紹の羽織の畳んだのを枕元において、虚脱した人のような淋しい影から、ぼくへ微笑を見せたことだつた。疲れていたのか、もう夜具を敷かせ、敷き蒲団の上にいたのだが、ぼくが帰るまではと、坐っていたにちがいない。父は真四角に父らしい坐り方をしてぼくを眼で迎えた風だつた。

それにしても、父の風貌はひどく変つていた。頭の毛も以前とちがう坊主刈りになつてしまい、口髭も失くなつてゐる。

何よりも皮膚の色がわるく、頬がソゲ落ちていた。母はぼくの泣きじゃくりを撫でて「さ、もういいの……。もうお父さんもお帰りになつたし、みんなで仲よくさえ暮せばって、今もお父さんと話しあつていたところなのよ。ね、英ちゃんもその氣になつてよ」と、繰り返して云い「夜業だったの、お腹が減つたでしょ」と、父のそばへ行つて、寝衣になるのを手伝い、父が横になると、台所へ立つて行つた。

ぼくは、自分の顔が乾くと、やや落着いて、父の寝顔を見ることができた。父は暗い方へ横向きに寝た。枕元から額ごしに見ると、父の顔の瘦せが、ランプの下になお濃い陰影をもつて見えた。何か、息ぐるしいまで、自分で自分を拘束しているぼく自身の氣もちを放つために、ぼくも母のあとを追つてすぐ台所へ行つてしまつた。そして、母がそわそわ膳支度をしているのに、それを待ちきれないでそこらのお菜を見つけ次第ツマんで喰べた。

父帰る

父は変り果てた姿で、そして留守のまに、もっと変り果てていた妻子の小さな借家住居へ、その晩、半年ぶりで帰つて来たものの、当座、こうどこことなく以前の父とは、ひどく人が違つてしまつたように思われてならなかつた。

おそらく刑務所での囚人生活が、長年、大酒と遊蕩に馴れていた父には、人いちばい、こたえたものであつたらう。体

もすっかりこわしていたらしく、また当然、精神的には大きな打撃だったにも違いない。——何しても、当分は、寢床の中に横たわったきりであった。急に渴いた口腹へ欲しい物を与えてもよくないとかで、朝夕の食事も粥をつづけ、まるで大病人みたい、そっと、母の手の丹精だけに、いたわられている人であった。

しかし、社会から制裁をうけた敗北者の父でも、無職で半病人のような父であっても、父が家に在るということは、ぼくら子供の眼には、大きな力であり、光であった。その日からぼくらの小さい家は、櫓楫のない波間の小舟ではない気がした。

ぼくは依然、南仲舎の工場へ通いつづけ、夜帰ると父の枕元へ、畏まって「ただ今」の礼儀をした。よく眠っているの
でなければ、父も必ず起き直って「お帰り」と、云ってくれた。また、どうかすると「毎日、くたびれるだろうなあ」と、いたわってくれたりした。こんな父を、子供のぼくは初めて知った。

からだの弱まったせいだろうか。父のこの頃は、いやに物優しく変って来ている。その代り以前のような豪放な冗談口も聞かれなかった。昏々と眠っているか、読書三昧かであった。枕元の書物には、易経と心理学に関する物が多かったように思う。どういふ動機から父が易学などに俄に興味を持ち出したのかはよく分らない。

母と父との間にも、前には見られなかった新たな交情が生れていた。枯れかかった夫婦の木が、逆境という季節ちがいの風に会って、かえって、返り花を見せたようなものだった。

父の帰宅後は何かと雑費もふえ、母の貧乏家計の切り盛りは一そう火の車だったのに、母はその苦しさを一切父には感づかせまいと努めぬいた。そして貧しいレース編みの巾着から無け無しの小銭を割いても、父の養生の為には、鶏肉を求めて来たり、刺身も白身の魚をさがして、いわゆる病人料理の丹精を朝夕の膳にこめて供えた。父もそれくらいな事は、察し取れていたのであらう。或る折、膳を前にして、心からのように「ありがとう」と、母に小声で云いながら箸を取る姿をぼくは見た事がある。没落し初めてから以後十数年もの間、父が母へむかって、有難うと云ったのは、この時と、父が死ぬ二日前の一言と、そう二度ぐらいなものしか、ぼくは知っていない。

口には出さないでも、父は、とにかく母にたいしては「すまない、すまない」と、その頃は、心で詫びている人のように見えた。特に帰宅当座の父は、子のぼくらにまで、何か気がねしている風で、いじらしくさえ思われた。

文士劇でよく演る菊池寛氏の「父帰る」の舞台を見ると、ぼくはあの劇中の父親を、自分の父の姿に擬して、当時のわが家をいつも思い出すのである。ぼくの父は何も、あれほどまで、わが家の灯を恐れ憚りはしなかったし、また、あんなに自己の弱さを肉親へ露呈する気のいい性格でもなかったが、しかしどこかあの芝居に見られる男親心理と、その自責感と、自己反省に悶々とする姿は、ぼくの父とも、多分に共通するものが観える。

もっとも、近頃の刑務所入りなどは、一こう当人も平気だ

し、政治家ですら自ら吹聴するくらいなものだが、明治の世間における監獄という語感とは全然ちがう白眼視ときびしさをもっていた。幾月にすぎない禁錮にせよ、獄衣を着たという事は、悪徒の社会はべつとして、通常では社会的致命となった。それも世人の輦蹙^{ひんしゆく}するなどという程度の制裁ではない。実際の戸籍面にも印されて一生汚れがついたものだった。これを、子供心にもぼくは知っていたのであろうか。以後、職を求めに行ったばあい、先方から戸籍謄本を差出せといわれると、ぼくは、父のたつた一度の汚歴だが、まずその事が恥じられて我から怯^{ひる}んでしまうのだった。せつかく採用通知をうけながら、その為、行かず仕舞いにしてしまった事も一、二度あった。

けれどその後、何かの必要でほんとに戸籍謄本を取って母から見せてもらった時つぶさに見たが、父の欄にもどこにも、べつだん何も書いてはなかった。だから徒^{いたず}らな杞憂に過ぎなかったわけであるが、しかし父自身も出所当座は、沢山な子の将来にかけて、そんな心配も怏^{おうわう}々と胸に抱いたことであつたろうと思われる。

いやそれにも増して、当面の父が何より懊悩したのは「世間に顔が出せない」と自ら心を閉じてしまう廉恥ではなかったろうか。一面には明治士族のコチコチな頑固な道義觀念から脱けきれていず、半面にはまた、開港地の紳商間に一度顔を売ったりした派手派手しい生活の見得なども残っていて、世間の思わく以上に、自身、世間から遠のいてゆく風がだんだん父の日常に見え出していた。

父は病床を払うと、或る日とつぜん、易の看板を掛けるのだから、建具屋かどこかで手頃な板を買って来いと、母へ云い出した。

母にもまだ気のせまい世間の見得があつたのか、あるいは、自分自身が明日の暮しも分らないどん底にいるくせに、人の上を覗て上げるなんて空怖ろしい事だとも考えたのか、そうまでなさらなくても、数日は父の云い出しを何のかのと止めている風だった。

ところが或る夕、ぼくが活版所から帰ってみると、家の門口にその看板がかかっていた。どうにも変な気がしてならなかった。父はと見ると、もう一週間ほど前に床を払った一室に机をかまえて、算本^{さんげい}筭竹^{しやく}をおき、易書などをわきに積んで、その晩も頻りに漢書を読み耽^たっていた。隣りの部屋で、母にお給仕してもらいながら晩飯を食べつつそと「易のお客さんあるの」と、ぼくが小声で母に訊くと、母は笑ってただ顔を横に振って見せた。

父はやつと健康をとりもどしたらしい容子に見えたが、同時にこの頃からまた、ふと酒を飲み初めるようになった。家に帰った当座の父は「煙草だけはどうも廃^やめられないが、酒だけは、これがいい機会だから、こんりんさい、もう廃める」と断言して、母を感激させ、母はうれし涙をながさぬばかり、その事をぼくらにまで何度も告げてよろこんでいたが、それが結局、つかの間だったわけである。「おい、もう二合ばかり買いにやれ」とか「おい、もう一本つけろ」とかいふ、ありきたりな大酒癖の常套語が、毎晩の貧しいランプの灯が、気のひけるほど石油を吸うのと同じように、夜毎、母の財布

に血を絞る思いをさせた。それでも「はい」と云う返辞しか知らないような母は、勝手の小暗い隅にたたずんで、明日の米代としている小銭を悲しげに数えた。そして小銭と酒瓶とを持たせられて、ぼくは毎度、夜更けてからも使いに行った。晩秋の薄ら寒い風の中を、酒は手に抱いて帰りながら、焼芋屋のあたたかそうな煙は空しく横目に見て、そして家に帰れば、母は手内職の夜なべをしているし、ぼくも小さい弟妹たちも空き腹でいるのに、父ばかりが飽くなき独酌をつづけてい、しかも何か鬱々と不機嫌を内に溜めている姿を見ると、子供心にも、父の矛盾と非情に、堪らない不平を掻き立てられた。こうして父へのあきらかな反抗心を知ったのは、父が再び酒を飲み初めて、母の苦しみを加速度にして行った頃からのことであつた。

売る物も質物も全く喰べ尽していた有様なので、当然、父が酒を飲み出してから、母は冬へ向つて着る物までも剥いでしまった。家賃、酒屋、米屋はいうまでもなく、近所の店屋には何軒も小さい借金が溜ってしまい、嘘のようだが、工場へ行くぼくの弁当箱に母が御飯を入れてくれる事の出来ない朝もあつたりした。

そんなとき、もちろん母も朝飯は喰べていない。それでも働きに出るぼくには二銭銅貨一枚を詫びるように握らせて出してくれる。ぼくは途中で焼芋を買い、半分は途々喰べ、半分は昼飯時の為に残しておいた。ほかの仲間の手まえ、何も喰べずにうろついているのは、空腹を我慢している事よりもその時間が辛かった。

日が暮れて、家路につき、案じていた家の内に、ランプの灯がついてみると、ふしぎな気がした。朝出るときは、母の帯の間に、数枚の銅貨しか見えなかったのに、どうして今夜の石油が買えたのか、小さい弟妹たちが、何を喰べて生きていられたろうかと思われるからであつた。――が、そんな晩にでも、父の面には酒氣が見えた。ぼくは不逞な気もちを内につつまながら「ただ今」という形だけを父の前にした。父から何か話しかけられても、ぼくは素直でなくなっていた。稀々、それが父の気もちにさわたつたらしく「何だ、その大面は。わずかばかりの給料を取つて、働くのを鼻にかけるのか。人間、働くのは当りまえだ。働くのが嫌なら、やめちまえ」と、恐ろしいけんまくで、呶鳴られたことなどある。

窮乏に追いつめられた母は、冬の初め頃、ついに長女の、きのという十二歳を、よそへ奉公に出すことにきめた。きのの奉公先は横浜公園近くの西洋料理店で、奥の子守さんという事であつた。同時に桂庵にすすめられ、次女のカエも、まだ九歳でしかなかったが、伊勢佐木町通りの吉野屋というお汁粉屋の小女に出してしまった。あとは乳のみ児と、四つの浜子と、小学校へ入ったばかりの素助だけなので、もうこれ以上は喰べる口の減らしようも無かつた。

二人の子の奉公先から、母はそのさい、給金の前借でもしたのであろうか。何とか幼児の冬支度などしてはいた。けれど家賃の停滞までは皆済ましきれず、家は追い立てを喰い、同じ西戸部の手狭な家へ移つた。

そこは戸部坂の細民街を西へ遠く入った丘陵の新開地で、近所もまばらだし人通りも少なかった。だから易断の看板な

どに寄り附く客は無かったが、それでも父は、おれも働いてはいるのだという云いわけのように、机を構えて坐っていた。そして何かで、母の財布に少しのゆとりでもあると、朝からでも酒を欲しがった。それも出所当時は、久しい断酒で、すぐ酔いの廻る風であったが、だんだん以前のような底抜けの酒量を發揮し出し、終日、飯茶碗は手にもせず、酒に初まって酒中に寝仆れる日もままであった。

こうなると、酒狂も以前の父に返って来た。些細なことばの端も、父の酒氣と虫の居所に触れると忽ちそれが、母を終日泣かしめるたねになった。家が広かったり、客の出入りや雇人もいた頃は、まだ父の酒狂にも、制約があったが、狭い借家では、母の逃げ交わす所もないし、父自身、俵を飛ばして茶屋遊びに出てしまう事もないので、悲劇が起きると、相互の感情が自然に疲れ切ってしまうまで、幕間まくあい無しの悲劇になった。

酒狂の父は、どうかすると、真夜半ごろ、とつぜん蒲団の上に起直って、深い腕ぐみしていたり、天井へ向って独り言を吐く。そんなことがよくあった。そして貧苦と添乳そえちに疲れきって、くたくたに寝入っている母を「おい、おい」と、無理に呼び起し「おれだってな、この儘では終りはせんぞ。いいか、意地でももう一旗上げてみせるつもりだ。貴さまあ、昼間おれにむかって、何とか、口ごたえしたが、そうこのおれを馬鹿にするなよ、この俺を」と、云い出したりするのである。

父のそうしたひがみと、憎てい口は、自身の酒量が増してゆく比例に連れて、つのッて行った。往々、子のぼくにさえ

「馬鹿にするな」と怒ったり、「稼ぎを鼻にかける奴だ」と、忌み嫌う容子を見せた。ぼくには実際のところ、そういうふて腐れを父には露骨に見せたことが無いとはいえない。けれど母はそんな気持ちの人ではない所か、貧しくなればなるほど、この良人も子供も捨てて自分だけの生きる途などは考えもしない人であった。父がそんな嫌味を云って母を泣きもだえさせたり、無茶な暴言の限りを浴びせて、酒氣ふんぷん芬々としているのを見ると、ぼくは自分も狂気しそうになり、幾たびか父を撲りかけたくなった。酒の上の心理状態などは子供のぼくに理解はできなかった。酒狂の父そのままを、父の人間と考えつめ、母と共に部屋の間まで働いた。いくたびか、ぼくはぼくだけで、よそへ出て生きる途を探しますと叫んで、台所から裏まで、飛び出したこともあるが、母に追いつがられて「英ちゃん、おまえが居なくなったら、このお母さんは、どうしたらいいの」と云われると、ぼくは一步も動けなくなってしまった。それでも父へは、ややもすると、母に代って、つい突ツかかりたくなった。そして母に泣かれて又、台所で足を拭き、家の中へ戻って、心にもなく父の前に謝った。そんな例は、前後何べんあったであろうか。今、思い出そうとしても思い出せないほど度々だった。

何でもそれは年暮に迫っていた頃だった。南仲舎から帰って来ると、まだランプの明りももっていない。しゅんと、凍こてついたように家の内がひっそりしていた。小島の小母さんの声がひそひそ聞え、四つの浜子がシュクシュク泣いている。「どうしたの、どうしたの、おっ母さん」上がるやいなや、

あわてて訊くと、「お父さんが血を吐いたのよ。そして今、お医者さんが帰ったばかりだけれど、そう御心配は無いでしょうと云う事だから……」と、母はあとの口を濁した。血と聞いて、ぼくは、どきっとした。日頃何かにつけて父へタテついていた心の咎めが、驚きと一しよに頭をつき抜けた。すぐ父の死を連想していたのかもしれない。

けれど母が小島の小母さんに話しているのを聞いていると、父の吐血は初めてではなく、これが三度めか四度めのようであった。そのうち二回までは父の遊蕩時代で、大森の「あけぼの」とか箱根の塔の沢などで寝込んだらしく、母はそばにも居なかったとの事である。後日、医者から母が戒告されて知ったのであったという。

今思えば、父は外人相手の商売上、盛んに各地の花柳界などを泳ぎ廻っている間に、すでに胃潰瘍の症状をもっていたものようである。しかし、こんどの吐血を境として、父はふつつり酒を廃めた。というよりも飲む氣力を失い、その日から再び病床についてしまったのだ。

猫のような父にまた変った。けれど、ひがみと、母への暴君ぶりだけは、依然、やんだ風は見えない。ひがみの根本は、じつは母にあるのでなく、どうも世間へ対しての、父の白眼にあつたらしく思われる。小心なほど、父は出所以来、世間をおそれ、かつ妙に世間をすねていた。あれからというものの、自分から以前の知人を訪ねたことは唯の「ぺんもないばかりでなく、旧知の者が立ち寄ってくれても、会うことはひどく嫌って、母にすぐ間の障子を閉めさせた。」「ずっと病気で臥せっておりますから」と母に云わせ、上がり口で帰してしまふ

という風であった。

そのくせ「もういちど、俺は俺の事業をやってみせる」とか、「もう一旗あげなければ死にきれない」とかと、いうような野心はよく口癖に洩らすのであった。ことばの裏には父が勝手に悩みの対象と見ている世間があり、特に訴訟相手の高瀬理三郎氏には、終世の怨恨を抱いていたらしく思われる。ぼくら肉親にはありあり分る。

けれど母の方は、こうまで、貧乏の底に落ちても、それを高瀬氏のせいであるなどと怨みがましい事を洩らした例しは一度もない。かえって、父が余りに高瀬氏の人格を悪しざまに恨み罵つたりすると、「でも、あなたのように、腕力であるな真似をなされば、高瀬さんでなくても、誰だって腹を立てますよ。高瀬さんには御恩こそうけた事があっても、恨む筋などは無いじゃありませんか」と、弁護めいた口吻をつい洩らした事もある。

かつとしたのであろう。父は起ち上がるやいなや、母を打ちのめした。足蹴にもした。子供らの眼には永遠に拭き去れない不幸な血相を父は額の青筋にも全身にも描いて見せ、あげくには自分も打ち疲れてセイセイ云いながら仆れてしまった。子供らは、息の音も止まったような母の手を両方から引っ張って台所へ逃げてゆき、泣く泣く冷めたい水を柄杓に汲んで血によごれている母の唇へ持つて行った。

要するに、父は世間へ向けられない鬱憤を、母へ向けていふようなものだった。という解釈などは、まだつかないばかりであったから、なぜ父は母をこんなにいじめめるのか、母はなぜこんな父のそばに居たがるのか、そこが唯、わけも分らず

悲しかった。肉親という不思議なきずなは、こんな地獄図を描きながらも、或る日はまたふと、薄い夜具を冬の夜に引っぱりあいながら、肌と肌をからんで、木枯らしの叫びを遠くに、この一の軒のみが、無上の住み家であるような安けさを暖め合いもするのであった。そしてぼくは、どうにも、この母のそばを離れる気にはなれなかった。もし家に父だけしか居ないのであったら、たとえ父が後でどんなになろうと、いつでも遠くへ飛び去る小鳥になれたことだろう。その不逞さを、母へは抱けないばかりか、母と一しよなら何でも出来た。母のよろこぶ一笑を買うために、どんな事もやる気になり、それには小さい生きがいみたいなのをすら密かに感じて独り慰めることもできた。

岩亀横町から花咲橋を渡って、高島町の方へ出た河岸^{かし}ぶちに、大きな立て看板が何屋か分らない店頭に立ててあった。

“小間物行^{ぎようしやう} 商人ヲ募ル。商品貸与。毎日純利一円以上、働キ次第” というような意味のわき文句が書いてあった。

ぼくは毎朝、南仲舎への行き帰りに、それを見ていた。そして、ついに或る折、恐々店へ入って「ぼくに出来るでしうか」と、訊いてみた。番頭か主人か、思いのほか、親切だった。商品から行商道具一式を貸してあげるので、十五円の保証金が規則だが、君なら特別に十円で貸してあげる。売上げと商品を見くらべて、毎日夕方に精算する。いままで、どこに通っていたかと訊ねるので、有りの儘、南仲舎で日給十四銭をうけていると答えると、そんな程度なら、ぜひこつちの行商をおやりなさい、どんな不馴れでも午前中の売上げで、

より以上の利益はきつと得られる。雨の日も厭^{いと}わなければ、雨天の日などは、かえって商いのあるものと、さかに奨められた。ぼくは神の救いに会ったような気になり、さっそく母へ話して、何とか保証金をこしらえてくれと頼んだ。

母は当惑顔だった。そんな金がいま工面のつくどころではない。いろいろ、思案のあげく、小島さんの小母さんへ母と共に融通を頼みに行ってみることにした。

その小島さんは、近くの官舎に住んでいた。税務監督局の課長さんであった。夫婦二人きりの家庭で、母とは針仕事の内職から知り合ったものらしい。常々、女の愚痴ばなしや境遇などを語りあっていたものだろう。ひどく母に同情していた。ぼくの家へも暇があるとよく喋りに来、父の病床を覗いては、冗談を云って、人嫌いな父を笑わせたりして帰るのであった。他県から転任して来たばかりのせいかな、人馴^なつこい奥さんだった。いや官吏の奥さんめいた気取りがちツともなく、からつとした陽気な婦人なのである。色が黒く、痩せ型で、三十がらみであったと思うが、決して美人の方ではない。故郷の静岡県吉原の田舎ことばまる出しで、その訛^{なま}りと唇元に愛嬌があり、ぼくらが腫^はれ物あつかいにしている父も、この小母さんにかかるのと、どんなに毒づかれても、腹を立てないのが、ふしぎであった。別人のようになって、父も冗談を云い出したりして、いつも腹を抱えて笑わせる小母さんだった。

御主人の小島市太郎氏は、小母さんとは全然対蹠^{たいしよ}的な純官員さんであった。だから小母さんは、母とぼくからの頼みを聞くと「そんな事は、主人に相談してみても、世間知らずで、

話し相手にはならないから、わたし一存で貸して上げるわ」と、翌日さっそく、郵便局から貯金を下げて貸してくれた。忘れ難い恩であった。そう強く感じたせいも、その日、小母さんが「さ、英ちゃん、しっかりやるんだよ、ベソなんか掻いているんじゃないの」と叱るように云って、ぼくら親子の前に十円紙幣を出してくれた時の、そのフシの高い手の指、その指の一つに嵌めていた肉彫りの金指環の菊模様までが、今でもぼくの眼の底に残っている。

母と一しよに、さっそく高島町へ出かけ、明日からの約束をして帰り、保証金の受取書は、小島の小母さんの手へ預けに行った。小母さんはその事のみならず、ぼくの身仕度まで心配し、家を一しよに出て、岩亀横町の露店を見て歩いた。そして編上げの古靴と学生服の古とを、ぼくの門出のために買ってくれた。

云い忘れたが年を越していたのである。正月の七草すぎか、月の半ば頃だったように思う。早朝にぼくはもう高島町へ来て、売子問屋の店に腰かけていた。余りに早くに來過ぎたせいか、奥ではまだ朝飯中のもようであった。

体験を持たない仕事へ踏み出す恐さと、さまざまな空想とで、その間じゅう胸がどきどきしていた。やがて奥から五、六人の元気のいい人達が出て来たと思うと、ぼくの姿などには眼もくれず、各々足掬えを急いで、小間物の行商箱を背に負い、さっさと一人ずつ出て行った。ここに寄宿して行商している売子も多いことを初めて知った。

その間には外からも来て、前日預けて帰った行商箱を背負

いこみ、そして前の人々のように出て行く売子たちもあった。その誰もが皆、屈強な大人であった。ぼくのような年少者はひとりもない。それがやや不安になった。

結局、ぼくはあと廻しになり、一番さいごまで待たされたわけである。やっと、店の主人が、ぼくの担いで出る荷をそこへ並べて見せた。

行商箱は、太い真田紐を両肩に掛けて、ちようど笈ずるみたいな恰好に出来ている。上段の幾重かは、印籠ぶたの段箱に作られ、その下は幾重にも、薄い抽斗となつてゐる。問屋の主人は、その抽斗の一かわ一かわに、商品をつめこみ、その品目と原価を書いた行商手帖とを、ぼくに手渡した。そして夕刻、売っただけの品物を精算して、利益金を渡し、あとを補充してまた明日担いで出るといふ仕組みである。

商品の主な物は、石鹼類、髪油、チツク、安香水、生地、の櫛、塗り櫛、白粉、口紅、化粧水、鬢ツケ、中挿し、鬚形、入れ毛と、数知れぬほど種類があり、その上に少女向きの花簪から、ザンザラ、根がけ、ちんころ、の類まで備え、抽斗全部を開けて並べれば、小間物屋の縮小がすぐ覗けるといふ配合と種別が上手に仕組んである。「ともかく歩いてごらん。断わられても、すぐ引込んでしまふようじゃ商売にはならないよ。商売は、押しと愛嬌だと思いなさい。小間物は女相手だから、女の気もちをつかまえる事だが、それやあまだ、君には難しいだろうからね。孤児院の子が、よく売るだろう、あれだと思って、負けずにやるこつたね。なあに、そう重い物じゃあない。そつちを向いてごらん、背負わせて上げるから」と、主人は手初めに、背負い方を教えてくれた。

重い物ではないと云ったが、立ってみると、ずっしり肩が痛い。同時に、何か泣きたいような辛さが胸にこみ上げていた。ぼくは、どう答えて往来へ出たろうか。道を行く人の全部がみな自分を見る見物人のように思えた。どこへ行くあてもない。自分の脚でないものが自分を支えて歩かせているような気もちだった。いわば夢中であつたのだらう。そのくせ軒並みの家や人の多い所は無意識に早足で通つてしまい、場末の淋しい方へとばかり自然に足が向いてしまふのだった。

白い行商手帖

行^{ぎやうしやう} 商流行期ともいえる時代が、かつては世間にあつたようである。

今のような百貨店配達や小売店網がまだゆきわたらなかつた過渡期には、背負い呉服やら、唐物^{とうぶつ}、薬種、雜貨荒物、文房具、煮豆の類まで、多くは行商人たちの足が各戸の需要にこたえていた。だから、ぼくのやつた小間物行商なども、今考えると頗^{すこぶ}る間の抜けた商売に思われるが、当時では、おかしくもなく、また結構、大の男の職業にもなっていたにちがいない。

けれど、ぼくにはさっぱり商売にならなかつた。いくら勇を鼓^こしてもだめだった。見ず知らずの家の垣を、のこのこ内へ這入^こって行くことも、締ま^ひまっている静かな格子戸を明けて「……小間物屋ですが、何か、要^いりませんか」とは、とても、

口に出ないのであつた。それが何とか出来るまでには、半月もかかっていたらう。突ッけんどんに「要らないよ」と断わられるたび、顔を赤くしたまま四、五軒は飛ばして、眼もくらく歩いてしまった。また時稀^{ときたま}、「どんな物を持つてるの」とその主婦に訊かれても、唯どぎまぎばかりして、さっそく荷を並べて勧める如才^{じやさい}も出ないでいるまに、「じゃあ、今度にするわ」と断わられてしまふなど、とても一カ月や二カ月では、遅しいあの行商人だましいには成りきれなかつた。

行商をやってみて、何よりもいけないと自分でも分つた点は、どうしてもケチなはにかみが除^とれない事であつた。少年には少年だけの知るつよい見得がある。その幼稚な虚栄と感傷は、周囲の世間が清潔で秩序立っている中ではなおさら処女^{じよ}のようだった。つねに自分のみすばらしさを世間の表面と見くらべている。いやぼくが特別、小心だったのかもしれない。

だから行商して歩くにも、市街に接した住宅地はよけて歩いた。以前の学校友達だの、父母の知人に出会うのが恐かつたからである。いま思うとその頃は横浜も場末だった平沼、保土ヶ谷、神奈川附近などの遠くへまでわざわざ行った。そしてまばらな家の門や垣を覗いては恐々と声をかけてみる程度しか出来なかつた。

これではいつまでも、売上げ成績が良くならないのも当然だった。どうかして二、三円の売上げ日などは奇蹟のようなものである。夕方、売子溜りの問屋へ帰ると、行商手帖と品物とを精算して二割の利益をくれるわけだ。だから三円売れ

ば六十銭になる。前にいた南仲通りの日給の十四銭にくらべれば先ずたいへんな増収だ。けれど、こんな日は月に一度あるか無いかだった。霜解け道を一日じゅう歩き暮らして、三、四十銭しか売れない日の方がはるかに多かった。

それと問屋の話では「女相手の行商だから、雨の日などは、かえって売れる」と聞かされていたが、これもあてにならない事が分った。売子用の貸合羽かしがつばを日に何銭かで借り、風雨の日も精励したが、膝まで没しそうな新開地のぬかるみを暗くなるまで歩いて、売上げの額はみなおなじだった。のみならず夕方の方の精算で品汚れを検出され、ただ働きの憂き目を見たりする日もあった。どうにも、こうにも、労多くして利少なく、ペソを掻き掻き帰る夜ばかりが幾月もつづいた。わが家のランプの灯を見るのは毎晩七時すぎになった。くたくたに疲れはて、一、二冊の書物を寢床にもちこんで読むのが唯一の愉しみだったが、それもランプの石油が憐れな啼き声を告げて消えてしまうとそれきりだった。ぼくの十五歳の冬の記憶は、飢えと、はにかみしか残っていない。正月の記憶もなく、とかくして半年ほどは夢中で過ぎていたのだろう。

唯ここで忽然と思ひ出してみる必要にせまられた事は、日露戦争の記憶である。ぼくの十五年の年は、明治三十九年だから、その前年九月には、休戦調印が結ばれ、十月には日露講和条約となっていたわけである。そして、同月には、横浜港外で凱旋観艦式が行われたとあるから、全市は国旗や凱旋門に飾られ、夜空は提灯行列で真っ赤に染まり、市民の熱狂ぶりは大変な騒ぎだったものだろうと思われる。

ところが、世間のそんな歓呼と戦捷風景せんしやうふうけいも、ぼくにはとん

と確とした記憶にない。あの長蛇ちやうだの提灯行列が流れてゆく熱烈な群衆の顔や打振る紙旗の波などは、幻影のように思ひ浮かぶが、その中に立ち交じったり、それを見物に行ったりした特殊な実感はないのである。

それ以前の奉天会戦とか、旅順陥落とかもぼくは川村印章店に奉公中の身であった。当時の号外屋が、祭礼の若衆姿みtainな向う鉢巻で、腰のまわりに沢山な鈴を下げ、まるで半狂乱になって戦捷を唸鳴りつつ駈ける姿を、ぼくは店の障子戸越しに、見た程度であった。花火の爆音が一日中聞えていても、港が灯と万歳に沸き返っている晩でも、じっと徒弟机に屈かがまって、家の事やら母の顔などしか頭になかったものだろう。

ただ開戦当初には、町内町内の楽隊と一しよに、戦死者の葬送について行ったり、出征者の見送りに交じった覚えなどが幾らかある。そのほかは当時の軍国調にも個々の悲喜にも判はつきりした影響は殆ど何も感じていない。いやそう云っては、同年代の人々とぼくの経歴感とが余りにも食い違うかもわからない。ぼくの場合は境遇に依るものだ。ぼくの通った、明治三十七、八年という歴史上でも重大な年は、ぼくに取ってのみ特異な境遇ではあった。だから世間の日の丸も花火も楽隊も、この少年の頭には、沁み入る余地がなかったものと思われる。——家の没落、義兄の失踪、父の入獄、職さがし、妹たちの離散、父の吐血、母の明け暮れない貧乏苦勞、など、そんな周囲ばかりを、ここ二年、ぼくは眼にして来たのである。少年期の幼い国家観念しかなかったせいでもあるだろうが、日本の浮沈よりも、毎日毎日のわが家の浮沈と、貧乏との戦

争の方が、ぼくの心を占めていたのも是非なかった。「どうしたら食べてゆけるか」を母と一しょに闘っている気持ちだったから、日本の憂いと共に憂い、日本の歎びと共に歎ぶなんて、大きな呼吸を持つひまもなかったのである。そうとでも思惟しゆいしてみるほか、その面の記憶の稀薄をぼくに糊塗するすべがない。

資本を貸してくれた小島の小母さんには間が悪いが、ぼくは行商を廃めたくなつた。厭に成りだすと歩くのがなお辛かつた。行く先々では、優しい主婦もいたり、励ましてくれる人もあつたりするが、冷めたい声で追ッ払われるのが当然な世間であつた。それも大人達にあらわれるのは、まだ我慢もできたが、同年輩ぐらいな子供にからかわれたり、行きずりの中学生の群れに何か嘲あざわらわれた気がすると、その場で行商の荷を川へでも捨ててしまいたくなつた。

けれど父はあの儘、病床についたきりだし、母の苦勞はちつとも減つていなかった。のみならず、或る晩、家へ歸つてみると、三ツぐらいな見たこともないよその女の児が、ぴいぴい泣きながら母に抱かれてサジでお雑炊ぞうすいか何かを食べさせられていた。

この児はまだ坐れないらしく、手頸も足もひどく瘦せ細うすっている。まるで肋骨ろつこつの上に細い首が乗ッかっているような畸形きけいだつた。泣き顔には小皺が寄つて、小さなお婆さんの顔みたのである。「……どこの子？ お母さん」ぼくが訊いても、母も病床の父も、共に唯、暗然あんぜんとしているだけだ。

その晩、あとで母から聞いた話によると、これは出奔した

義兄政広の子であつた。まだ家が以前の清水町にいた頃、恋愛結婚をした義兄と愛人のお八重というひとが、ぼくらと一緒にいたことがある。その後、半年そこそこでお八重は実家へ歸つてしまい、義兄も出奔してしまった事は、先に書いた通りである。

だからこの問題は、当然、とうに解消されていたはずだつた。ところが、お八重が実家へ歸つてから産んだ義兄との仲の子は、月足らずでもあつたのか、或いはひかんという虚弱體質か、三ツになつても、坐れない、歩けない、発音も満足でないという畸形児だつた。

お八重の親は、名うてな相場師で、義兄との結婚前にも、さんざん、ぼくの父を物質的にも精神的にもいためつけた程な男である。こんな畸形児を、可愛がつて養つておくはずはない。それに娘の再縁にも邪魔になる。そこで当然、「この子は、相違なく、貴殿の子息の実子であるから、引取つて貰いたい」と、再三書面や仲介人を向けて、談じ込んで来ていたらしい。

けれど、わが子の口数まで減らしている窮乏のどん底へ持つて来て、どうして、そんな虚弱な子を引取れよう。何しろ父は病人で懸合けんあいにも立てないので、母一人でただ謝りつづけていた。ところがその日、山田の使いと称する者が、人力車に乗つて訪れ、上がり口へ子供を捨てるようにして、さつさと歸つてしまったというのである。

母はまったく途方に暮れた。自分の乳呑み児もある上に、こんなひよわい畸形の子を又抱えては、明日からの手内職の仕事も台所仕事もろくに出来はしないであらう。それも、実

子の孫とでもいうのなら、これ又、諦めもつこうが、母にとつては、義理の子の、しかも、ちょっと居ただけの嫁さんとの仲に出来た置き去り子に過ぎないのである。

その晩も、夜どおし、ぴいぴい泣くのをあやしたり、しもの始末などで騒いだが、以後の養育は、並たいていな世話ではなかった。ここに詳述出来ないほど、尾籠な手数がかり、食餌の苦勞やら、日に何度もの着換えの洗濯やら、言語に絶する厄介さと、飢餓の絵その儘なわが屋根の下だった。

言語に絶するなどは、ちと誇張めいた云い方のようだが、何しろその子は、狸のように腹ばかり大きく出ていて、いくら食べさせてもすぐ食べたがり、朝から晩まで、お婆さんのような泣き皺を作つて、食物ばかり欲しがるのだった。こういう特異児の持ちまえて、肛門筋が無知覚にひとしく、その世話だけでも、母は追われ通しの姿であつた。

しかし、貧乏と、これだけの事だったら、まだまだ母は働き効いもあつたろう。が、義兄の置き去り子が来てから、更に悲惨を加えたのは、病人の父が、時々、我慢がならないように起き上がつて、その子を折檻する時の、何ともいえない悲鳴と家じゅうの暗さだった。

畸形の子は、手離しでは置けないので、藁で編んだお飯櫃入れの中に入れて、食事も口へ入れてやるのであつた。機嫌のいい日は減多になく、のべつ、おひつの中でシुकシुक食物を泣きせがんでいる。父にはそのシुकシुकが昼夜なき呵責に聞えるのではあるまいか。

父にすれば、この数奇な孫は、自分の過去を責める獄卒か

因果の変形みたいに思われた事でもあろう。——実父の自分を裏切った上、こんな置き土産まで残して行つた、ぼくの義兄政広の出奔という事が、どんなに病床の父を、やりばない怒りに悶えさせたことか。その気持ちは、母やぼくにも、分らないではなかった。

父自身も又、そんな憐れな宿命の子を、叱つたり打つたりなどした後は、さめざめと、自分が嫌厭される容子だった。慚愧にたえない姿をして、枕に額を押しあてた儘、息ぎれのやむまで、俯伏していた。そして、吐血後の胃潰瘍の症状は、この前後から、また目立って悪くなった。ただの病色だけでなく、父の顔には、極度な神経衰弱だろうが、狂相に似たものがあつた。

ぼくは、その頃のわが家と、毎日の事を、今、思い出そうと努めているが、誇張でなく、また肉親だからでもなく、ぼくは心から、ぼくの母を偉かつたと思わずにいられない。母は、その畸形な子へも、ぼくらにする愛情と少しも変らない慈愛の姿で、哺育の肌やら丹精の手を尽していた。時には、ぼく達がひがまれる程、可愛がつた。父が癩癧を起すと、いつも身を以つてその子を庇うのは母であつた。

正直、ぼくらにしてさえ、義兄の無責任を、その子へ問うように、つい厄介者としてたり、憎しみを向けたりした。けれどぼくの母には、まったくそれが見えなかった。近所の人はみな、母のほんとの子だと信じていた。その子は、やがて数年後に病死したが、まだまだ貧乏の最中だったので、葬式もしてやれなかった。

たしか母が果物屋から求めて来た空箱を柩としたように覺

えている。母は「女の子だからね……」と、その子の体じゅうをお湯で浄めてやったり、顔へも白粉や紅をつけてやった。そして果物箱の棺へ納めてやりながら「……あんたは、よほど運の悪い子ね、こんど生れてくる時は、いいお父さんとお母さんの仲に生まれて来るんですよ」と、云い聞かすような独り言を洩らしていた。

この子の葬式に行ったのは、ぼく一人であった。棺を風呂敷につつんで人力車の蹴込みに乗せ、施主会葬者、ぼく一人きりで菩提寺の蓮光寺へ持つて行った。ずいぶん気まりが悪い気がしたのを薄ッすら今でも記憶している。しかし蓮光寺では、むかしからの好誼を重んじてくれたものか、父の手紙一つだけで、べつだんお経料とて上げなかったのに、住職や侍僧が数名つらなつて、ながながと読経^{とぎよう}してくれた。

さきに家出したぼくの義兄も、義兄自身が五十前後で亡くなるまで、この事は、ついに知らず仕舞いであった。——やがて三十年も経ってから、たった一ぺん、ぼくを訪ねて来た折も、忘れ果てていたのだろうか、「——あの時の、お八重は？」とは、訊きもせず、話にも出ず別れてしまった。

少し話がわきへ反れたかたちである。その後、ぼくは小間物行商を廃めたが、廃めるには、次のような事が動機と云えなくもない。

ほんとは、とうに厭だったのだが、思いがけない義兄の子がふえたりした為、一日も遊んではいられず、毎日の行商も、泣き泣き続けていたのである。

だから成績は依然上がらない。或る晩、売子宿の店主から

こう訊かれた。「いったい、君はどの方面を歩くんたい」「平沼から、保土ヶ谷や青木町なんかですが」「ばかだなあ。あんな新開地は、畑や山道が半分以上じゃないか。君の家は、前にいい暮しをしていたっていう事だが、少し、知ってる家を廻ってごらん」「……………」「親父さんが懇意とか、お母さんの親しい家だつてあるだろう。そういう所から順ぐり歩いて、もう少し、ちゃんとした住宅地を歩くこつたよ。犬に吠えられたり、女中に断わられたりしても、すぐ引ッ込んでしまふんじゃ、いつまで、行商で飯は食えないぜ」励ますつもりか、売子宿の店主は、ぼくを馬鹿扱いにして云った。

知人の家を廻つて、買つて貰うなどという事なら、何も入れ智恵されるまではない。けれど「それだけはおよし……」と母からも云われていたし、ぼくにも小さな見得がある。意地という程、はつきりした気持ちではないが、廉恥があつた。——しかし、売子宿の店主から、そう云われると、何か安易な気もちもして、依頼心をそそれ、行かないのは自分の馬鹿なせいかもしれないと思つた。又、沢山な売上げを得て、店主の前に、誇つてみたいような気も手伝つた。

それから数日後、ぼくは方向を更えて、山手方面を歩いた。そして、歩くにまかせて、父の以前の知人をたずね、間の悪さを忍んで「この頃、小間物の行商をしてるんですが」と、顔を真っ赤にして云つてみた。ハー・アーレンス商会に勤めている三浦さんの家で、競馬石鯨一箱を買つてくれた。富樫夫人の家は留守だった。その日だったか、翌日だったか、おなじ山手の牛島坂に新邸を建てた古川某と標札の見える宏壮な門をくぐっていた。

この古川氏は、父が棧橋会社経営の初期には、波止場人夫の小屋を持って、振りの人夫売込みなどを業としていた人らしい。父は人を信じると一本ヤリな質^{たち}なので、この人の人間にも惚れこんで、会社の専属に取立て、社の請負った棧橋の積込み、沖仕事、石炭の売込みといったような下請けの一切を、古川氏に委せていた。それが因^{もと}で古川氏は成功を積み、牛島坂の高台に、横浜中を一望にできるような高樓と庭園を作って、今では波止場仕事からも一切手を引き、余生を楽しんでいる風だった。

ぼくの行商箱を拡げるには、そこは余りに似つかわしくない豪壮な玄関だった。初め女中らしい人が、怪訝^{けげん}な顔をして奥へひっこんで行ったが、やがて古川氏の奥さんが出て来て「あら、まあ、吉川さんの息子さんなの……」と、びっくりしたように、頭からぼくを眺めた。ぼくはどう云ったろうか、どうせ満足な口はきけなかったにちがいない。見ず知らずの家で冷やかされるのとまた違って、耳が鳴り、口が渴き、この間の辛抱は何ともいえない。

体のずんぐり短い奥さんは、黙って奥へ行ってしまった。どうするのか、ぼくにも分らず、むなし、貧しい商品箱を並べた儘で、ぽかんといつまでも立っていた。

すると今度は、奥さんだけでなく、当の古川氏が、丹前の上に縮緬^{ちりめん}の兵児帯をだらりと締めて、ふところ手で一しよに出て来た。お嬢さんたちだろうか、ぼくと同年齢ぐらいな振袖の女の子と、もっと年配できれいな人も、そろそろ来て、「どこの子？」と囁いたり「まあ、ずいぶんいろんな物があるわ

ね」と、商品の箱を覗いて、何かクスクス笑いあった。

古川氏は、足もとの商品などは見てもくれず「いつから初めたのかね」と、ぼくの姿ばかり見ていた。以前は、盆とか暮とかには、夫婦して眼を驚かすような贈り物を持って来、酒が強くて、父とも終日談笑していた事もある。殊に、何の祝いの時であったか「英ちゃんに、別誂えの洋服を頼んでおいたから」と、ぼくを俥に乗せ、南京町の支那人の裁縫師の店までわざわざ仮縫いに連れて行かれたことなどもある。そういう人だけに、ぼくはよけい間が悪かった。きれいな女性の眸も身を刺されるようで、唯、赤面していた。

古川氏は以前から灰色に近い皮膚をして、眼のふちも唇も薄黒かった。その上ぶよぶよと肥大した体つきであった。その巨きな影に、ぼくは圧伏を感じていた。何か、後悔^{しき}が頻りにわいていた。が、古川氏は、小犬をつかまえて、からかっているような口調で「売れるかね」と訊いたり、又「一日、幾らになるんだい？」と云ったりして、一こう買物には手を出してくれないのだった。

のみならず、何かのことから、父の噂を持ち出して「君のお父さんの病氣は、自業自得だよ」と云い「いったい、君の親父さんてえ人は、思い上がったいたな。自分はまあ、さんざッばら、やりたい事をやったんだから、いいようなものの、子供にまでこんな真似までさせちゃあ、寝ざめがよくあるまい」と、ぼくへもお説教みたいな事を云い初めた。

ぼくへのお説教だけなら、なお素直に聞いていられたかもしれないが、古川氏は、腹をゆすぶって、ぼくの父を嘲い、父のざんそを、さんざんぼくへ云うのであった。そばにいた

奥さんさえ、ぼくの涙を見、聞きかねる顔して「もう、およしなさいッてば」と古川氏の袖を引くほど、ぼくの父を、悪しざまに云った。

夢中でぼくは、商品箱を畳んでいた。みんなの眼のまえで、それをどう肩にかついだろうか。まったく今は覚えがない。

でも古川氏の奥さんが、あわてて半紙にくるんだ物を、ぼくの手へ握らせたことは覚えていいる。きつと、なにがしかの金であつたろう。けれどそれも無意識に、どこかその辺へ打っ抛つて来た。

——後も見ずに、まったく後も見ずというのは、あんな時の事かと思う。ぼくは門の外の石段を駆け下り、まだそれでも足りないように道をいそいでいた。やっと涙の乾いた顔を上げた時は、どこか知らない裏通りに灯がついていた。

わが盗児像

その日限りで、ぼくは行商人を廃めた。知人でもあり富豪でもある人の門に、耐え難いものを持ったのであった。同時に、見ず知らずの他人の垣に立って憐れみを乞うような真似もふるふる嫌になつてしまったのであった。

あきらかに、それは古川氏の邸宅へ行商に行った日が境で、また廃めた動機でもあった。けれどそのことは父母には話さなかつた。だから両親は急にぼくの容子が違つて来たのを理解出来なかつたことだろう。こんなばあい、厳格すぎる男親

の下にある少年は、心のものを率直に現わしえないで、それを妙なじぶくり顔や別な恰好に出して、幾日も無口になつたりするのであつた。病床の父は、単に懶惰な子の不良性を見てか、時折、苛々している容子だつた。

廃めてから一週間程たつて、行商売子の問屋から「預かつておいた保証金を返すから取りに來い」という通知が来た。行つてみると、十円入れた保証金なのに、六円幾らしか返してくれない。行商箱の損料とか、雨具や店舗使用料だのと、いろんな名目で差引勘定がされている。ひどく不当に思われたが、大人でさえこの手に泣き寝入りを見せられていたのだろう。是非なく、渡されただけを持って帰り、母と一しよに、さつそく小島の小母さんへそれを返済に行った。

男氣な小母さんは、母が詫びて「不足分はいつかお返しいたしますから」というのを打消して「いいよ、いいよ。世間はお互い持ちじゃないの。それよりも、英さんはこれからどうする氣」と、ぼくへ訊ねた。

ぼくはこの小母さんにいつか甘えきつた氣持ちになつていたらしい。とても出来ない相談に極まつているのに「ぼくは中学へ入りたいんです。どんな苦勞してもいいから」と、真剣に訴えてしまった。母は聞くのも辛そうに顔をそむけたきりだつた。しかし小島の小母さんは、まともに、ぼくの顔を凝と見つめて「ほんに、そうだろうね、ああ、よく分つてゐるわよ。だがね英さん、あんたが働かないで誰が今、おつ母さんの力になつて上げるのさ。だから夜学でもいいじゃないの。昼間は働いて、夜学に通えるように小母さんも考えといて上

げるからね」と、頻りになだめてくれた。ぼくは他人へのひがみを抱きながら、この人のような前では、涙も涙も一しょくたにして、だらしなく顔をこすった。

小母さんはその後、ぼくの職業やら勉学の道を夫君の小島市太郎氏に相談して内々心配してくれたいらしい。けれど税務監督局の一官吏に過ぎない小島さんなので早速な思案もなかったろうし、ぼくの母もこれ以上の世話になるのはと、慎しみがちに、わざと不沙汰していた。というよりも母は、ぼくの稼ぎも無くなってからは、一そうその日その日の凌ぎに追われていたことだろう。依然、父は病床の儘だし、その暴君ぶりは募っても衰えはしない。前述の義兄の兄の世話も大変だった。一体、母はどうして毎日の家計をやったか。芋粥で一食を過ごしたり、ランプの石油も買えない晩もあったりして、子供心にも、極貧さは身に徹していた。

わけて又、父は煙草好きなので、煙草が切れると、不機嫌を超えて狂人の相になり「煙草がないっ。煙草ぐらい、何とかならないのか」と、病床で喚いたりした。そんな時の母のおろおろ姿は見ていられなかった。母は唯一枚の着ている衾まで質草に入れ、以前、みどり屋の暖簾としていた物を腰に巻いて外へも出られずにいた事もあった。この当時、母がふと洩らした呟きで今でも忘れ難い一語がある。それは「――朝、戸を開けなければならぬと思うと、私は毎朝、夜が明けるのが怖いよ」と云ったことだった。

父は自分がいつまで病床から起てない焦躁を、やたらに子のぼくへ向けて爆発させた。ぼくには職を探す能力が足らな

かった。暇があると書物にばかりかじりついていた。その姿が怠け者と見え、腑がいなく思えるのであろう、何かで激語になると「この、穀つぶしめ」とぼくを呶鳴りつけたりした。

ぼくはあてもなく家を飛出しては、夜おそく帰った。書物を持ち出しては古本屋へ売り、それを小費いとして遊ぶことを覚えた。羽衣座、賑座、喜楽座と大入場の中に潜って終日を過しながら、家には職探しに歩いたような顔をして帰った。木戸銭も無い時は横浜公園のベンチで塩豆が何か齧っていた。おなじ年頃の不良少年がいくらも居た。浮浪者もうようよいる。そこでは何か安息感に似たものにくるまれた。彼らはすぐ話しかけて来、時には協同行動をすすめてくる。ぼくは臆病なので彼らのような大胆にはなれず、危険を感じると尻込みしたが、小さい悪事にはくつついて歩いた。そして些細な分け前にありつくと、公園の木蔭で貪り食った。多くは、南京町の裏だの、元町のお薬師さまの縁日だの、砂糖馬車の入る倉庫などから掻つ攫つて来る物だった。

しかし、公園の悪の巢は周期的に警官の一掃に会う。すると、その日から仲間は人ツ子一人見えなくなる。公園に行けない日は、ぼくは伊勢佐木町をうろつき廻った。売る本も無くなっていった。汁粉屋の小女に奉公している妹の力工を店の外へ呼びだして「お母さんが困ってるから」と偽ったりした。そしてまだ九ツに過ぎない幼い妹が、お客からツリ銭の端を貰う毎に可憐らしくも貯めている小銭を巻きあげて、買喰いと芝居の立見に費ってしまった。

その頃読んだハムスの「飢え」の中に、主人公がいささかな腐肉の附いた牛骨を道で拾い、それを齧ったあけく路傍

でヘドを吐くところがある。あの主人公とおなじ飢渴がぼくの眼をぎらぎらさせていた事だったろう。何しろ家にいるのが辛いばかりに、毎日家を出て唯ウロついていたのである。或る晩はベンチに寝て、ついに家に帰らなかった。「穀つぶし」と呶鳴った父の顔をえがくと、いつまでもこの儘でいたいし、母の姿を思い出すと無性に母のそばへ帰りたくなった。

そのうちに公園で知った不良仲間連れられて、第二波止場の埋立て地へ、やつと仕事に通うようになった。

今でいう土建屋の仮事務所みたいな物が埋立て地のまん中であつた。朝、首を揃えて集まると、その日その日、いろいろな雑役を親方から命じられる。杭打ちと称するヨイトマケの女たちも手甲脚絆で大勢集まつた。幾十組ものヨイトマケの唄声で今の第二棧橋辺の広大な埋立て地の毎朝が明けていたといつてよい。ぼくらは市内への使い走りだとか、弁当配りだとか、暇があると丸太担ぎもやらせられるといった風に追ひ廻されていた。夕方になると日給で三十銭ずつその日にくれた。

ここへぼくは二た月三月通つた。春から夏頃までだった。

ヨイトマケの女たちは、ぼくだの事務所ボーイの敏公などが近くを通ると、さかんに猥らな唄を唄い囃した。そしてぼくらが顔を赤くして走るのを見てよろこんだ。たとえば、筆下ろしはまだだろうとか、可愛がつて上げるから晩において、というような盆踊りめいた原始調を、あのヨイトマケの節に合せて、音頭取りの女が即興詩人のように唄うのだった。女だてらといおうか、ずいぶん大胆な猥歌を唄うのだ。ぼくは

顔を赤らめて逃げる風をしながら、じつは自分が女に意識されてゐる歓びを感じていた。胸を弾ませた女たちの中には編笠かぶりや姉さん冠りの若いきれいな女もかなり交じつていたからである。

事務所に寝泊りしてゐる敏公という少年は、元町警察署から表彰されて、新聞にも出たり親方も感心してゐる親孝行少年というので評判者であつた。当人もそれを自慢してぼくに逐一の身の上やら表彰式で撮つて貰つたという写真を見せたりしたことがある。その時ではなかったが、或る時この敏公が、ふところから大事そうに取出して「見せてやろうか」と、一枚の春画をぼくへ示したことがある。ぼくはそれまで、表彰された敏公というので、自分のような不良ではないと考え、内心、彼に畏敬を持つていたが、それを見せられたので安心したり又、親近感を持つようになった。だが、ぼくの方は臨時雇なので、間もなく「もう仕事もないから、明日からは来なくてもいいよ」と、あっさり解雇された。仕事に離れる事よりも、ヨイトマケの唄と別れる事の方が正直何となく淋しかった。

かねがね心がけてくれた小島さん夫婦から「税務監督局の給仕さんに欠員の口があるが」と、母まで知らせてくれたのは八月か九月に入つてであつたと思う。

が、その前に、ぼくとして書いてしまわなければならない事が残つてゐる。

監督局の給仕になる前の一、二ヵ月を、ぼくは再び職探しにぶらぶらしていたものだろう。季節もお盆前後の事と覚え

ているから、その期間としてほぼ間違いない。

或る夕方、母は蚊うなりのする台所に腰を下ろして、ぼんやり溜め息をついていた。途方に暮れた顔つきだった。母がそんな眸でいるのは何を意味するのかぼくにはすぐ分かった。晩に食べる物が無いに極まっている。無いとなると上ゲ板の下、漬物樽に一個の茄子、一切れの菜漬さえ無くなってしまうのだ。ぼくは母を慰めるつもりで何かあても無い事を云って出たのかもしれないし、唯、黙って足を早め出したのかも分らない。とにかく、それから間もない後、ぼくは遠くもない郊外の真っ暗な傾斜地に立っていた。眼の下に大きな池があった。池のふちまでが馬鈴薯の段々畑でつづいている。星の光がすべて、神の眼か世間の人の眼のように見えた。罪を意識しながら犯行に出るまでには、恐ろしいたたかいが自分の中で動悸していた。

それだけに、過去の中でも、このときの事は、非常に強くあざやかである。池の向う側にある疎林の丘には、県立第一中の校舎が夜目にも見えた。自分が希望していついに入れなかった学校である。その遠い白い壁が妙に気になった。その窓から以前の学友たちがこつちを見ているような恐怖なのだった。しかし、一瞬後のぼくは、馬鈴薯の葉に身を埋め、ほこほこする黒土を両手の爪で無我夢中で掘り起していた。続々と薯のころげ出てくる穴へ、さらに手を突ツこんで深く掻き搜した。畑の黒土は下へゆくほど、人肌みたいな温かさを持っていた。薯はすぐ一と風呂敷に余った。ぼくはそれを抱えると脱兎のごとく夜露の縁を切って逃げ出した。誰かに謝りながら走っていい、走っても走っても恐怖に追いまくられ

て、真つすぐ家の方向へは走れなかった。

その晩、飢餓の一家は、塩ユデの馬鈴薯をふうふういって喰べあった。元よりぼくの薯泥棒を父は知ろうはずがない。だが、母にもその行為を叱られたような覚えがないのを見ると、母も背に腹は更えられぬ思いで子の盗みを許容していたものだろうか。とすれば、ぼくの一家はその頃じつに危うい淵にあったというほかはない。ぼくはその夏、おなじ事を二、三度やった。

否みようもなく、ぼくには盗癖があったようだ。小学生当時には、母の小銭をかすめたり、店の銭箱へ手をつこんだ経験がある。いやそのほかにも一度、野毛坂の古本屋で、盗みを犯したことがある。よくやる店頭の下読みをしているうちに、無性に欲しくなつて来たのである。ふと見廻すと、店の主人は奥で朝飯を食べている様子だった。ふらふらと、ぼくは一冊の本を持って盲目的に駆けていた。すると古本屋の主人の恐い顔がすぐ後ろに迫った気がした。左側は伊勢山の高い石垣だった。ぼくは恐怖と後悔から手の書物を石垣の下の小溝に抛り捨てた。夢中で逃げた。そして、それから数日後の夜、そつと野毛坂を通つてみたら、捨てた本が、まだ小溝の流れに洗われていた。けれど以後、幾月もの間、ぼくは昼間の野毛坂が通れなかった。

環境にも依ろうが、少年時代には、少年共通の盗癖みたいなものが、誰にも多少ずつはあるのではあるまいか。

公園の不良と共にぼくもやったが、あの縁日荒しだの、砂糖馬車の抜き取りなどの類は、一見、ひどく不逞な悪行のよ

うだが、物質の目的よりは、面白半分の方が勝っているとい
ってよい。彼らの冒したがるスリルと集団性が醸し合う小悪
魔的な跳躍なのだ。野放しにしておけば、いくらでも本格的な
悪へ成長してゆくだろうが、それに交わらない通常の児童に
おなじ素質が無いのではない。菊池寛氏の「啓吉物語」であ
ったか、果物屋の林檎を盗む中学生たちの遊戯的盗癖が、書
かれてあったが、彼らの盗癖は遊戯と同居し、協同して外部
へ働きに出たりする。その潜在はかなり理性をそなえた大人
となっても「自分にはないもの」と馬鹿にしているわけには
ゆかない。

と云っても、自分の過去の科を正当づけるつもりでは決し
てない。いやな記憶は一生に亘ってつきまとう。こう書いて
いながらも自分でさえ覗くに恐いような心の割れ目が記憶の
底に刻まれている。殊にぼくのばあいは馬鈴薯畑といい古本
屋の一例といい、単なる児童心理とは云いくるまれないもの
がある。あきらかに意識しての行為だった。それだけに長く
自責されるだろう。いつか読売紙上の「折々の記」でも書き、
又ここでも書かずにいれないでつい書いた。よくよく拭い去
れない古傷のようである。

だが、母でさえ、ぼくの行為を知りつつそのときは、ぼく
を叱らなかつたという事は、もっと恐ろしい事だった。――
小島さん夫婦が税務監督局の給仕の口を世話してくれたのは、
じつにそんな危機だったから、神の助けみたいなものである。
さっそく試験をうけ、いかめしい辞令書を貰った。月俸七円
也であった。

横浜税務監督局は、岩亀横丁へ曲がる戸部の大通りにあつ

た。煙草専売局支所と一つ構内にあって、赤煉瓦の洋館の方
が監督局であり、半工場的なバラック建てが、専売局の支所
だった。

白い作業服を着た女工たちの半身が、工場の窓に並んでい
た。ぼくらの常に通う正門道から片側の芝生に望まれるので
ある。どの女性も看護婦みたいな清潔さに見え、ぼくら給仕
は、彼女らの視線の中を使いや用事で通り過ぎるのを光栄に
していた。そのうちにすぐ彼女らの顔のうちでも、或る特定
な顔と眸を交じえたり笑顔を交わすようになり、間もなく又、
彼女が工場から退けて、自分の着物や帯に返り、お弁当箱を
抱えて帰る姿まで見届けていた。白い作業服の彼女は崇高に
まで見えたが、薄汚れたメリンスの袂やらお太鼓結びの帯に
なった身なりは、やはりただの貧乏人の娘にすぎず、何とな
く興ざめたものだった。

ぼくは本間君という先輩の給仕と二人で階下の広い属官室
の一隅にボロ椅子を与えられていた。本間君は専売局の女工
という女工の半分くらいまでの名を知っていた。その中の一
人と日曜日に本牧の海岸へ遊びに行った話もした。ぼくは羨
ましげに聞きほじった。ここに長くいる間には自分にもそん
な幸運が巡って来そうな気がした。「そのうち、君の好きな子
に紹介してやるよ」と彼は云った。ぼくは息づまるほど本気
な顔をして頷いた。

属官室の正面にある懸時計は、懶いチクタクを一日中繰返
している。折々刻み煙草の煙管を叩く音や、ペン、算盤、咳
払いなどが沈澱した空気をよけい重くしていた。どれもこれ
も猫背がちな姿には、和服に袴もあり、薄汚れた背広に固い

カラーの人もいた。ハイカラという流行語が生きていた時代である。その中から「給仕っ」と、一種の調子をおびた声がかかる。命じられた書類などを持ってほかの室へ行く。水曜日には東京の本省から事務官の出張があり、事務官の室へも行った。

事務官は若い瀟洒な金ブチ眼鏡の官吏さんであり、広い一室と立派な卓に構えていた。この人の卓へ、初めて書類やお茶を運んでゆく前に、ぼくは温厚な老守衛長から、お作法の予習をうけた。九谷焼の湯呑茶碗を茶托に乗せたのを目八分に捧げ、ドアの開け方、足の運び方、退歩の礼など、ずいぶんやかましい躰けであった。だから第一回のときには、手がふるえた。よほど偉い人と思われたのであった。

五時には退ける。朝も今までの何業よりも遅くていい。間にも、本など読めた。それに白衣の女神たちとも眸を交わせるし、ぼくは今までにない明るい足どりで通勤をつづけていた。けれど小島の小母さんは、すぐぼくに夜学をすすめ、あちこちの夜間中学校から規則書を取り寄せてくれたりした。

ところが、何があったのか、秋頃から小母さんはぼったりぼくの家に見えなくなった。母は何も語らない。けれど何かがあったに違いなかった。どうかした拍子には父の感情的な口吻が洩れるのだった。「女らしくない女は俺は嫌いだ」と云い「少しばかり世話になったからって、そうそう立ち入られて堪るものじゃない。英の方針だの勉強だのと、そんな事は、親として百も承知だ。それをあの調子で俺をやりこめるまで、ツベコベ云やがる」と、父は憤慨した。さては、ぼくの事から小母さんと父とが口喧嘩にでもなったのか。それならぼく

は夜学など諦めてもいい。そう思った事であったが、なお母にたずねてみると、そればかりではなかったらしい。父は小母さんの俠気に乗じて金の無心か何か持ち出したものらしい。それでも小母さんは好意をもって例の気性から「何とかしましよう」と引きうけて帰ったが、夫君の小島氏が承知せず、絶交せよとまで、不快にそれを取った。母はそれをぼくへ話しながら「……無理もないのよ、小母さんの立場は。……お父さんを悪く云うんじゃないけれど、まったくお父さんという人は」と、小島さん夫婦の方に同情していた。そして「そんな事を、あの人たちに云えた義理ではないのに」とも嘆いた。

まもなく小島さん夫妻は、どこか近県税務署へ栄転してしまった。引越し先の通知も来なかった。母は「何一つ恩返しもできないで」と、くよくよ独り詫びていた。しかし父は曖昧にもそんな事は云わない人である。腹では悔やんだり詫びていても、口では、「何だ、何がお世話になったものか。七円ばかりの給料しか貰えない所へなど世話しやがって」。そんな悪たれをいう病人なのだ。ぼくは、その一語を耳に挟むと、その日に「廃めます」と、父へ云った。「廃めて、勤め口があるのか」と、父が気色を更えた。ぼくは反抗する為の反抗語をさがして父の色をなお突いた。「ええ、有っても無くても、廃めたらいいんでしょう。どうせ七円ばかりの給料なんか、家の足しにもならないんでしょうから」。すると父は「貴さま、いつそんな口をきくようになった」と、頭から一喝した。負けずに、ぼくも口ごたえした。激すと、父は忽ち顔を朱にして烈しい咳に咽んだ。持病の胃潰瘍のほか、この頃から、父

には執拗な喘息^{ぜんそく}が併発していた。咳き込むと、数時間は、母に背を撫でさせて苦しむのである。だから母は、ぼくが父へ反抗を示すと、台所にいても何処にいても、すぐ駈けこんで来てぼくの方を叱った。ぼくは母に叱られるのは何ともなく、母に負けるのも口惜しくはなかった。けれど「謝れっ」と言い猛る父には、嘘にも手をつかえて謝れなかった。

それも結局は、母の為に自分をまげて、「すみません……」と、手をつかえるほか無かったのだが、どっと涙があふれ出てとまらなかった。ぼくは何度も、自分の母の兄弟から二人の発狂者が出ていることを思い出して、ふと慄然となる事があった。事実、父と争って、疾風のごとく外へ飛び出し、一晩中、母を瘦せる思いにおいた事も一、二度ならずあった。それとぼくにはいつか少年らしい明るさが失われ、ややもすると独り物蔭へ行って泣き抜くような性情が強くなっていた。そして、それも父の癪に触ることが多かった。父はぼくを不良な生れ損^{そこな}いみたいによく面罵した。事実、ぼくは成長するに従って、父に少しでもよい面を見せようとはしなかった。故意に、父を憂えさせるような素振りや仕向け方ばかり見せた。

暮の近い十二月であった。母は思い余っての事だったろう。厚ぼったい手紙を書いて「英ちゃん、東京まで一人でお使いに行ける?」と、ぼくへ云った。

渋谷の松濤園が開放され、その頃その土木工事監督に、母の実弟山上三郎が勤めていた。「三郎叔父さんの所へ」と、母は父に内緒で云うのであった。汽車賃だけを握って、ぼく

は東京へ行き、松濤園の工事作業事務所を訪ねた。

三郎叔父は以前、長いこと、ぼくの家に食客をしていたことがある。だから顔はよく知っていた。「暢気屋さん——」という綽名^{あだな}があり、始終ニコニコしている人柄のよい小肥りな青年技師だった。だが一度、精神病の発作を起して、長く入院していたことがあり、その後回復して、鍋島家との縁故からそこに勤めていたのである。

手紙を読むと「しようなないな、姉さんもいつまでも、これじゃあ」と呟いて、一円紙幣を一枚封筒に入れてくれた。そして工事場へ行ってしまったので、ぼくもすぐ帰るほかなかった。けれど汽車賃は、行きの片道分だけしか持って出なかつたので、汽車に乗るとすれば、封筒を破って、一円紙幣をくずさなければならなかった。その一円紙幣を、くずす気になれなかった。その儘、母へ見せてやりたいと思い、とうとう、渋谷から横浜まで、道を訊き訊き、歩いて帰った。足を棒のようにし、腹もぺこぺこになって、やっと家へ辿り着いたのは、何でも夜半過ぎか夜明けだった。

しかしこの一円紙幣も、もちろんすぐ焼け石に水だった。奉公先の力エや、きのなども、年暮には僅かな給金を貯めたのを持って、母の顔を見にちよつと帰って来た。長女のきのは、これこそ暢気屋さんで、わが家の貧乏などは、眼に映らない質^{たち}だった。芝居見物に連れて行かれた話やら、奉公先の主人の豪奢な生活などを、笑いまじりにキャツキャツと話して、さっさと勇んで帰ってゆく。カエの方は、まるで性質も反対だった。来ると母に「お母さん、納豆売りしてもいいから家に居たい」と、いつも云った。父は、きのの方が好きで

あった。

ぼくは今度こそ、家を出たいと思っていた。

諸所の口入れ所を歩き廻った末、日の出町の周旋屋で、よい口があると云われた。先はおなじ日の出町一丁目の続木商店であった。もう大晦日おおみそかも近い日であった。ぼくは周旋屋を通して、いくらかの給金の前借を頼んだ。目見得をする、それも先方できき入れてくれた。ぼくは、前借で得たなにがしの金と、周旋屋の婆さんがくれた菜漬をブラ下げて、大晦日の晩、家に帰った。そして続木商店へは五日から住み込みで勤める約束をしてきたことを母に告げた。そして金を見たらよろこんでくれるだろうと一途に思っていたところ「……住込みかえ？」と云って、母は世にも淋しげな顔をした。白い涙のすじを頬に見せた。母はその年暮頃には、もうぼくにも分る大きなお腹をしていたのである。ぼくが家に居なくなるのは堪え難い心細さであったのだろう。父へたいしては、多少、復讐気味な反抗心さえ抱いていた。ぼくも、母の案外な反射を見て忽ち後悔していた。けれど、母もぼくが前借までして来た気もちを、よろこんでくれなかったわけではない。むしろ悲しい欣うれし泣きだったのかもしれない。ぼくは弟を連れて、戸部の大通りにある年の市へ出かけ、露店ののし餅やら輪飾りなどを買い歩いた。

小俳人

続木商店は食料、洋酒、雑貨を商あきなっていた。日の出町通りでも屈指な店舗だった。が、小売はどうでもいい風で、ほんとの営業活動は横須賀支店の方にあった。看板には「内外雑貨海軍御用達」とある。つまり横浜本店はその仕入部と、主人夫婦の住居をかねたものだった。

ぼくはこの丁稚てうちに住込むと、その日に名前を改められた。主人から「英吉としなさい」と云い渡されたのである。以後、主人夫婦は英吉と呼び、ほかの店員や奥の者は、英どんとぼくを呼んだ。

主人の続木氏はやや背は足りないが色白で小肥りな紳商然たる人で、やたらに金齒や金グサリや金ブチ眼鏡など光らせている嫌味を除けば、四十がらみの好男子で、いつも上等な葉巻を咥くわえ、大丸髻をきれいに結い上げた若いきれいな御しんさん（御新造さんの略、おかみさんのこと）を携えて、本店と横須賀支店とを一週間おきに往復していた。

間もなく店員たちの蔭口で知ったが、御しんさんはもと真金町遊廓の神風楼でお職を張っていた全盛の花魁おいらんだったとの事である。が、そんな前身は、みじん感じられず、今でいう八頭身型の美人であった上、教養もあるらしく、常に容姿はくずさず、旦那の続木氏と並ぶと御しんさんの方が立派ですらあった。ぼくら丁稚番頭たちは、よくこの美男美女の若い

主人夫妻が人力車をつらねて出入りするのを店で送り迎えするのだったが、御しんさんの姿には往來の人も足をとめる程だった。しかし店の通い番頭から奥の者まで、どっちかというと旦那よりはその若くて美しい御しんさんの方にみなビリビリしていた。「御しんさんに嫌われたらこの店には勤まらない」という風がどこかにある。まだ新米の小僧にすぎない身にも、自然世間的な神経がそんな風にぼくを大人おとなびさせ、ぼくも御しんさんから「英吉」とよばれるとき、特に気を働かせたようだった。

他人の家の御飯はこれで二度目の経験である。だから初めて川村印章店へやられた時みたいな幼さはなかった。年老った通い番頭、住込みの若い店員、先輩の小僧中僧などに追いつかされても、けっこう元気でよく働く英どんではあったようだ。——けれど唯、また家を離れてみると、あんな悲惨なわが家なのに、相変らず家のことのみが忘れられない。ぼくの性分なのか、余りに母の肌がよすぎたせいなのか、ぼくが出た後、どうして暮しているかと、そればかりは念頭を離れなかった。

すると、住込んでからまだ一カ月と経たない或る夕方のと、九つになる弟の素助の影が、一人で前の舗道を行ったり来たりしている。店にいたぼくは、すぐ胸騒ぎを覚え、あわてて外へ出た。そして「何しに來たの？ 家に何かあったの？」と訊ねたところ、弟はベソを掻き掻き、お使いに來たわけを訴えた。それは何でも「きのうから家じゅう御飯も何も喰べていない……」というような意味だった。途方に暮れ

るとはこんな時のことか。ぼくは胸がつぶれてしまい、どうしていいか分らなくなつた。唯、咄とつさ嗟には、ちょうど持合せていた五錢白銅が一枚あつた。それはこの頃毎晩のように九時か十時という時、主人の御老母の部屋へよばれて、按摩あんまをするのがぼくの日課となつていた。ぼくはさんざん父の足腰を揉まされた経験があるので「英吉がいちばん上手や」と御隠居にほめられていた。そして数日前に、御褒美に貰つた五錢なのである。それを弟に持たせて歸したが、いくら物の安い頃でも白銅一個で一家の飢えがしのげるとは、ぼくにも考えられていない。

やがて夕飯になつたが、飯も喉に入らなかつた。自分だけがこんな飯や汁も口に出来るといふ事自体が悲しかつた。で、通い番頭の平井さんが帰りかけるのをつかまえて「母が急病なので今夜だけお暇をください」と頼んでみた。平井老人は「さ、旦那もお留守だし」と難しい顔をしたが、結局、御隠居さまに一応伺つてから「じゃあ、十一時までに歸るんだぜ。十一時までだよ」と許してくれた。

その口吻に甘えて、ぼくは又「お給金で返済しますから」と、店の陳列にある牛缶を二個前借した。それを持って、その晩、西戸部のわが家へ駈けるように行つた。

ところで、後々まで、このときのぼくの失敗を、生前の母ともよく思い出しては笑い話にした事だったが、ぼくは弟の知らせで、一家が餓死寸前の急場のように感じたので、家へ行く途中で、蕎麦屋そばやで蕎麦のカケを幾杯か注文していた。とにかくすぐ食べられる物を算段するため少年の頭脳でありつたのの智慧をしぼつたつもりだった。

じっさい、それは病床の父から幾人もの小さい弟妹たちの餓死をくいとめた物ではあった。行ってみると母すら力を失って仆れていた。きのうから一食もせず、雨戸も開けず一日を唯飢えの中に、墓場のように寝ていたというのである。

今のような民生委員制度も何もないあの時代では、おそらく一家が餓死しても、餓死した後でなければ、近所隣りも気がつかなかったであろう。又、そうなるまで、なす術も工夫も知らないぼくの両親ではあった。だから、ぼくの後からすぐ蕎麦屋の出前持ちの景気のいい声と共に、そこへ運ばれて来た蕎麦のカケは起死回生の物だった。まったく、どんな歓喜と慄えつくようなよろこびでそれを啜り合ったことか。それを今、思い出そうと努めても思い出せない。昨日の事に過ぎないあの終戦後の餓鬼道にちかい味覚や雑多な体験も、ぼくらはもう忘れかけている。と同様に、その折の記憶は前世の紀層化してしまっているようだ。唯、忘れ難いというだけのものを残して生きつづけて来た。忘却は救いだが、思えばぼくを横着な者にもしている。

牛缶一個を切り、その汁にまで湯を注いで皆で飲み合い、ぼくは一先ず安心して店へ帰った。それはいいが、慌てた余りに、ぼくがあても無しに蕎麦をあつらえて行った為、母はそれから幾日間、何杯かのカケ蕎麦の代が払えず、毎日出前持ちに門口に立たれて催促され、あんなに困ったことはない、後々もよく笑いばなしにした。しかしそれ程、ぼくはその晩を、一家の危急と慌てたのだった。

それから一ヵ月半ほど経って、ぼくは横須賀支店へ廻され

た。

当分、横浜へも帰れないので、主人から半日のお暇が出、その事を家へ知らせに寄った。この日もぼくには感銘が深い。前の場合よりは、もっと印象的な記憶がある。というのは、思いがけなく、ぼくの弟が一人ふえていたからだ。母は産褥に横たわって、産れてから間のない赤んぼをそばに寝かせていた。これが三男の晋だった。

ぼくは産褥の枕辺に坐って、出来立ての人間の子をしげしげ覗いた。いかにも小さく、しなびて見え、そして真っ赤な皮膚にトウモロコシの生ぶ毛みたいな毛が頭の辺に少し生えていた。

母は、ぼくの支店行きを聞いても、ぼくを励まそうとするのか、それとも何かべつに生計の目あてがついていたのか、そう落胆はしなかった。父もこの日は機嫌がよかった。ぼくは明るく横須賀へ立った。

横須賀支店は、若松町の辺で、坂下から数歩の表通りだった。店のまん前には、浅黄暖簾に「てんぶら、若松亭」と染め抜いた料亭があった。舞台で見る信濃屋お半みたいな、結綿に鹿の子帯の娘が、よく海軍士官やお客と暖簾の蔭でふざけていた。

支店の店先へも、のべつ海軍の下士官や主計が来て注文したり話しこんでゆく。時には店先でビールなど開け、剽軽な和平どんという若い店員が盛んに馬鹿ばなしをして笑わせた。横浜本店よりここは陽気で活気があり、夜は戸を下ろして皆、遊びに出かけるので、ぼくにも自由な時間があつた。

思うに、この頃は、やっとぼくの頬にも、少年らしい頬の

色と快活さが蘇^{よみがえ}っていたのではあるまいか。何といっても、遠くへ離れると、そう家の事もよくよしなしいし忘れがちになれた。それと、支店詰は一人のおもしろい爺やと女中と若い店員ばかりな上に、出入りの客はすべて海軍の連中なので、少年のメランコリーなど抱くひまもなかった。ぼくはよく注文取りのオヒゲという綽名のある番頭の伊東さんや和平どんに尾いて、碇泊中の軍艦をあるいた。海軍波止場からランチに乗って各軍艦の酒保へ行き、酒保で御馳走になったり、みな馬鹿ばなしを側で聞いているだけだった。「この頃、神風楼のお職さんは、支店に來ないのか」と、おとくいの酒保の下士官が云ったりすると、和平どんは、主人夫婦の古いロマンスやら、まるで覗いて見たような閨中の睦^{むつま}じさまでを、冗談交じりに喋^{しゃべ}ったりした。だからオヒゲの伊東さんよりは、和平どんの方がどこの酒保へ行っても持てた。

或る日、ぼくに驚くべき吉事が起った。というのは、かなり大きな木箱一ぱいの書物が、運送屋からぼく宛てに届いたのだった。

開けてみると、何百冊あったろうか、全部が俳句の古雑誌だった。野毛通りの金港堂古書店が差出人となっている。

それと一しよに、家から母の手紙が来た。手紙にはこうあった。

「——以前、お父さんが世話して上げた事のある奥田さんという人がお父さんの逆境を知って、この頃、たいへん親切にしてくさる。そしてこちらでは忘れていたほど古い貸金を返済してくれたので、家の家計も一ぺんに楽になるし、そのせ

いかお父さんもこの頃は床から起きて、お元気になっていらっしやる。だから、あんたももうこれからは、家の事も心配しないでください」とあり、それから別便で送った本は、お父さんがめずらしく散歩に出、御自分で金港堂から送らせたものです、ともしてあった。

ぼくは、うれしくて、その晩は寝られない程だった。そしてさっそく寢床に俳句雑誌を持ちこんで寝た。ホトトギス、卯杖^{うづえ}、秋声、日本俳壇など、その頃の俳句雑誌のあらましはあったような気がする。父はぼくが早くからこんな物になずんでいて、また欲しがっていたのを知っていたのだ。どうかした拍子でぼくを憎しげに「穀つぶし」と呶鳴^{うなり}ったりする事も、病氣と貧苦のせいだったのだ、父も遠く離ればやはりぼくを愛^{いと}しく思い出してはいてくれるのか。そんな感激もあわせて胸につつまながら、当時のホトトギスを、夜更けるまで読みつつ寝たことは、ぼくの夢を少年の夢そのまま毎晩、のどかにしてくれた。

和平どんは、いつも人気者だが、悪ふざけの度を越す人でもあった。或る晩、店を閉めた後、店員たちが大いに酔った。主人夫妻は不在であった。ぼくは和平どんに呼ばれて奥へ行った。すると、大勢の中でいきなり蒲団にくるまれた。おなじ蒲団の中へ又、支店の女中のお弓さんを一しよにくるんだ。「手を貸せ、手を貸せ」とほかの者を呼び、和平どんは帯か何かでぼくとお弓さんを蒲団巻きにした。

もちろん、ぼくとお弓さんも、極力抵抗はしたが及ばなかったのである。上をギリギリ巻き締められているのでお弓さ

んの両手はぼくを抱えていた。ぼくは手のやり場がなく、顔は火照^ほッてしまい、ただ眼をつぶっていた。

和平どんは、酒宴の同僚たちへ、この余興を提供しながら、ぼくらを肴^{さかな}に、自分も飲んでいるのだらう。何かきやツきやツと笑いながらお弓さんをからかい抜いた。お弓さんが日頃、英どんにたいして余り好意を持ち過ぎているというやきもちらしかった。もつと露骨な猥^わせつな言であった。伊東さんが、やっと蒲団蒸しの紐を解いてくれたとき、お弓さんは泣いていた。ぼくは店の隅の暗い所へ逃げこんだ。

又、晩春の頃だった。爺やが風邪で寝ていた為、浦賀造船所へ納めている同地の雑貨店へ、卸し売りの白酒を、荷車に一荷積んで、和平どんが前を曳き、ぼくが後押しして行ったことがある。

浦賀街道の山道までかかると、和平どんは一ぶくしようと言い出し、車を止めて休んだのはいいが、そのうちに「おまえ、店へ帰っても、喋るんじゃないぞ。いいか、途中で壊^{こわ}れたと云つとくんだから」と云つて、四打^{ダイス}入りの箱をコジ開け、中の白酒を二本ほどラッパ飲みにしてしまった。そして残りをぼくにくれた。

ぼくは眼がくらくらし出した。いや、それどころではなく、和平どんはすっかり酩酊^{めいとう}してしまい、それからの峠の下りを何べんも転びかけた。また崖へ車をぶついたりして、あと白酒のビンを何本も破^やり、白酒を道々撒いて歩いた。どうなる事かと、ぼくは尾いて行くばかりであり、あんなに困った事もないが、面白かった事もない。

支店勤めで、辛かった仕事は、サイダーやビールの納入に

行くときである。軍艦によって水兵や下士の気質も違い、手を貸してくれる場合もあるが、そうでない時は、あの舷側の下から高いタラップを番頭やぼくが担ぎ上げて行かなければならない。ぼくは軍艦印サイダーの四打入りをよく肩に乗せられた。そして片手でタラップのロップにつかまりながら一歩一歩艦上まで登って行くのだった。——忘れもしない軍艦新高^{にたか}のタラップの途中から、それを担いだ儘、ふとよろけて、海へまっ逆さまに落ちたことがある。前後は皆目覚えていない。気がついたときは、自分の周りにはゲラゲラ笑う大勢の声がしていた。救助されて酒保に担ぎ込まれていたのである。

新高へ行くと、いつも、からかわれた。可愛がつてくれたのであろう。ぼくはどの軍艦や駆逐艦へ行くよりも、新高の酒保へ行くのが愉しかった。酒保には甘い物も豊富なので、よくいろんな物を貰った。

ある時一人で何かの使いに行ったことがある。新高は間もなく出航の準備をしていた。用がすんでからぼくは人気のない中甲板など歩いているうち、この儘、船底か石炭庫へでも隠れてしまつたら外国へ行けるが、というような空想を抱いていた。そして、ふらふらと空想を実行へ移すような誘惑にかかっていた。が、あぶなく、ぼくは見つけられて、上甲板へつまみ出された。もうタラップも揚げかけていた所だった。そのときは、ひどく怒られた。

秋、ぼくに、も一つ愉快な事があった。それは人知れず投稿した俳句が、横須賀新聞といったか、土地の新聞の記念募集の一位になった。わずかだが賞金があった。店の人たちは、

誰も気づかなかった。

ところが、それからもちよいちよいち投吟しているうち、或る時、選者のなにがしという俳人と新聞社の人が訪ねて来た。新聞社の名刺なので、ほかの店員がそれをちょうど奥へ来ていた主人夫妻に取次いだ。結局、ぼくを訪ねて来たのだと分って、ぼくは顔を真っ赤にして狼狽した。その晩、御しんさんに呼ばれて「うちは商店ですよ」と切口^{きりこう}上で云われた。それから主人夫妻が支店に居るうちは、俳句雑誌を寢床に持ちこむこともやめ、新聞へ投稿するのめやめた。何かこりこりしたような気もちが残っている。ほかの店員からもそれは余りよく思われなかった事だったのかもしれない。

その冬か翌年の一月頃か、冬というだけで月も日も忘れてしまっているが、その横須賀でぼくは小島の小母さんにぱったり会った。

雪のあと、みぞれでも降っているような、とにかく寒いそして道の悪い日だった。ぼくは海軍波止場まで、空樽を積んだ車を曳いて行った。おそらく酒保で使う漬物樽か何かであったのだろう。とにかく、軽いことは軽いが、山のような空樽を車で曳いた。

小島の小母さんを見かけたのは、あの一番繁華な大通りであった。ぼくから呼んだのではない。買物か何かしていた小母さんが、ぼくの姿を見たのだろう。いきさつはよく覚えがないが、その往来中で、小島の小母さんに「まあ、英さんじゃないの」と梶棒にすがられた事だけが、あざやかに脳裡にある。まわりに少し人だかりがしたような気まり悪さを覚えて

いるから、ややしばらく立ち話をしたのではなかったろうか。そしてぼくも小母さんも泣いたにちがいない。小母さんが早口に住所を教えてくれたが、ぼくはおそらく人目に間が悪かったり、さまざまな感情に取りみだされていたのだろう。なかば夢中で別れてしまい、その後も、小母さんの赴任先の住所を知ろうとはしなかった。

又、ひとり小母さんばかりでなく、ぼくはほかの知人も横須賀では一切思い出そうとはしなかった。母の親戚には、芝新銭座の近藤塾の関係から、近藤男爵や山中造船中将など、横須賀海軍工廠には、かなり知人や遠縁の者もいたはずだが、母の手紙がそれらの人に触れていたことはない。従前から、実弟山上三郎へ、たった一ぺん、無心の手紙を持って使いにやられたほかは、そうした身寄り頼りを一切たのみとしない母であった。だからいつかしら、ぼくもそんな旧縁の人が世にあることなどはまったく忘れ、ただ自分らの破れ小舟一そうを、とにかく必死に漕いでいる気もちだった。

しかし思わぬ人の恩情に助けられることはあるもので、先に母の手紙にみえた奥田という人が、以後も失意の父を励まし、父へ再起に足る資金を出してくれたものとみえる。その頃、母の便りに依ると、お父さんはこの頃、毎日、お勤めに外出しているとしてあった。けれどそれは真面目な勤めでなく、後で聞いた所に依ると、生糸相場に手を染め出し、毎日仲通りへ通っていたものだった。

父は、あせッていたにちがいない。そのため、せっかくの再起の資金をもまた失い、そして以前よりもひどい貧苦へふ

たたび一家を投げこんでしまったのだった。

横浜異景

どうも、ぼくのこの四半自叙伝は、貧乏ばなしに尽きてい、読者も又かと思われるだろうし、書いてるぼくも実は気がヒケ出しているのである。そこで、これは果^はしが無い、少しはしょってという気になって、前号の終りに以後一年半ほどの事を、ひとまとめに、こう書いてしまった。――父がふと再起の資金を得、一たん家庭も建て直るかにみえたが、又忽ち、生糸相場や何かで元も子も失くし、再び以前にまさるどん底へ落ちてしまった、と。

ところが、その間の一年余を一足とびに少年期から青年期へ跨^{また}いでみても、ぼくの「忘れ残り」は依然、家庭の貧苦だの、労働だの苦学だので、ちっとも明るい面はなく、それに肝腎な十六、七から八へかかる年齢期を省略するのも、全体からみて何かこの辺だけをぼかすみたいでおもしろくないから、やはり順を追って変哲もない浮き沈みの経路をここでもつい書かざるを得なくなった。ぼくのかかる徒然めいた少年時代の記も、思わず長くなって恐縮しているが、ま、あと二、三章を以て結ぶつもりであるから、併せて諒^{りやうじや}恕を希^{ねが}っておく。

直接、両親から続木商店の主人へ、手紙でもあった結果であらうか。まもなく、ぼくは暇をもらって、横須賀から横浜の家へ帰った。家はその間、関内の尾上町二丁目に引っ越し

ていた。大通りに面した三間半間口の店舗で、屋根看板に「日進堂」と大きく、わきに「全国諸新聞広告取扱」としてあった。

父はこの店を、前経営者の奥田某氏から顧客付き負債付きの居抜きで譲りうけたらしい。奥田さんなる実業家の夫妻を、ぼくは太田の赤門前時代から見知ってはいたが、父との関係については殆ど何も知る所がない。唯、横浜における小成功者ではあったようだ。その人が郷里へ引退するにあたり、父の悲境を知って、当時相当額の貸金を返してくれた上、日進堂の事業を父へ任せて行ったというのが実情らしかった。そんな風に母から聞いたと覚えていいる。

いずれにせよ、ぼくの両親にとっては、再生の救いだった。尾上町へ移って以来は、父も長年の病床を出て元気づき、ちりぢりに外へ働きに出されていた妹たちも母の膝下に帰り、ぼくも又、奉公先から呼び返されて、こんどはわが家の一店員として帳場格子の中に坐らせられた。小さい家の歴史でいえば、ま、小康時代といったようなそれからの一年余であったのである。

その日進堂の位置は、今日の横浜でもそう変ってはず、桜木町駅から大江橋を渡って左側の、いま朝日新聞社支局となっている辺りである。

今日とその頃とのちがいは、ぼくの少年の頃の尾上町二丁目界隈は、関内芸妓の狭斜の町と織り交ざっており、日進堂の並びにも「金春^{こんばる}」だの「千代本」だのという御神灯^{ごしんとう}の格子先が幾軒もみえた。わが家のすぐ裏は鳥料理の「金田」の庭

だし、また大江橋の南詰には、当時すでに代は変わっていたろうが有名な富貴楼の名残りもあった。だから昼は爪弾きの音が流れ、夕めくと、店の前を芸妓の木履の鈴が通り、金春の姐さんなどが、湯上がりの上ゲ鬘を涼やかに見せて行くなど、濃厚な脂粉の気も漂うのだが、それが堅々しい商店やそこらの家庭とも道路の裏表で交錯しながら、新古、何の不調和もなく町の色を組み立てていたのであった。

日進堂は東京の弘報堂の下請けで、新聞広告取次が本業だが、店の一部に化粧品の陳列棚を据え、美容水本舗の看板をかけていた。その頃、美顔水とかキレイ水とかいう物が流行的に売れ出していたので、その類似品を製販していたのであるうか。棚は卸し売りの見本にあるのだが、近所の芸妓たちはよくそれを分けてくれといって来る。ほかに客が居ないと店員たちは、からかい半分、妓たちと好きな話に耽つて、美容水をお線香代の代りにタダやったりしていた。ぼくは帳場格子の中で、いつも好きな書物にかじりついているか、その頃から妙に日本画のまねや水彩画などをぬたくっていたが、店に近所の妓たちが這入ってくると、じつは五官をその方にあつめ、うわべは素知らぬ風を装っているのであった。

店の斜向いに、日曜日以外は、いつも鉄扉の閉まっている教会堂と、脇沢金次郎翁の邸宅があった。翁は横浜成功者の平沼専蔵とか茂木、原などと並ぶ実業家だとか。どうかすると、その白頭翁が店先へ来て腰掛け込む。そして毎度、ぼくが帳場格子の中で絵ばかり描いているのを覗き、ある時こんなことを云った。「あんた、何に成るつもりかね」ぼくは大真

面目で「絵かきになりたい」と答えた。すると翁は「絵かきに成りたいなら成る道へ早う進まんじゃいかね。お父さんに云って東京の偉い先生につくか、美術学校へでも入れてもらいなさい。あんたくらいな年は大事な年頃だからな」と。これは、ぼくの頭にこびりついた。東京へ出たいという夢を掻き立て、画家だ画家だと将来を念じた。

だが父の顔を見てはそんなことを云い出せもしなかった。父は病後のせいでもなくとも、以前から歩くのが嫌いで、用先から用先へ、当時の医者みたいに人力車を乗廻してあるき、店にすることは全く稀であった。もっとも店は馴れた店員に任せておけば済むものかもしれないが、父の胸にはこれを機会に以前の棧橋事業が貿易方面へ返り咲きして、旧知を見返してやろうという氣負いや山氣が燃えていたのではあるまいか。

母は父のすることに徒らな反対をする人でもないのに、貧乏以来は父も多少の氣がねを持つ風であった。だから折角の日進堂を店員まかせにして、べつな方面へ金を注いだり、生糸相場に手を出している事など、父の行動は一切、母には知らされていなかった。ただ時折「……ほんとに得手勝手なお父さんね。病氣をしてもお金を持つても」と、ぼくら子供と一しよにする食事時に、ふとこぼすぐらいが関の山の愚痴だった。

父がまた以前のつきあい仲間へ顔を出し初めて、その見得も伴ったり、一方では、生糸相場でも損に損を追っていたことだったろう。一時持った金は一年とたたないままに失くしていたと、母は後に語っていた。そして後には従来からあった店付きの負債と新しい借金だけが残し、その断りが毎日

の店頭業務みたい続いた。

けれど、ぼくにとっては、それらの債鬼の客も、一こう恐くも何ともなかった。何も知らない儘「今日は誰も留守です」とか「何日に来て下さい」とか云われた通りを云っていればよいのである。四人居た店員も、水野君一人になってしまい、その水野君も債鬼の恐れを感じると、外交^{そと}歩きに出て晩まで帰って来ない。そして月末には、電灯が切られる。水道も止められる、といったような状態にまで来たが、ぼくの毎日にはいささかの禍福もなく変化もなかった。およそ尾上町の一年半ほど、ぼく自身にとって自身の好きな事がやれていた時期は前後にない。薄暗い帳場格子の中は、借金取にたいして録音されたような断りを云うほか、まったくぼくの小書齋となっていた。

そこで、ぼくは初めて小説を書いたことがある。高島米峰氏主宰の「学生文壇」が創刊され、その二号に投じた小説が当選した。題はいま考えると、ひどく古風なもので、「浮寝鳥」というのであった。三、四十枚の物であったと思う。だが投稿規定に二十四字詰原稿紙何枚とあるのを見、その原稿紙を探してあるいたが、当時まだ横浜中にも原稿紙なる物を売っている店はなかった。やむなく二十四字詰二十行に自分で野^{けい}を引いてそれに墨筆で書いたのを覚えていた。

その頃、もう一つ非常な興味にふれた事がある。店の広告用原画の版木を、頼みつけの版木屋へ取りに行くついでに、新聞小説の挿絵が、どんな工程で出来るものかを、その木版師の仕事場で見たことだった。

ぼくがよく覗いた真砂町の彫繁という家では、横浜貿易新

報や毎朝新聞の仕事もしており、小川芋銭のコマ絵だの、連載小説の挿絵などを、いつも数名の木版師が手分けで彫っていた。当時、広告図案には、銅版がよく使われていたが、挿絵にはまだ凸版が用いられていなかったものとみえる。原画は薄い雁皮紙^{がんぴし}にかざられていて、桜の版木に直接ノリ貼りされた画稿の上から、小さい鑿^{のみ}のさきが、一線一線絵を彫り起してゆくのだった。毎日のことだし、たいへんな苦勞に見えた。——そしてすぐ翌日か翌々日には、それが小説と共に次々の紙面に掲載されて来るのを見、ぼくは印刷文化の構成やその中の小説欄というものに、何か、ものを知ったような気がしたものだ。

はつきり何年何月から何月までという記憶が、ぼくの今にはない。が、自分の十七歳はまるまるそこで送ったようだ。そして誰の少年期にもあるように、尾上町時代のぼくには、尾上町附近での好きな少女の印象が幾ツかある。当時の横浜銀座ともいえる鉄^{かね}の橋のすぐそばに関川齒科医院というのがあり、その令嬢が夢二の少女みたいに見えた。又、馬車道から大江橋通りへ曲がった商店街の一軒に、老舗の履物屋があつて、その娘も好きであつた。恋などとよぶほどこっちも大胆ではなく、ただ町の柳の揺れまでが、やたらに少年の感傷を染め、未熟な詩心の眸^{まゆ}を妖しく悩ませていただけにすぎない。

素人^{しょうと}の沙翁劇の会、源氏の輪講、句会、短詩の会、いろんな会へも、この頃はよく覗きに行った。鉄砲問屋の西村潤蔵君の北仲通りの家では、毎月読売新聞の句会があり、東京か

ら選者の窪田而笑子がよく見えた。宮島ゆかり女史という青鞥社の同人みたいな新しい女ぶった令嬢も交じっていたり、何しろぼくの知らない別の世界の横浜では、一面において、そういう富める人や若いグループでの、強烈な物質外の生き甲斐も、渴望されていたように思われる。

そして、短かったが、ぼくにとっても、尾上町時代の一年余は、横浜文化のそういう特異な面もちよつと嗅ぎえたし、書物にも親しめ、絵遊びも出来、感謝していい期間だった。けれど店も維持しきれず、すべてを負債の抵当に渡して、再び元の貧民窟へ舞いもどる間際には、相当、暗澹たるものが又、母の朝夕の姿には窺われた。ちょうどその頃、母の父、ぼくにとっては祖父の、例の佐倉のおじいさんが、麻布竜土町の長男山上清の家で、臨終に迫っているという電報が来たが、店も家庭も、そんなさいであった為か、父のゆるしが出ず「……お母さんは、親の臨終にも行けない罰当りなんだよ」と、終日奥で泣いていた母を見た日がある。——今なら桜木町駅から東京へは通勤する人さえ多いが、その頃では、そんなにも東京が億劫な遠方であったのだろうか。それとも、父の得手勝手で母をやらなかったものだろうか。今なお、その終日の母の嘆きが耳底にのこっているの、ぼくには何ともその事は不可解で仕方がない。

もっとも、尾上町を立退く間際には、水道料の滞納で、水道までよく止められたりしていた。そのくせ横浜気質というか、依然、金の出納などは、荒っぽかったようでもある。ある時など、急遽、水道税を納める為、母から百円紙幣一枚を渡され、局へ駆けつけたことなどある。当時の百円は大金な

ので、わざわざ人力車に乗せられて行ったのだが、水道局の窓口に立って、いざ金を納めようと思うと、母から預けられてふところを持つていた状袋がない。俵屋も一しょになって、血眼で探してくれたがついに見つからなかった。風の強い日であったのを覚えている。この時ほど、母に「困った困った」と嘆じられて、ぼくも共々色を失ったことはない。百円といえば浮沈にかかわる金であったかもしれないのだ。母が父からどんなに怒られたかは覚えていないが、何しろもうその前後は、せつかく尾上町へ出た機会も一瞬の望みに終り、再び暗い淵にむかって、母のあたまも乱れていたのかもしれない。

古い西戸部という地名は、ぼくの頭には飢餓の辻みたいな印象を今ものこしている。尾上町から越した先は、また西戸部だった。家賃も物価も安く周りも同格者ばかりなので、貧乏がしよいのである。

母が「お父さんは、病気をしてもお金を持っても、ほんとに得手勝手な人だ」と云ったが、戸部へ引っこむと、父は又、急に病人臭くなった。のみならず、まもなく何度目かの潰瘍吐血をした。いま思うと、父はじつに感情家なのである。事に破れても、自分の中で穏健な処理がつかず、心身を勞しきるのであった。母はまた、あるかぎりの工面を尽して、父の医療費にかけ、その間、住居も二度まで転々した。一度は父が「家相が悪い、ここにいるとおれは死ぬ」と云い出した為だし、次のばあいは、越してからわずか二た月の家賃が、もう払えなくなっていたので、家主に追い立てを食ったのだっ

た。

いまと違うあの頃の、家主の追い立てほど苛烈なものはない。特に、貧民相手の家主は鞭に馴れているせいもあるが、おおよそ獣でない人間であつたら、野宿するまでも、その埒を出てゆかずにはいられない辱めであつた。ぼくは母と二人で、次の借家を、雨の日、探し廻つたことがある。何も、手分けして探せば、それだけ範囲も広く探せるものだが、傘が一本しかないのである。母は生れて二年足らずの晋を背中に負つていた。母は破れ洋傘のしずくで背の子を濡らすまいとするし、ぼくの肩も入れようとするので、自分は濡れ雑巾のようになつていた。

ぼくは洋傘の柄を持ち添えながら、その日ほど、自分の母が世間の中で不運な人に見えたことはなかった。家の立退きを迫られている気もちは家がない事とちツとも変りはない。そんなせいもあったろうし、一日じゅう歩き暮れていたことなのだ、母の半生の歴史みたいなものが、小さい頭にぐるぐる廻りしていた。そしてもう何らのぼく自身の欲望は失われていた。ただこの母をどうかして一ぺんでも幸福にしてみたい気もちが無性に起つた。好きな読書も画家志望も捨てていいとさえ思った。いやそんな考えも持たなかつたろう。もつと本能的な動物でも感じるであろうような単純さで、「いまに、お母さんだって、世間の人なみに、こんな苦勞のないお母さんにするよ、ぼくはきつとしてみせるよ」と心で呟いた。けれど、そういう思いも、ここにこう文字で書いてみると、何だか嘘が交じるようである。素朴といつてもまだ当らない、原始的な肉親的感情といったら、やや正しいのかもしれない。

雨の日、探しあてて、やっとどうやら借りえた家は、崖やぶ斑らな中段に細長く建て並んでいる掘井戸のそばの一軒だつた。

長屋の名を「看視長屋」というのは、住んでから後で知つた。戸部監獄があつたむかし、看視が住んでいた所から起つた名だそうである。おおよそ形容詞は要るまいと思う。

三、四軒先の隣りに、留さんという労働者がいた。引越し蕎麦のお礼からすぐ懇意になり、ぼくは留さん夫婦の俠気で、留さんの仕事場へ働きに連れて行つてもらふことになつた。

早朝、誘いに來てくれた留さんは、わらじ脚絆に、印絆纏を着、真田紐でしばつた大きな弁当箱を肩に掛け、いなせな鳶みたいな恰好していた。ぼくの身仕度にも、ああしろこうしろと世話をやき、自分で買つて來た新しい草鞋をぼくの足へ穿かせてくれた。「毎朝だからな、毎朝穿かせちゃ、やれねえぞ。覚えときな、英さん」と、いちど結んだ緒をまた解いて、穿き方を教えてくれた。

仕事場は保土ヶ谷だつた。現在の工業地域が、まだ茫々たる野水や見渡す限りな田や草原であつた時代である。が、すでに巨大な化学工場や何に成るのか知れない煉瓦の高層な煙突工事が、所々に見られた。

土工たちのコンクリート仕事にぼくの一日は預けられた。そこでの仕事は、大きい担い桶を天秤棒でかつぎ、小川の水を作業場へ運ぶことだつた。一日何十荷の往復になるだろうか、夕方になつたら、ぼくの肩は、そっと触つても痛いほど腫

れていた。

毎夕、三十五銭貰つて歸つた。

その一ときの欣しきは云いようもないが、日がたつに従い、足の裏はセメントに蝕まれ、どうにも跛行を引かずにいられなくなつた。もつとも常に足掙えがよければそんな患いもないのだが、草鞋を毎日新しく買うのも惜しく、又、買うにも買えない日の方が多いのである。朝、家を出るときから足掙えも心ぼそい支度で出て、途々、拾つた草鞋の片方を片足に穿き代えたりした。

そんな足元では、遅しい仲間から嘲られるのも当然だし、又仕事仲間としては、腹立たしくもなるのであらう、コン棒という物で二、三度なぐりつけられた事もある。

でも、留さん夫婦の親切のたまえ、ぼくは雨の日以外は休みもせず通い続けた。それは何かに以前書いたから（文春・二十九年新年号「煙突と机とぼくの青春など」）簡単にしておくが、毎夜、家に帰ってから父母に黙ってそつと按摩をして歩いたのもこの期間の事だった。駄菓子屋で売っている三角袋の麦コガシには玩具の笛が附いている。あれを二本、木綿糸でしぼつたのを、ふところに持って、人の知らない遠くへ行つて流したのである。これは或る事情でまもなくやめたが、母だけは知っていた。なぜならその稼ぎの十銭か十五銭は、母に渡していたからである。

それを済まなく思つたのであらう、母もまた毎朝、大福やあんころ餅を仕入れた箱を背負つて、ぼくと共に家を出かけ、工事場で一日売りひさいで、夕方は一しよに歸つた。仕入れ先は、高島町の河岸近くで、そのため朝は星のあるうちに家

を出るので、殆ど寝る時間は少なかった。けれど、そんな事をしても、母と共にする眠たさや暗い道の朝夕は、何か愉しかった思い出として今も残っているし、その時にしても、少しも辛いとは正直思っていなかった。

だが、母の餅売りも、結局は無駄骨折りに終つてしまった。なぜなら顔馴じみになると、貸しがつもり、貸したがさいご、それは容易に払つてくれないからであつた。元より資本があつてしたわけではなく、それも血の出るような無理工面で始めたのだから、忽ち元も子もなくなり、泣き寝入りのほかになかった。

木靴の仲間

ぼくが横浜船渠へ通い出したのは、保土ヶ谷の仕事も終りかけ、留さんもほかへ移つてからである。看視長屋からすぐ上の高台に、宏壮な一軒があつた。内藤子爵の親戚とかで、おやしきと近所では呼んでいる。

母がそのお針仕事をさせて貰うようになったのが縁で、内藤氏の口添えで横浜船渠へ入れてもらえる事になったのである。内藤氏は、船渠会社の重役であつた。

父はたいへん飲んだ。ぼくもいい口があつたと思った。だが、内藤さんのお世話という事が、過大にぼくら貧者の心理に僥倖を思わせ過ぎていた。内藤氏の手紙を持って、初めて会社へ行ってみると、むずかしい試験もなく、ただ年齢を訊

かれただけにすぎなかった。年齢は前以って、内藤さんから「十八歳と、ほんとの事を云ってはいけない。規則として二十歳以上だから、二十歳と云いなさい」と注意されていたので、その通りに答えた。

するとその日から、即日職場へ就かせられた。「船具部」という所である。機械部、電気部、製缶部などの各職部門では、最下級の雑役部といってよく、体さえ強健ならば素人でもすぐ役に立つ部門らしい。しいて技術的な仕事といえ、船内船腹の塗工ぐらいなもので、そのほか、入渠船舶の出し入れ、船内船底の錆落し、製缶工などの足場懸け、ドック掃除、沖仕事、およそあらゆる入渠船舶の雑役は、みな船具部へかかってくる。

その船具部には、百人以上の仲間がいた。一部から六部まで分れており、一組十七、八名ずつ配されて一チームになっている。能率を競わせる仕組みであろう、一組一組には組長、小頭こがしらがいて、職工長室の指令をうけ取って来ると、「今日は、何号ドックの入渠船のペンキ塗り」とか「午ひるから誰と誰はランチに乗って沖の外国船へ入渠用意に行け」とか伝令する。労務時間は、朝七時から五時半までで、ぼくの日給は、四十五銭であった。夜業一時間二割増し、深夜業や徹夜はもっといい率に割増しがつく、入りたての一頃は、誰からもすぐ「幾ツだい?」とよく怪しまれた。人いちばい小さいぼくだったせいもあるが、誰も二十歳とは受けとってはくれない。船具部中を見廻しても、ぼくみたいな小さいのは、ぼくだけだった。

ドン（午砲）という言葉があった。「ドンだよ」といえば正午を意味し、「ドンにしようぜ」と云えば、昼飯にしようぜということになる。

横浜の空にはその頃、もひとつ朝午夕の三度ブーが鳴った。サイレンとは云わなかった。「船渠会社せんきうかいのブーが聞える」といえば、朝は七時、夕は五時半と極まっています、全市の時計代りになっていた。

菜ッ葉服やツメ襟やマドロス然たる数千の職工たちが朝々会社の正門へ流れこむ足なみは壮観でさえあった。七時のブーは就業令なので六時半前後が人海の汐ざかりである。五分でも遅れると、守衛口で遅刻を取られ、支払い日の日勤票には、ちゃんと半時間の割でも日給から差引かれてある。

ドックの盛況か不況かは、横浜中の景気不景気にまですぐ反映した。会社の正門前に、ふつうの通勤工以外の自由労働者の大群が、毎朝まっ黒に見えるようなときは、一号二号三号ドックとも全部の竜骨台きゅうこくに入渠船が坐っていて、沖にも入渠待ちの内外船が混んでいる証拠だった。所謂、ハマ景気“の活況時と見て間違いない。

その臨時雇用の黒い群れは、ハマではかんかん虫とよばれていた。上は腰の曲がったお婆あさんから幼は十四、五歳の少年少女までをふくめてい、かんかん虫には余り屈強な壮者はいなかったようである。何しろそれら異様な細民群の稼働かどうが、波止場や棧橋や沖の船にまで雲の如くウヨウヨ充ちていた頃が、貿易港横浜としてはその最盛期であったといえよう。

かんかん虫という呼称は、ぼくには少しもユモラスには聞えない。反対に、エキゾチックではあるが何か灰色の哀感とそして弱々しい明治世代の訴える「うたごえ」も持たなかった細民たちの無数の顔が、華やかな港の灯を背景として、泛んでくる。

彼らの仕事は、船のサビ落としと云われているが、ダンプル掃除や貯炭庫の闇や船底の水槽洗いや、およそ船鼠の出入りするような個所へは、どこへでも仕事に追い込まれた。塗りたてのペンキにまみれたり、鼻の穴から肺の中まで粉炭で黒くしたり、セメント箒とセメント缶を持って、船員でも知らないような最船底部の穴から穴へと這いこむのであった。

だから仕事も終って、黄昏れの陸へ上がって来る個々の彼らは、まっ黒と云っても判じ物と云っても当らない程、どれもこれも奇妙奇怪な顔して目鼻が分るだけである。だが工場裏の排水管の湯煙りにむらがって、その顔や手足を洗っている群れの中には、汚い頬被りが取られる下から、剥き卵みたいな可憐な少女の顔も見えたり、初々しげな人妻らしい、ほつれ髪の顔もあったりするのであった。もちろん大多数はそのまま百鬼夜行の行列になりそうな雑多な男共だが、それにしてもこの仲間には波止場ゴロだの凄い乱暴者は皆無といつてよかった。なぜならかんかん虫クラスの日当は標準以下の安いものだからである。

が、この零細な老幼男女の雲集も、稼ぎとなると馬鹿にできない。夕方の露店や場末の灯をうるおすことは大変なものだった。家に待つであろう者の為に、経木で包んだ安魚を持ったり、菜漬をブラ下げたり、米屋へ立ち寄っていたりする

人影を見ると、ぼくには他人の生活とも見えなかった。おなじ陰しさをよじ登る同行者に思われた。

それにまた、当時ぼくの通勤し初めた横浜船渠の船具部という職場が、ほとんど彼らと隔差のない姿や範囲のものだった。違っているのは、彼らに期待できない危険極まる随所の足場仕事だとか烈しい重労働だけである。要するに会社常雇のA級かんかん虫が船具部であるといってもよい。

一万噸級が入る第一号ドックを前にして、職工長やパイロットがいる事務所があり、それに隣してトタン屋根の船具部があった。朝夕、百何十人が工服に着更えたり弁当に帰ったり、冬なら大きなペン缶に薪を突ッ込み、お手の物の油脂をぶっかけて、炎々濛々の中で各班の馬鹿話やら喚きが詰め合っている職場小屋である。まあ炭礦の飯場小屋といったような光景だろうか。

山の労務者と一見違う所は、その服装と特有な気質である。入渠船のペンキ塗工はすべて彼らの手に成るので、工服は一人残らず斑で色さまざまなペンキの粒子を染め重ね、それがゴワゴワに硬ばって、乾漆みたいになっている。——偶々その仲間へ入ったばかりの、ぼくの菜ッ葉服などは、余りにきれいなので肩身がせまく、人知れずわざとペン刷毛で黒ペンや赤ペン白ペンなどを服地へこすりつけて、一目で新米とわかる身なりから同化しようとしたものだった。それに例外なく木靴というものを穿いていた。木靴については後で語ろう。

全員は六班に分れていた。ぼくは第六部に組み入れられた。

六部の組長は猪子三郎氏といい、この人の名は忘れられない。後で思えば俠気のある物分りがいいこの組長の下なればこそ勤まったようなものである。

だが、ほかの連中も、外国船や下級船員に接したり、ハマ特有な気質に洗練されていて、どれも愉快な仲間だった。そして親切であった。ほんとは十八歳でしかないのに年を偽ってこの逞しい仲間に入ったばかりだったが、それと明らかに知っていても、ケチな意地悪などされて泣いた例は一度もない。特に六部の仲間は、自分たちが必然労力のワリを食うわけだが、皆してよくを庇^{かば}ってくれる風であった。

パイロットの乗りこんだランチが沖から入渠船を曳いてくる。ぼくらは待ちうけてロップを取り、ドックに入れる。そして閉じられた渠中の海水が電力で排水され尽し、巨大な船底が竜骨台^{キール}に坐るまで約三、四時間はたっぷりかかる。

神経質なほど注意深いパイロットの間断ない呼子笛と指揮の下に、その間の全操作と、船体定着の作業は、すべて船具部が総がかりでやる。その烈しさといったらない。まるで戦場の血相と騒ぎだ。この間にまごついてなどいると、仮借なく、がなりつけられる、張り仆される。

船の巨体が漸次、沈下してゆく機微な瞬間に、ドックの石段側と船腹へかけて、車のついたロップを用い、船体の不動を保つ為のツチとよぶ巨材を何十本となく丸木橋のように横へ支え渡すのだった。そして船底が竜骨台に坐るせつな、全員で石段側のツチの根本に分れて立ち、二人ずつ向い合って、大きなハンマーで一せいに櫂板^{けやきいた}の締め木を打込む。それは舷

頭からパイロットが吹く呼子笛の一声一声の下に、全員のハンマーが鳴るので、一種何ともいえない音響をもち、ドック中を震撼する。

終るとすぐ、一枚の締め木を持ち、片手には重いハンマーをさげた工員が、石段側からツチの上を猿走りに渡ってゆき、船腹とツチとの間隙に、その締め木を打込んで帰って来る。ツチはおよそ電柱よりも一廻り太い巨材だが、角に面をとつてあるのもあり、中には殆ど丸材をハスった程度の物もある。その上を、われら船具部の連中は、木靴で平地を行くように渡るのである。ドックに水のあるうちはまだいいが、排水がすむと、下は何十呎^{フィート}か知れない眼がまわるような深い石だみだ。ぼくは初め、彼らの命知らずな作業を見て、見ているだけで足がふるえた。人間業に見えなかった。けれどやがてぼくも同じことをしなければならず、いやおうなくやらせられた。

恐い仕事、危険極まりない作業はツチ渡りだけではない。ダンブルの中の暗闇仕事、製缶工の手伝いや何かでマストや煙筒へよじ登るばあい、一本のロップに縋^{すが}って船のトモからスクリュウへ降りたり、ぶらんぶらんする足場板に乗って競技的に船腹塗りのレッド・ペンキにまみれる時など、ぼくの体軀にはすべて過重な労働である余り無我夢中でやってはいたが、ふと生命の戦慄に足もすくんでしまうことは一再でない。毎日が命がけだった。

だからふと、朝、家を出るときなど、「――夕方にはこの家へ帰って来ることが出来るか、どうか」と、よく思ったりし

て出た。わけて冬中は、まだ暗いうちに戸部の横丁から霜を踏んで出るので、そんな感傷がよい胸をついた。

組長の猪子さんの家は、どこか近所だったとみえ、よく途中で会った。この人に声をかけられると、ぼくは勇気づけられた。伝法な口調で、通勤にはツメ襟の堅い身なりをしていたがいなせな肌合いの人だった。酒とぼくちが好きで、給料日から二、三日は必ず欠勤し、細君が見つけに歩いて、泥酔している猪子さんを往来端で見つけ、炭屋の車に乗せて自分で曳いて帰った、というような話を、職場小屋の昼休みで聞くのは珍しくなかった。

「どうだい。勤まりそうかい。ペソを搔いちゃいけねえぜ。まあいいやな、六部に居りやあ」

途々そう云ってくれたりした猪子さんであった。だが、職工長や技師にはよく突ツかかるといので、六部の組長中では、猪子さんがいちばん会社側のウケが悪いのだそうであった。

六組の班と班とは、自然その仕事を実績上に競わすような仕組みに出来ていた。で、ぼくといえ、いくら組長が庇ってくれても、それに甘えている事もできなかった。

だが、何にしても、ぼくは力がないし体軀も小さく、たとえばツチの巨材を鎖チユンにかけて、前後四人で担ぐにしても、相手が腰を切っても、ぼくには腰が切れない、又、よろけ勝ちになるなど、歯をくいしばっても一人前には出来ない事が多かった。だから使い走りでも個人の用足しでも、何でもして、償いをつけていた。

雨の日は、船内仕事か、外部にしても、ドックの底の真っ暗な船底のサビ落しなど、比較的らかな作業が多かった。

そんな日、ハッチからダンブルへ入って、足場板に腰かけ、蠟燭ろうそくの光で、かんかんハンマーで内部の鉄板を叩いている仕事はのんきであった。監督が来る時だけやっていれればいい仕事のようにみんな怠けあっていた。ぼくはいつもポケットにしている袖珍本の芭蕉句集を出して盗み読みした。また、作句したり自由な空想に愉しみ耽けることができる。

船艙も石炭庫だと、無数の小ハンマーの響きで、暗い上にも更に粉炭の闇が濛々と厚くなった。空気がチリチリ燃え、手元の蠟燭の焰に、のべつ微塵みじんのような火花が咲く。それと音響とで、一種不思議な幻覚の世界が感じられるのだ。かさかさな鼻腔の奥を鳴らしてカツと痰たんをすれば、石炭を溶かしたようなものが口から出るし、うっかり蠟燭の火で煙草をつけようとすると、(ぼくは十五、六から喫煙癖にそまっていた)顔じゅうにたかっている粉炭ヘチリツと燃えつきそうになる。それでもなお、ダンブル仕事は、よかった。自由な空想が愉しめるからである。ドックの一年何カ月が勤まったのは、ぼくに空想癖があった救いといっている。その闇黒が苛烈なほど、自分を置く空想の世界は甘く、夕方の退けのブーが聞えてくるのも、いつの間にかのような気がした。

夜業は任意な日もあるし、強制的な時もある。

冬の夜など、乾いた事のないドックの底での居残り作業は、零下何度なのか、陸では知らない寒さだった。

しかし技師や監督も見廻りに来なくなる夜半過ぎになると、

彼らは適宜に暖を取りに上がって行ったり、蠟燭の灯を寄せ、ぼくちの盆ゴザを拵え始める。二個のサイコロを誰かは必ず内ポケットに用意していた。船底とかぎらず、沖仕事に出ても、途中のサイパン船上ですら、上役の眼さえなければ開帳する。

ぼくはよくその仲間から立番を命じられた。後では五錢玉ぐらいを誰かがくれる。けれど度々のうちには覗いてみたくなり、すぐ彼らの熱中する理由と丁半のルールも分った。恐ろ何枚かの銅貨を手にしてそつと仲間のコマと一しよに張ることも覚え、いつかぼくも機会があると人なみに顔の中へ顔を突っ込んでいた。するとある折、綽名をバレンとも神父サンとも呼ぶ髭面の老工員が、ぼくを上眼ごしでジロと見、「よしな。おめえは」と、ぼくを睨んだ。それから夜明け方、小屋へ引揚げてゆく途中で又、シヨゲているぼくの肩をその人が叩いた。

「あんなこと、覚えて、しようがあるめえ。おれみたいに成ッちゃうぜ」

小屋へ戻ると、彼はぼくに一そくの木靴をくれた。それまでぼくはみんなの穿いている木靴を羨ましいとは思ったが、革靴のように売ってもいず、手に入れる工夫も知らず、始終、水びたしの足に、ただの破れ靴か草鞋しか穿いていなかったのである。

小屋の仲間は、雨の日とか、夜業の夜には、暇を盗んでよく手製の木靴を作っていた。

どこからか杉材を見つけて来て、足型ともん数に合せ、鉋

や鋸や小刀で、まず靴の底から作り初める。サンダルの底部と思えば間違いはない。

皮革の部分はズックで作る。これはロップ小屋などから持ち出してくる。そしてブリキ板を細い带状に切り、木の底部の縁とズックの被包面との継ぎ目を縫糸の代りに鉋でトンントン打ち止めるのである。紐通しの穴金具は、これは靴屋で買っておく。——それでも穿けるのだが、なお防水の為に、ズックの面をお手の物の油脂で塗りたくる。案外丈夫で、何よりも足がとても暖かい。だから船具部ではこれを穿いていない者はない。足だけ見ても、あいつは船具部だなど、ひと目で分った。近頃はどうか知らないが、木靴にペンキの乾漆服という妙な恰好の工員はドックにだけしか見られる風俗ではないかとおもう。

帽子もペンキが積もって臺の肌みたいになったのを皆かぶっている。船腹塗装を終日する日などは、足場の上はいつも風が強いので、ペンキ刷毛の先からテレビンの飛沫が吹きかかって、睫毛もくっついてしまったりする。夕方は顔見合せて、相互の姿をお笑い物にして笑うのだった。

「この顔、女房子に見せたくねえナ」と、誰かが云えば、「彼女に見せたら何というだろう。おれは税関の倉庫係りという触れ込みになってるんだが」と、ボロに浸したテレビン油で顔をこすっている男もあった。

いずれ遊廓の女か何かであろう。よく通っている先の女のおのろけを始終自分から云い出しては、からかわれると、それで満悦している森公という小男の工員がいた。勘定日（月

二回の日当支払目」というと、それから数日間は極まって休む。取っただけを女の許で費い果すと、また出て来て次の勘定日までは欠勤なしに働きつづける。森公はまた頗る達者で病氣一つした例しはなく、十年一日の如く、その生活定石も崩したことがないという。

だから皆から小馬鹿にされていた。けれど六部では一番の古顔だそうで、通勤にはいつもチックで入念に髪を分け、悪くとも背広は着ていた。どうかすると細いステッキを伊達に掻い込み、独りニヤニヤ反り身で帰りを急いで行くことがある。「行くのか」と仲間からかわれると、ぼくより背の低い体を反らして「もち！」と得意になつていう。「あいつはもう四十六、七だぜ、一生ドックの古顔で、一生真金町（遊廓）へセッセと運んで行くんだなあ」と、仲間の誰かが云つていた。

彼の如き独身者は稀れで、女房持ちの方が多かった。二十年の勤続者も少なくない。毎日がこんな危険な仕事なのに、よく長の年月、怪我也死にもしないものだと思われた。会社の弔慰金などは雀の涙ほどしか出ない。泣き寝入りというよりは労働階級全般が今日のような自覚も組織も持たなかった時代である。あとの女房子はどうなるつもりで皆いるのだろう。この船具部もふくめて全工場での死者怪我人の数を統計にとれば、年間たいへんな数に昇るにちがいない。

どうかすると一日に二件も三件も医務員の白服と担架の列を見る日がある。さすがそんな時だけは、ドック内も一瞬シユンとなつて「今日は悪日だぜ、気をつけろ」などと云いあうが、一時間もたつと忘れてしまう。もっとも些かの恐怖で

も念頭にあったら、船具部の仕事などは半日もやってはいられない。

そういう地獄の一丁目と普通世間との門を、二十年以上も朝夕のブーを耳にしながら通っていると、森公のような人生観に到達するのは自然かもしれない。人は森公を嘲うが、案外、森公の諦観は、ほかの女房子持ちの多くの仲間を憐れと観ていたのかもわからない。

多くの話題は、職場小屋に全員が集まる昼休みの三十分に沸くのだが、ここでも食い物に次ぐのは猥談であった。森公は甘ツたるいおのろけを眼を細くして云うロマンチストに過ぎなかったが、ほかの連中の猥談というのは、そんな程度のもものではなかった。ぼくは幸か不幸か年少から書物を通じて大人たちの秘戯の世界をもう想像の上では充分知悉していたつもりであったが、この人達の猥談に依つてさらに啓蒙を深められたことだった。彼らのする猥談は、小咄的なニュアンスも何の洗練もあるわけではない。事実の報告ならその事実性を、露骨なら露骨に徹した猥行爲の打ち明ければなしである程、話題を囲む連中の傾聴と喝采に値した。

ここに到つて、ぼくなどは心ひそかに、まだ自分の未知な未経験な大人の別生活があることを今更のように思つて、唾を呑みつつ聞き耳たてたものだったが、しかしその影響が後頭部に幾日もこびりついているような影響は覚えなかった。いや就業のブーに追われて小屋を出るやいなや吹ッ飛んでいたのである。また、かつてはぼくも自慰を覚えて、反省と自己の破れの繰返しに憂鬱がちな日もあったが、ドックの重労働

働を課せられてからは、全く意識せずにその悪習も忘れていた。家に帰って空腹を充たすと、疲労しきった肉体は、ぜいたくな夢をえがく瞬間もなく、眠りへ直行してしまうのだった。

だから——と云って、ぼくの例では適切でないかもしれないが——猥談の常連みたいな他の大人達も、じっさいはそれ程な猥漢でもないし行為はしていいのではなかったろうか。毎日の職場が一步過ればドックの底に落ちて脳骨もみじんとなるような死か生かの奈落を覗いている仕事なので、彼らといえ前夜の不摂生や体のコンディションには非常に細心なのであった。仲間の者の事故を聞き知っても、その者が日頃そうした注意に無頓着な方だとすぐ「ゆうべのせいだろう」と冷笑したりするのである。命知らずに見えながら肌には「お守り」なども人知れず持っている彼らであった。

浜ちゃん

ドックの勤めだけは辛かった。毎朝の足が重くて、一朝とて元気に家を出られなかった。けれど依然貧乏やつれの母を見ると、そしてその母がお弁当をつめ、子のぼくにいそいそ心をつかって、送り出してくれたりすると、やめたいやめたいと思いつつも、口には、云い出せなかった。

いつか、半年以上も勤めた。ぼくは十九になった。その年の五月である。四女にあたる妹の浜子が死んだ。浜子の死ほど一

家の者に深い痛恨を刻みこんだものはない。

浜子はわずか九歳だったが、数ヵ月前、房州の田舎町の飲食店へ奉公に出されたのだった。当時の貧乏人の家庭では、単なる口減らしという目的だけでよく子供を外へ出す手段をとったらしいが、そんな幼い者を、どうして房州へなどやったのか。母は、後では悔みに悔んで泣く泣くぼくに打明けたが、どうしても十五円程の必要に迫られ、先はよい主人という口入れ屋の話に乗って、前借の為に手放したものである。

浜子は人形のように色の白い端麗な子であった。貧窮の中で物心のついたせいかわい子で母思いだった。遊びたい盛りなのに小さい心を母と一つに貧苦して来た。だから母の側を離れるさえ嫌だったろうに、遠くへと云われても、「……うん」と云ったのだらうと思う。

行った先の主人の話では、着いた日から御飯もろくに食べず、泣いてばかりいたらしい。そのうちに床についてしまった。医者に診せたが、たいした事もないと云う、けれど次第に痩せ細るばかりなので——と、親元へ帰してよこしたのであった。

家の中へ寝かせたとき、もう意識はなく昏々としていたのである。医者は脳膜炎と診立てた。氷嚢をあて、半月程もその儘であり、母は枕元で詫びてばかりいる。母も狂気しはしないかとぼくは惧れた。ぼくもドックから帰ると浜子の枕元に坐りきった。まるで天女みたいな愛くるしい顔しているのだ。自分の肉親をこういうのも変だが、浜子の顔ほど汚れない美しさを、ぼくは生きている人の中では見たことがない。

意識がなくても今は母のそばへ帰っていることを安んじているのだろうか、清々^{すがすが}と昏睡しつづけている。真夜半頃になると、ぼくもそうだったが母も自然なようにその顔へ手をあわせてただ拝んだ。時々微かに囁言^{うわごと}を洩らすのである。囁言はかならずお母さんと呼ぶらしかった。そのたびに母は浜子を抱いて慟哭^{どうこく}した。そして、すやすやとそのまま亡くなってしまったのである。

浜子の死については、今でも思い出すと悔恨と傷ましさに、ぼくは胸がふさがってくる。五月十三日という命日まで忘れない。どうその頃の人の矛盾や救いのない貧乏の沼を察しても、今からでは理解できないものがある。口減らしなら口減らしの他の策も、切羽詰^{せつぱつま}った必要ならその必要の算段にはほかの考え方もあったらうにと、ぼくは浜子の死後、腹立たしさに、母にさえ何か喚いた覚えがある。が余りそれを云うと、母は当時身投げでもしかねないような容子であった。こんどはそれを惧れたこともぼくの記憶に消し難い。

運命は悪戯者^{いたづらもの}というが、こんな弱者の家庭へも同じに見舞った。皮肉にも浜子の死後まもなく、ちよつと家運が開けた。どういう金が入ったのか、家は鉄ノ橋側の吉田町二丁目へ引移った。このさいの経過は、日々ただ眼をつぶって、辛いドック勤めをつづけていたぼくには、よく分っていない。

吉田町の家は、繁華街のすぐ横で相当な構えの家であった。だからぼくは今度こそ父に申し出て、ドック勤めはやめたいと、ひそかに折を窺^{うかが}っていた。そして東京へ出て、苦学したいのが、真意であった。

ところが、その希望をつよく両親へ云い出しえないでいる前に、ぼくは船腹のペン塗り仕事の最中、仲間の者の過失からドックの底へ、足場もろとも落されて、野毛山の十全病院へかつぎこまれる身となっていた。

十九の朝

その日ぼくは、ドックの底から担架でかつぎ上げられて、野毛山の十全病院へと運ばれてゆく間に、いつか意識を失っていた。何分か何十分かは、完全な仮死に落ち入っていたわけである。

病室の白いベッドに気づいてからも、どんな手当をうけたのか、ぼくを繞^{めぐ}っている人々が、いかなる会話を交わしていたのやら、当座も今も、全く何の記憶がない。ただ全身のいたみを歯の根と指に握りしめて、どこにも温^{ぬく}みのない硬ばった四肢を慄^{おそ}わせて居ただけだった。

頭のしんには、いつまでも、ドックへ墜落したせつなの、グワンという衝撃が、そのまま詰まっている感じで、幾日も止まった時計のように頭脳の働きをしなかった。だから得難い経験を通じていたのに、仮死から蘇生^{そせい}の前後は、やはり夢中であつた。後の生涯の足しになるような何も掴んでいなかった。のみならず、その日が何日であつたやら日まで忘れてしまっている。唯、十一月の末だったことだけは確かである。

もし自分に日記をつける習慣があったら、きっとその事は多分な感慨で後に書きとめておいたろうが、ぼくには以前からそういう記録癖がちつとも無かった。今でもそうだが、そろッペな一面がどこかにあった。というよりも、そんな貴重な試煉に会っても、それを契機に青年なら青年なりの生命観に触れてみるとか、生涯のエポックとして考えるとか、というまでの自己直視もまだ持っていなかったものだろう。年は十九にもなっていたのだけれど、一こうなおまだ、あんやもんや時代”の殻を脱け切れていないうち、この奇禍に遭って、茫然と、葉びたしのわが身を、白いベッドの中に見出していたというのが偽らないぼくの気もちやら姿であった。

もちろん三等室である。だが、六畳間ほどな一隅のベッドは、ぼくだけの物だった。いつ眼をさましても白い看護婦の姿が見え、瀬戸の火鉢には湯がチンチン沸いていた。一種のしじまが、重傷患者の気もちを、やがて、すっかり落着かせてくれた。

朝々の廻診が来るたび、左右から看護婦たちの白い冷たい指先が、ぼくの胸をはだけ、胴中から腰全部にわたる繃帯を解いて行った。いちばんひどく打った箇所は尾骶骨の辺で、肩や右腕の怪我は、さしたる事もないらしかった。副院長は、ぼくを眼鏡の下に見て云った。

「うまく墜ちたな、こんな程度ですんだのは奇蹟だ。命びろいしたんだよ、君は」

ぼくは羞恥いで顔をまッ赤にしていた。医師へではなく、多くの腰やら胸の肌をいたわりつつ仕舞ってくれる看護婦た

ちの白い手に対してである。こんなさいの、瀕死にちかい意識すら、昆虫の触角みたいに顫えるのだった。そして、自分の肌の汚さが案じられた。頭髮の根には鉄サビの粉を沈めていないか、どこかには赤ペンキの汚染を残しているだろうなどと、ひそかにコンプレックスに身が縮む。そのくせ、彼女たちの些細ないたわりや優しい眼ざしにもすぐ心が鳴って、何か、ここの憩いが、愉しくさえ思われた。そして漸く、この患者は、廊下を行き交う人の声にも、廻診と一しよに朝夕入って来る白粉や髪の新香のほのかな物にも、鋭敏になりつつあった。

どうして墜ちたのか、奇蹟的に助かったか、前後の事や、せつなの記憶も、やがて徐々に、よみがえって来た。

船具部の仲間は、その日全員で、一号ドックに入渠中の一万噸ちかい欧州航路信濃丸の外装塗工にあたっていた。

船腹上部の黒ペン塗りが終り、吃水線部のオートライまで吊り足場を下げて、船首から艫へわたる数十組の足場足場の工員は、熟練した動作で、レッド・ペン缶を片手に、迅速な仕事を争っていたのである。

午後の三時半か四時頃であつたろうか。巨大な船腹は塗りたての赤い液と西日にキラついていた。だが、ドックの底は、もうほの暗く、所々に薄氷が光って見える。当然、夜業になるらしかった。

足場は、尺板二枚を並べただけの物にすぎない。両端を枕木で締め、ロップ車が附いている。そのロップは、船の上甲板に結い附けてある、も一つの車を通して、ドックの宙から

陸へと長く渡してあるのだった。陸の杭は、文字どおりの命の綱の根本なので、頑丈にできている。高さ三尺ほどで頭の丸い、鉄製の太い杭だ。ドックではそれをミットとよんでいた。

ミットの頭には、鉄の筭^{うがい}が横に出ている。足場綱をゆるめて、船腹の足場を下げるさいに、過って、ロップが外れない為にある。ところが、その日は、手不足であつたのか、陸のミット番に、船具部以外の人まで狩り出されていた。

さつきから、ぼくの足場と、ぼくの仕事の進捗^{しんちょく}を、陸から見ていた倉庫係の平井という老人が、ぼくのペン刷毛が、さいこの僅少な面を塗り終るか終らぬうちに、「下げるぞう。つかまつてろ」

と、うしろで唸鳴るのが聞えた。

ぼくは慌てて、足場板の中ほどから、端へ駈け寄つた。風にさえ、すぐブランブラン揺れる足場だし、歩くと、上下にも撓^{しな}うので、自然、その上での動作は曲芸師の身ごなしが身につく程なものであった。——平井老人は、ぼくが端へ寄つてロップに掴まつたと見たか、陸の上で、もう足場綱の端を、徐々にゆるめ出していた。いや、その一瞬に、足場板もろとも、まッ逆さまにぼくはドックの底へ墜^{おと}されていたのである。

高さは約四十呎^{フット}ぐらいだったかと思われる。もし、体を振り落されていたら、宙をもうどり打って、当然、頭蓋骨を粉な粉なにしたであろうが、幸いに、ぼくは足場板の端と一しよにどんと腰を打って、一度、弾み上がり、そして転がるさいに、肩や脚そのほかを傷めるだけですんだのだった。とっても、とたんに、気を失ってしまったのはいうまでもない。

たちまち駈け寄つて来た人たちの声が耳元ではあるが遠くに聞えた。ぼくの体は人々の手や肩で、ドックの胸突きのような石段を担ぎ上げられているらしい。ふと、その間にわれに返つた。そして自分の体を見た。胸も手も、ほとんど全身が血に見えた。

血と感じたとき、ぼくは又、失神状態に落ちてしまった。それきり何も後は知らなかった。後で考えると、血と見たのは、手に持っていたペン缶のレッド・ペンを満身に浴びていたものだった。ちょうど、夕陽の頃だったから、開いた瞳孔に、その赫^{かつ}光も手伝つて、頭からの鮮血と思われたものにちがいない。

また、過失の理由も、後で聞くと、こうであつた。寒いので、平井老人は、手袋をしていた。船具部の仲間なら、そんな事はないが、係りは倉庫番であつたし、年も老^とっているので、足場綱が、杭の肌に火の匂いを出しつつ、キ、キ、キと軋^{きし}み出すと、もう食い止める力もなく、思わず手を放してしまつたらしい。——尤^{もつと}も、そう成つてから、なお踏ん張ろうとすれば、足場の下降する勢いで、逆に自分の体が、ドックの巨口へ引き込まれてしまふかも知れないから、しまったと思つても、ロップを放さざるを得なかつたわけである。

ぼくの奇禍が、この人の過失と聞かされて、後では妙な気がした事だった。まだ会社へ入りたての頃である。ロップ倉庫の前で、その平井老人が、ぼくを見るなり「おや、アスアかと思つたぜ、よく似てるなあ」と大ゲサに眼を丸くして云つた。その後も「おめえ、アスアに似てるぜ」と、ぼくを見

るたび云うのである。気になって、アスアって誰？ と仲間
に訊いてみたら、以前、三部にいたが、製缶工の手伝い仕事
で、艫足場から墜ちて即死した混血児だとの事であった。

それから変に、平井老人の青ぐろい皮膚や出ツ歯が、ぼく
には、不吉な象徴に見えて仕方がなかった。先でもぼくを嫌
ッていた事だったろう。とにかく、どっちも虫が好かない風
だった。でも、こうなったので、或る日ドックの帰りに、い
ちど病院へ見舞には見えてくれた。しかし何を云って帰った
か、何も耳に残らなかった。

患部の痛みはべつとして、ぼくは毎日のベッドに退屈も知
らなかった。

朝晩のドック会社のブーは、この窓へも聞えて来る。ブ
ーが鳴っても、あの鉄の門へ急がなくてもいい。木靴を穿い
て危ない軽業師のような労役に就かないでもいい。そう思う
だけでも、偶然な幸福に見舞われている気がした。事実、こ
んな安息は、何年にもなかった事だ。何もしないで、温かな
食事を看護婦の手で給仕され、本も読めるし、自由な空想も
描いていられる。嘘みたいなの、昨日と今日の違いだ。災難だ
った、気の毒だったと、人の云ってくれるものが、自分にと
っては、逆にこんなにも密かな愉しみだったのである。

そこへ運び込まれた日、誰より先に、色を失って、駈けつ
けていたのは、母だったにちがいない、その母の姿さえ、二、
三日は、はっきり意識にうけとれもしなかった。痛い痛いとか
ばかり訴えていたらしい。だが、漸く容体の快方が見えてか

ら、母は或る折、今度の事では、あのかたくなな父さえ、ど
んなに吃驚したかという事を、ぼくの枕元へ身をすり寄せて
話した。

「――あの日、会社のお使いが来て、おまえが、ドックへ墜
ちましたっていう、知らせじゃないの、お母さんも、台所に
いて、そのまま腰が抜けそうになったけれど……お父さんも、
あの日ばかりは、何ともいえない顔をして、腹のそこから云
ってたことよ」

「お父さん、なんて云ってた？」

「ああ、男の子ひとり、なくしてしまったか……って」

「ぼくが即死したと思ったんだね」

「そうよ、それやあ、お母さんだって、どきッとしたわ。病
院へ来てみるまではね。でもまだ、あの日一晩中は、お母さ
んが枕元に付きッ切りで居たのを、おまえは全く知らなかつ
たでしょう」

「知らない」

ぼくは首を振った。そして、又すぐ、

「……すこし、知ってた」

と云い直した。

当時の事も、てんで記憶には少ないのに、母の印象や、母
と二人きりで居たときの場合は、こんな些末な会話の端さえ、
ふしぎに今も鮮やかなのである。ぼくにとつての母は、たし
かに恋人以上な何かを持っていたのだろう。特に又、この病
室での印象が濃く残っているのは、その折母がぼくに向って、
父の前では見せてくれない愛情のふところを大きくはだけて、
ぼくの顔を添え乳してくれたむかしのように、抱きしめてく

れたからであった。

そして、そうしながら、母はぼくの耳元へ囁いた。この折の母の息の香や肌の温みは、十九の子にも永遠に忘れられないものだった。ぼくの生涯に大きな転機と勇気をそれは与えてくれた。

「英ちゃん」と、母はぼくの顔を抱くようにして囁いた。「——ね、英ちゃん。体が癒って、この病院を出たら、どうしたいと思ってるの。十九だものね、あんたも」

ぼくは甘えた心地で眼をつむっていた。尾骶骨の辺がまだズキンズキン痛かった。退院後の事など何も頭になかった。体の恢復は、ベッドの安息所から出て、再びドックの冬風や家庭の貧苦に当ることを意味するのだ。ここを出てから先の事を考えるのは、空恐ろしい気もちもあった。

「ねえ、……またドックへ勤めるのは、あんたも嫌なんですよ、辛いんでしょう。お母さんは、こんな事のない前から、毎朝のように、おまえのお弁当を詰めるたびに思っていたの。あんな危険な勤めは、どうかして止めさせたいし、おまえも、年頃だしと思ってる」

「だって今、ぼくがやめたら、困るだら、お母さんも」

「それは困るけれどさ。こんどこそ、病院を出たら、思いきって、お父さんにお云いなさい」

「なんて?」

「いつも、胸に思ってることをさ。……あんたの望みをね」

「東京へ出して勉強させて下さいって云うの」

「ええ。お母さんも、それとなく、お父さんに、おすすめし

ておくからね。お父さんも、こんどの事では、ひどく感じていらっしやるから、きつと、ゆるしてくれますよ」

「けれど、ぼくが居なくなったら、お母さんだって、心細くない」

「もう、家の事は心配しないで……。お母さんの事も……。それより、おまえは、もう、おまえだけの方針を取って、苦学するなり、東京で働き口をみつけるなりしておくれ」

母は、そう云って、急に、あらたまった口ぶりで、

「有難うよ。……英ちゃん、長い間、よく働いてくれたわね、もうおまえは、おまえの道を進まなければ」

それから十分か十五分後に、看護婦が昼の食事か何か持って入って来るまでは、ぼくは母の胸から顔を離さずにいた。看護婦の山田さんに、母はいつも何か心づけの物を持って来ては、息子のみとりを、心から頼んで帰るのだった。吉田町の家へ移ってから、家計の内面は依然火の車だったろうし、父の性情も急に変ったわけではないから、病院へ来ても、その後は、母も顔を見るだけで、いつもせかせか帰りを急いだ。けれど、それっ切り何も云わなかったが、母の気もちと、ぼくの心は、ここを出ないうちに、かたく極まっていた。

退院したのは、十二月の末だった。

さすが、ぼく健康で家に帰った姿を見ると、父も「よかった」と何度も云って、しんから欣しそだった。

その機嫌を外さないうちに、その日か翌日のうちに、ぼくは改まって、父の前へ、日頃の希望をのべてみた。ドックで死んだと思って、ぼくに暇を下さい、東京へ出て、苦学します。そして、職業に就いたら、一家を迎えて、東京で生活

するような方針を立てますからと、必死な決意が、自然、大人びた口吻ともなつて云つた。

案外、父はかんたんに、「うむ、やってみるさ」と云つた。決して、いい顔つきでもなく、呻^{うめ}きみたいな返辞だったが、「苦学か。まあ、苦学もいぢどは、やってみるといい」打っちゃるように、ゆるしてくれた。

苦学とか立志とかいう文字が、青年の脳裡に強い意欲と夢をもたしめていた時代である。父は、ぼくも流行青年病の一人と見ていたものだろう。その点、娘時代を近藤真琴の塾で育てられた母とは、違いがあつた。芝新銭座の近藤塾に勉強していた沢山な若い人々の夢を、母は娘時代に知っていた。だから、子のぼくが、十九ともなり、十九の年も、終りかけている今を、父以上、本氣になつて案じていてくれたかと思われる。

こればかりは忘れはしない、年暮の三十日であつた。ぼくは生れて始めて、家という巣箱を出た。父と母へ、改まつて、暇乞^{いとまご}いをした。母はその朝、ぼくの門出の為に、赤の御飯を炊いてくれた。小さい弟妹たちも交せて、干魚の尾頭^{おかしらつ}付きで、みんなで朝飯を食べ、それから母に送られて、桜木町の駅から汽車に乗った。

いまから考えると、ちと滑稽である。けれど、その頃は、桜木町駅を離れる汽車の窓から、ホームに立ち残っている母や小さい者たちへ、涙を溜めた目で、離別のハンケチをいつまで振つていても、決して、それが衆目にも、おかしい事ではなかつたのである。それほど、横浜東京間の距離は、まだ遠かつた。

汽車が、高島町辺にかかると、車窓の右側に、船渠会社の構内が、すぐ、まる見えに望まれる。一号ドックにも、二号ドックにも、入渠船のマストが見えた。今日もその足場で生命^{いのち}がけの作業をしている木靴の仲間の顔が、あれこれ、ぼくの眼に泛^うかんでいた。長い間、世話になつた組長の猪子さんに、黙つて去つて行くのが、悪かつたと、急に思い出されたりしていた。

それと、もひとつ、心にすまない事が残っていた。船具部仲間の無尽である。十円取りか、十五円取りか忘れたが、何でも必要があつて、ぼくは途中でせり落していた。で当然、あとの掛け金の義務がある。ついにその債務を、ぼくは恩人の猪子さんに背負わせたままで横浜をあとにしてしまった。今でも、これは返していかないものである。今日まで、ただすまない、何十年も思つて来た。

どうしたのか、ぼくは新橋駅まで行かず、品川駅で下車してしまつた。八ツ山下の賑わいを見、もうここが東京かと、慌てて降りてしまつたものとみえる。

紺ガスリに、黒木綿の兵児帯。ただ駒下駄だけが、新しかった。母が買ってくれたのである。それと、出がけに、母がぼくへくれたガマ口に、一元七十銭入っていた。いのちから二番目の物と大事に持っていたのだらう、この銀貨銅貨取り交ぜての額は、はつきり覚えてゐる。

上京記

その頃の、苦学という事、東京へ出るという夢は、当時のぼくら青年にとつては、最高の希望を、最低の手段で掴もうとする唯一の道であつた。

封建中国のむかしにも、洛陽^{らくよう}へ上つて進士^{しんし}の試験を受けるのを青春第一の関門とした若人たちが——笈^きヲ負ウテ郷関ヲ出ヅ——と悲歌したが、そんな気もちに似たものが、明治末期のぼくらにも、やはりあつたのである。

それはよく出世主義の世態と間違われるが、当時の風潮は、あながち金持ちや高官を目ざす拝金昇官思想だけに依るものとは考えられない。もちろん、資本主義の隆昌と時の国運が醸成したものにはちがいないが、純粹な志学青年も、芸術家の生涯を夢む若人も、みな慘憺^{さんたん}たる思いを越えて、東京へあこがれ出たものだった。その事は、後年一家をなしても、決して、富裕にもなれないし、食うや食わずの大家すら存在した当時の文学者や画家にさえ一生を賭^として成ろうと志す未来夢の持ち主が、本郷、神田辺を中心に、うようよ居たのを見てもわかる。

むろん、押しなべて彼らは一様な貧書生であつた。しかし書生の名には誇りがあつた。彼ら自体に一つの節操と制裁をも持っていた。輕薄を嫌って、持ち前の野性、その蛮力ヲ振

りを都人士の中に振舞うのを快とした。現代のアルバイト学生とたいへん違ふところは、明治の若さには、総じて楽天的なものが溢れていたことである。彼らの未来夢の信念が演じる稚氣^{ちき}や滑稽にたいして、社会人は寛大だったし、また一般に、書生さんなるものを愛する気もちが、庶民全体の中にあつた。現今のように、学生と大人とが対立し、蔑視^{べつし}し合うことはなかった。大人の狡才^{こうさい}を倣^{なら}つて、抜け道や横丁を巧みにくぐろうとする智慧を持たない若さだった。人生の門戸の正面から堂々と、唯、努力と勉強に依つてのみ通るものと極めている時代の例であつたから、一般人の愛や同情に媚^{めい}び諂^{たへ}うでもなかつたのである。当時の川柳家阪井久良岐^{くらぎ}の句、

いまに見ろ見ろよと歩く永田町

というのは、よく当年の彼らの気もちを代弁していたものと云つていいだろう。

ぼくの出京希望も、間違いなく、そんな時代風潮のせいだった。品川駅前に乗った電車の窓から、漫然とただ街を見ていたが、長い区間、飽くのも覚えなかつたのは、出京第一日の不安やら触目の事々に新鮮な驚きを抱いていたせいであろう。もちろん、東京の地理は何も知らず、電車に乗ったものの、どこで降りるあてさえなかつたのである。

終点へ来てしまった。本所の緑町であつた。

日が暮れたら、木賃宿^{きちんやど}でも捜すつもりだったが、ふと町角の貼り紙に「職業を求める方はお出で下さい」とあるのを見つけ、探して行くと、相生町二丁目の裏通りに、その家があつた。見た所ただのしもたやでガラス障子が閉まっている。

表の小さい板看板に、日本基督教会青年部職業紹介所とあった。多分間違いはあるまいと、おずおず訪れてみたのである。そして、はからずも出京の第一夜は、いや、それがもう年暮の三十日だったので、正月の四日過ぎまで、ぼくは、この若いクリスチャンのインテリ夫婦が家庭的に営んでいた紹介所の二階に置いてもらったのであった。

この前後の事は、以前オール読物の誌上で、随筆としていちど書いたことがある。で、簡略にするが、職業紹介所という文字を、世間に見たのは、ぼくにとつて、その時が初めてだった。——という事を友人に話したら、その友人は、いや明治四十三、四年頃なら、日本でも職業紹介の制が民間に創始された極く初期か、或いは、基督教会青年部のその若いインテリ夫婦が最初の試みをやった人かもしれない、おもしろい因縁だから、ひとつ調べておこう、と云ってくれたが、まだ以後の返辞は聞いていない。

とにかく、ぼくは運がよかった。路傍をまごつく事もなく、又、一円七十銭しかない乏しい囊のうちゅう中もそう減らさずに、正月を越せたのだった。食事は外のめし屋へ喰べに出かけ、一回五銭か六銭で足りた。横浜では、小さい時から、教会にも折々は行ったことがあるので、若いクリスチャン夫妻とも、多少宗教的な話もできた。それに自分にはまだ、朝々霜を踏んでドックへ通った勤労癖が身に沁みていたから、云われないでも、門口を掃いたり雑巾がけを手伝うぐらいな仕事は、義務として、何の卑下も億劫おっくうでもなくサツサツとやった。

鼻下に優しい髭のある知識層らしいその主人は「君ネ、

勉強しながら働く口となると、実際はなかなか少ないんだよ。けれど、君なら保証して世話して上げられそうだから、きつと探して上げますよ」と、毎日、ぼくの職探しの為だけのように、どこかへ出かけて行った。そしてたしか正月五日だったかと思う、丸ノ内の或るパン屋へぼくを連れて行ってくれた。

いま考えると、そのパン屋は、数寄屋橋から日比谷交叉点へ出るあの大通りであった。けれど当時は、日比谷寄りの方が、サンドイッチの一片の如き三角な街になっていた。そして街の尖った先が、数寄屋橋方面へ向いており、大きなパン屋の店がその角地を占めていた。

あいにく店主が不在で、長時間待ったが、会えずに帰った。すると翌日、もう一軒べつな口があるが、そこへ行ってみるかとの話が出た。そこで急に気を変えて、こんどは紹介状だけを貰って、一人で行った。本所菊川町の小さい螺旋釘工場らせんくぎであった。

五十がらみの素朴な工場主であった。物を云うにも、咄々とつとつと、どもる癖のある人の好きそうな人で、自分も工員とおなじ油ジミた作業服で、一日工場で立ち働いていた。食事付き日給二十八銭、宿舍費はべつ。日曜は休む。仕事は午後五時半までとの事。何か自分の条件に合う気がしたので、すぐ使って貰うと決め、その晩から工場の二階に八、九人の職工たちと一しょに寝た。

ここの工場主もクリスチャンであった。つまり紹介先はみな日本基督教会のメンバーだったものだろう。工場での仕事

は、至極單純なものだった。一台のラセン削り器械を受け持
って、終日、真鍮屑を足もとに溜め、手とペダルを動かして
いれればいいような仕事にすぎない。けれどこれが、毎日の夕
方になってみると、全身労働にも劣らない疲労になる。晩の
宿舎では、誰も彼もくたくたになっていて、およそ書物を手
にする者などは一人もいない。自墮落と不潔と無希望な沼に
見えた。

母からはよく便りをくれた。ぼくも出京以来、毎日のよう
に手紙を書いた。安心するようにばかり書いたので、母は、
ぼくがもう志望どおり苦学の方途をえて、勉強の緒について
いると思ったのか、小包便が届くと、母の夜業に縫われたら
しいシャツやら学生股引にくるまれて、必ず何冊かの本が出
て来た。欲しいと思っていた竹越三叉の二千五百年史などわ
けてうれしかった。それと、或る時、『あやめ』の二十刃が
一しよに出て来たときだった。家にいるうちから、父には内
緒で、煙草の盗み喫みをやっていたぼくの煙草好きを母は知
っていたのである。その折の小包は、女物のつづれた腰紐で
くくってあった。覚えのある母の腰紐なのである。捨て難く
て、自分の寝衣に締めて寝た。機械油だらけな仕事服のズボ
ンの下にも締めていた。すると仲間が見つけて、「……あれ見
や、あんな赤い紐を、肌身離さず締めてやがる。いろ女も、
本望だろうな」と笑い合った。けれどぼくには、その揶揄が、
ちっとも不当には思えなかった。離れてみると、母は、ぼく
には恋人であった。いや恋人にも増して、箱弁当の飯を油手
で食べている間も、思い出されてばかりいた。

ふた月三月いるうち、「ここでは勉強も」という焦躁に駆
れ出した。依頼心というでもなく、ふと暗中摸索する気もち
が、ぼくを闇夜へ追い出していたのである。或る晩、工場が
退けてから、ぼくは青山の伯父の家をさがして歩いていた。
伯父の斎藤恒太郎は、ぼくが幼少の頃、いちど母に連れら
れて行った覚えのある北白川宮の邸内から、その後、青山南
町へ移っていた。と分っていただけで番地も何も知らないの
だ。

それに、片道五銭の電車賃が無くて、ぼくは本所菊川町か
ら青山南町まで歩いたものだ。交番だけでも幾カ所訊き歩い
たか分らない。唯、伯父の現職は、学習院英文科の教授とい
うだけは聞いていたので、それを頼りに探したのだった。そ
して漸く、探し当てはしたけれど、もう夜も十二時近い頃だ
ったかと覚えている。

伯父はひどく吃驚したらしい。

「え。おいくさんの息子だって。あの英さんという子か」
という声が、玄関にまちかい奥の一室でしていた。しかし、
「お上がり」とも云われない儘、ぼくは古風な式台造りの片
隅に腰かけて小さくなっていた。長い間待たせられた。その
間に文金の高島田に結った令嬢風のひとがお茶とお菓子を供
してかくれた。ぼくには、従妹にあたる園子と呼ぶ女性とは
分っていたけれど、何のことばも交わせなかった。

ほどなく伯父はむずかしい顔して玄関に姿を見せた。鳥羽
藩の士族出で、攻玉舎の英語教官から宮様の進講係となって、
現在、従五位の学習院教授という明治の英文学者である。神
経質な細面に金ぶちの眼鏡をかけていた。その眼鏡ごしの視

線に、ぼくはもう後悔にせぐられていた。到底、自分の望みなどを訴えても、理解されるはずのない別世間にいる親戚先などへ、わざわざ恥かしい思いをしに来るんではなかったにと、未熟な分別も湧いて、居たたまれなくなり出していた。

けれど伯父の方は、時ならぬ深夜だし、何事かと驚いたにちがいない。「家出して来たのか」と、まず訊ねた。「いいえ、母も承知の上で、苦学しに出たのです」と、有りの儘をぼくは答えた。そして、駄目だとは思いつながら、

「どこか、塾の学僕か、学校の小使みたいな口はないでしょうか。書生に置いて下さる所があれば、なおいいんですが」と、志望をのべた。

けれど伯父は全然受けつけはしなかった。無断で出京したに違いないと見、流行の苦学亡者^{もっじゃ}を諭戒するような語で、あたまからぼくを叱った。「まして、おまえの家では、おまえが居なくなったら、困るじゃないかね。お父さんは働けん人だというし、おいくさんだって、まだ小さいのを沢山抱えている所だし」と云ったりした。そして「汽車賃だけは上げるから、帰んなさい。帰って、家の手助けをせにや不可^いん。おまえは、おいくさんの長男ではないか」と云うのみで、何も耳には入れてくれないし、又ぼくも、ここまで来る途々考え抜いていた事的一端すらも、口に出すことが出来ずにしまった。

訪れた悔いをその儘抱いて、ぼくは夜半の一時頃、斎藤家の門をすくすく辞した。金も無いが、もう電車も通っていない。青山の果てから本所の果てまで、又ぶらんぶらん歩いて帰った。

生来の空想癖にすぐ遊ぶせいか、ぼくはこういう場合も、道の遠さとか、人の辛さとか、そんな事は余り心にこたえない。この晩の長い帰り道も、何を考え考え歩いたろうか。腹も減っていたに違いないが、さっぱり悲痛な気持ちにはなかったようだ。親戚の冷たさとか、世間の無理解に不平をなすりつけてみるとか、そういう卑屈感^{ひくく}は、少しも心を傷^{いた}ませていなかった。至極のん気に、夜靄のさまよいを愉しみつつ、夜明け近くまでに、ぶらんぶらん菊川町の工場へ帰りついた。そしてひと寝入りして、翌日は又、黙々と、ラセン釘削りの器械を廻していた。

あとで反省してみると、昨夜の事は、母へも悪い事をしたと思った。ぼくの家が、転々と、どん底からどん底へ落ちて行った多年の間も、引越し先を尋ねては、先方から訪うてくれるような人はひとり斎藤の伯父だけだった。しかも、その人に嫁いだ、ぼくの母の姉は、もう故人となつて、後添^{のちぞ}えの夫人が家庭にいるのである。そんな事も思わず、母に黙って、斎藤家を頼って行ったのは、無分別というものに極まっている。ぼくは母への手紙に「……もう行きません、何があっても頼りにはしません、斎藤家へ謝っておいて下さい」と、書いた。

しかし、斎藤家の方でも、後には、ぼくの出京が、母も諒解上のことであつたのを知って、ひどく気の毒がったそうである。という話を、後年、従妹から聞かされた。その従妹の園子は、まもなく横浜の岡野銀行頭取の石渡又七へ嫁いで、つい昨年まで、鎌倉に住んでいた。この「忘れ残りの記」の初めの方に書いた、ぼくの母に関する娘時代の事は、従妹の

記憶に依る所が多かったのである。けれど、その従妹も、ついこの春亡くなった。

菊川町界隈の沢山な小工場の中に、S手提金庫製作があった。四月頃、ぼくはラセン釘工場の主人とも諒解の上で、S工場へ籍を変えた。勤務時間、賃金、勉強する条件なども、S工場の方がよかった。手提金庫という物が盛んに市場へ出はじめた頃で、工場も新しく、活気があり、会社は儲かっているらしかった。

製缶部、洗滌部、塗工部、包装部などと小さく分れていて、ぼくは事務員の名で入ったのだが、雑役が半分だった。製品が溜ると、品別伝票と数量簿を持って、荷馬車や荷車に付き添い、薬研堀の本店倉庫へ収めに行く。倉庫や本店でよく見かける紳士然たる瘦せぎすの、いつも渋好みの洋服を着ている四十恰好の人が、あるときぼくへ、

「君は、工場に泊っているのか」

と、訊ねた。

この人が社長さんと聞いていたので、ぼくは「はい、そうであります」と云ったような口調で固くなって答えた。その時は、何か簡単なことだけしか問われなかったが、ふた月三月たった頃、こんどは工場で、「一度、夜でも、ぼくの家へ遊びに来い」と私宅の書いてある名刺を渡された。

両国河岸の百本杭の辺も、まだ閑静な家やら木々も残っていた頃である。指定された晩、ぼくは百本杭の社長邸へ恐々行ってみた。晩飯を御馳走してくれた。そしてS氏から「君

は、苦学しているという事だが、工場勤めでは、勉強も出来まい。それに本所辺の夜間学校などへ通ってみたところで、将来の足しにはならん。工業方面へ出たいなら、蔵前ぐらいは、やっておかなくっちゃ駄目だ。蔵前高工を目ざしたらどうだね」というような口ぶりだった。

家庭の都合で、中学も出ていません、と答えると、「だから、ほんとに君が勉強したいのなら、勤務も変えて上げる。蔵前とは限るまい。どんな方法でも考えられよう。保証人にもなってる。ひとつ、熟考しておき給え」と云い、それから自分の事業は、発展の途上にある。将来は南洋にも支那にも支店を拡げるつもりだ、というような事もぼくへは話した。何で私宅にまで、ぼくを呼んで、そういう好意をもらしてくれたのか分らないが、とにかくその晩ぼくは感奮して帰った。思いがけない幸福に囁かれて寝つかれない程だった。

けれど次の朝にはもう諦めていた。S氏の好意は断るしかない。出京以来まだ半年だが、その間に、何十通となく見た母の手紙には、唯一人の稼ぎ手のぼくを失って、以後の苦しさは、つつみようもないものが窺われる。どうかすると、四日も五日も母の手紙の来ない日がある。そんな時は、郵便切手も買えない為にちがいないと思い、ぼくは自分の手紙に添えて、時々郵便切手を十枚も二十枚も入れておいた。また二円でも三円でもゆとりがあれば小為替にして送った。それでも安心とは思えなかった。吉田町の旧住所は、高島町何番地とかの、ぼくの知らない所に変っていた。

塗工部の通勤工に、Yさんというのがいた。浅草鳥越町か

ら通っていた本職の塗師職人である。多少ぼくの事を聞きかじってか、昼休みの或る時、ぼくを人無き所へ手招きして、「とても、いい仕事があるんだがネ」と、囁いた。「……どう、一年辛抱しない？ 眼をつむって一年辛抱すれば、いい金になる。仕事は、横浜へ出す輸出物だし、君も横浜の人だしさ」と、熱心にぼくを説いた。会津訛りはあるが、下町肌で小ざツぱりした気ツぷの人だし、日頃も親切屋さんと言われている程なので、一も二もなくぼくは耳傾けて、そのすすめに動かされた。

苦学するなどという夢は、半年にして破れていた。それ以前に、ぼくは本所林町の夜間工芸学校へ志願し、すぐ許可されたので、夜はそこへ通学していた。小工場の物置を改造したような所に黒い机が四、五十並べられ、靴や板裏ばきの儘、本所界隈の徒弟や子弟が集まって来る。工芸といっても、図工の養成が主で、初歩の図案、幾何など、単純な課目に過ぎない。それに生徒のだらしの無さ、ぼくは失望にくるまれて、転校などを思っていた。

そんな矢さきにYさんの耳よりなすめだった。苦学というのは、身一つの学問へ多年をかけることで、金を得る道ではない。ぼくの義務は金をうる早道に就くことだった。母も後の苦しみは承知でぼくを東京へ出してくれたのだが、今は貧苦にひしがれかけているのだろう。ぼくはYさんの世話で、その後まもなく、浅草三筋町のT氏の許へ、一年ぼっきりの約束で、輸出金属象嵌の下絵描きの徒弟に住みこんだ。

T氏は若松の人で、その頃、同郷の会津蒔絵出身の者は、

集团的に東京へ出て来て、もっぱら浅草下谷界隈の裏町に住んでいた。

T氏もその一人で、独身だった。開盛座という芝居小屋があり、その近くの露地を入った四軒長屋の一番奥で、四畳半に六畳の二間きり。師弟二人の男世帯、工房はその六畳で、漆を扱う小机ほどな定盤と、蒔絵筆さえあれば足る至極ちゃんまりした仕事である。だから局外者の眼には、一見、従来の日本蒔絵でもなし、絵付けする物はすべて真鍮材の金属だし、これが何に成ってどういう用途に向くのやら分らなかった。

輸出ダムシンと称されて、金属面へ漆で描いた様々な図案を、化学薬品に浸して腐蝕させ、その凹刻面に、鉄サビ漆を沈ませて研ぎ出した上、金、青金、銀などのメッキをかけて、さらに精巧な毛彫りをかける。京都には古くから駒井象嵌と称する独得な鉄地象嵌の伝統があつたが、それを近代化し、輸出向きに、量産する手法を用いたのが、このダムシン金属製品だった。

腕輪、ネクタイピン、簪入れ、ヘアピン、耳飾り、ナプキン環、花瓶、文房具類、装身具、家具の類まで、種類はたくさんあった。向く先の多くは、南洋市場らしく、当時は横浜商館の扱う品目のうちでも、かなり重位を占めたものらしく、東京には仲買人が来ており、毎日のように下職の家を廻って、昼夜、督促にあるような盛況時だった。

だが、何と小さな工房か。もちろん、下職や下絵描きの人々は、浅草下谷界隈に、何十軒とあつたわけだが、おそらくT氏ほどなさやかな世帯はほかになかったろう。T氏は会津人の辛抱づよい性格と、男ながらたまかな生計に達してい

て、ぼくが住み込むと、台所の水仕事から、味噌醤油、八百屋物の買出しなど、一切はぼくの任にまかせられた。けれど、味噌二銭、塩鮭の切り身、一銭五厘のを二切れ、といったような買物のさしずも、T氏自身が小銭を数えて命じ、経済上の才覚はなかなかゆるがせな人ではない。思いきや、ぼくは二十歳になって、初めて人の台所で、米をとぐことを覚え、夢みていた苦学の灯下に書を読む代りに、御飯のむし加減のむずかしさを学ばなければならなかった。

人生中学通信簿

どうかすると、今でも、ぼくは人から「——絵もお上手なんでしょう」などと、からかい半分か知らないが、乞われたりすることがある。

とんでもない。ぼくが絵も描けるらしいなんて思われたその因^{もと}を洗えば、赤面至極だ。前述したように、苦学目的で上京した当時、蒔絵師T氏の許で多少蒔絵を習ったり、図案を採^とるため、琳派や土佐画の模写に眼をただらした事があるので、何かの折、いたずら描きでもぬたくると、今でもその下地^{したじ}が意識なく出るのである。絵なんて云えるものではない。むしろ、そういう工芸目的だった下地に妨げられて、後々まで、ぼくには純な絵は描けなくなってしまうようなものだ。

浅草三筋町界限は、まだ旧東京の庶民暮らしが、そっくり

その儘、横丁や長屋の隅々にまで残っていた。煮豆屋と荒物屋の横で、四軒長屋が二た側になっており、T氏の家は、ドブ板のいちばん奥で、蛞蝓^{なめくじ}の這い痕^{あと}をもった戸袋やらガタピシいう暗い格子戸がそれだった。

どこも六畳三畳二畳台所だけの棟割^{むねわり}りだが、それでいて二坪三坪の小庭がみな付いており、目隠し板に八ツ手や楓^{かえで}を覗かせ、夏ならば朝顔や胡瓜を絡^かませたりして、けっこう庶民の雅懷を愉しむには事足りていた。

それと、隣り三軒、前四軒の箸茶碗の物音から、喜怒哀楽の声まで、手にとる如く聞え合うので、それぞれの職業、家族、出入りまでが、一軒のものとして判断される。で、終日、蒔絵師用のじょうばんと称する机に似た物の前に坐って、輸出の下絵仕事に根気をつめていても、ぼくは倦^うむことを知らなかった。

横浜の下層と、東京の下町との、違いもわかった。その前に読んでいた一葉の作品やら明治から江戸期の文芸にも見えた風物やら人の生態などにも少しずつは触れている気がした。また、この頃から再び江戸文芸にあらためて昵^なみははじめた。それも、秋成や西鶴などの高踏的なものより、鯉丈^{りじょう}の八笑人のような作品の人物に、より多くの親しみを感じていた。

実際に、鯉丈や一九の好モデルになり得そうな人間がまだザラに居た三筋町界限やら旧東京の下町だった。もう首都としての爛漫^{らんまん}から頽廢期に入っていた古いものに、かえって、ぼつと出のぼくは、新鮮と驚異を覚えていたものとみえる。

俳句を忘れて、川柳を作りはじめたのも、そして当時、日本新聞の客員であった井上剣花坊氏^{けんかぼう}に、とつぜん来訪されて面

喰ったのも、その頃の事だった。それが縁で、休日にかかる日には句会へも出た。柳樽寺発行の「新川柳」の同人にも加わった。川上三太郎氏の名も同人の中にみえた。だが、三太郎氏は上海にいますとかで、その頃はまだ顔を見せていなかった。

何しろ師弟二人きりの男世帯だ。米を磨ぎ、又カミソを掻き廻し、七輪に味噌汁を掛けたりしながら、ぼくはT氏に師事して蒔絵、象嵌下絵などの、習得をうけた。幸い、絵は幼少から好きだったから、のみこみは早かった。T氏と同郷の会津蒔絵師の仲間がよく遊びに来ては、ぼくの使う面相筆のうごきや構図を覗いて「初めてじゃあんめえがのし。ろくに年期サ入れねえで、こげんな絵が描けるちゅう事があんますか」と云ったり「Tさんサ、こんなよく稼ぐ弟子をどッから目ツけて来なすった」と、羨望したりした。また、同じ会津人の寺崎広業門下の芥川某という画学生なども、「君イ。絵が好きなら、なぜちゃんとした日本画家を志さないんだ。広業先生に話してあげるから書生になれ」と、おだてたりした。だがぼくは、とうに画家志望などは捨てていた。苦学生たる事もあきらめている。唯紹介者のYさんの言を力に、一年間は辛抱して、両親や弟妹を東京へよびよせ、細々とでも食ってゆける緒につきたいと、それだけが、目標だった。

——前後するが、ここへ来る前の四月中旬、吉原の大火があった。

それから吉原復興の本普請が出来るまでの数カ月間は、

仮店といふものであった。独り者のT氏は、従来、必ず月二回吉原で必要を処理することを、その貯蓄思想や暇を惜しむ点からも、規定していたらしいが、仮店風景となつてからは、面白さも加わり、ぼくという留守番もできたせいか、俄然、回数がひんばんになっていた。

だから週に幾晩かは、ぼく一人である。かかる夜は愉しかった。母に手紙を書いたり、読みたい物を読み耽った。朝になると、朝歸りの仲間が必ずぞろぞろ立ち寄る。ゆうべのもてたはなし、ふられたはなし、ワリ勘のやり取りなど、人にもこの家は気楽だったに違いない。職人なので長尻をする者はなく、T氏もそんな日のあとは馬力をかけて仕事に打込む。急ぎ仕事かたてこむと、徹夜続きもめずらしくない。仲間はT氏へ面と向って「女郎買いの又カ味噌汁」と云ったり「そんなに、眼さ赤くただれるまで、金ばかし蓄め込みなすって、どうする気かね」とからかったりするが、T氏の貯蓄心と吝嗇は徹していた。女郎買いを除いた以外では、憑かれた人のような面もあった。たとえば、婚礼の折詰でも提げて帰ると、その鯛一尾を、幾日間も茶だんすから出し入れして、焼き直しては一人で喰べ、あとの骨でも、味噌汁に入れろと、ぼくへ命じる、といった風であった。横浜ツ子の放漫な氣質に馴れていたぼくには、初めは何とも奇異な人にみえたが、後にはその徹底ぶりに感服した。問屋先でも、T氏の吝嗇は有名だったが、しかし信用のできる堅人、期日を守る勤勉家としては、誰にもみとめられていた。

のべつ勤勉家とサシでいるので、ぼくも勤勉家でないわけ

にゆかない。へこ帯紺がすりで、沢庵漬や干魚を提げたり、共同水道へ、水汲みに行くなどは、初めはテレたが「Ｔさんとお弟子さん」と、長屋中は親切にしてくれた。そのうちに長屋端れの共同水道へ水汲みにゆくのも、ひそかな愉しみになっていた。折々、水道栓でぶつかると初々しい娘があった。紙人形のように薄手で弱そうな子であった。露地で逢っても俯し眼に過ぎるだけだった。が、彼女の家の裏は、こっちの格子先だから、彼女の朝夕の声も、家族の暮らしぶりも、居ながらにしてよく分った。

花簪や花櫛の摘み細工、と云つても、現代人には通じ難いが、下町娘の結綿や桃割などの髪によく挿したその造花仕事を、一家中でやっていた。両親も兄弟も、みな上方弁なので、彼女も東京生れではあるまい。「N子、N子」と呼ばれるのを、つつ抜けに聞いているから、ぼくは名まで知っていた。自分の思い過ぎか、ぼくがドブ板を踏んで外へ出ると、彼女も買物に出て来たりした。近くの縁日でもよく行き会った。唾蟬作の流行歌——ああ夢の世や夢の世や、のメロディがどこかでする青白いアセチレン瓦斯の明滅が、ひどく印象的にぼくへ彼女を焦きつけた晩もある。開盛座の立見席で気づくとすぐ側の人中にN子の横顔が見えたりした。しかしどんな機会にも二人は口をききえなかった。とつぜん、真正面に行き会ったときなど、こっちの胸がつまる程、彼女の眸にもうごく色を見ないでもなかった。けれどその反れてしまうことは燕と燕のように、迅かった。ぼくの恋に似た経験といえ、みんなこんな不熟で終わっている。臆病なせいではない、境遇のせいだった。彼女は、その年の末頃、忽然と、長屋か

ら見えなくなった。上方の花柳界から舞妓に出たらしい。そして、まもなく上方で急死した。——という消息は、彼女の実兄から後に聞かされたのである。その人は、妹の死をぼつんとぼくへ告げながら、「——妹は、あんたの名を、何度も何度も、死ぬまえに云ったのだすえ。いま初めてお打ち明けますが」と、云った。終生の悔いである。せめて上方へやられた事情や病気の模様でも、もっと詳しく訊きおくべきであった。ところが、それすら訊き返す勇気がなかった。先もそれしか云ってくれない。あとは何か、ぼくの俯し目を憎しげに睨めすえていたように受けとれた。

Ｔ氏の許にいた間に、母は二度ほど上京して来た。そしてＴ氏とも親しく会い、ぼくの次弟素助の身も頼んで帰った。又、それから後、どういう工面をしたものか、母は一家をまとめて、東京へ移って来た。

行ってみると、本所緑町のガード下に借家していた。見るからにひどい家だ。湿度もだが、光線の入る所がない。父の病気の為にもわるからう。さっそく、ほかを探すことを母にすすめた。

それはよいが、家に居るものと思っていた次女のカエが見えないので、母に訊ねると、長野県のS市へ行っているという。土地で一流の旅館料理を営んでいる人が、将来の事もかたく約してくれたので、カエにとっても、むしろ幸福であると、養女にやったというのである。

ぼくは、どきっとした。前に、幼い浜子を、遠くへ出して、諦めきれない死を見てもいるので、「大丈夫？」と念を押した。

母は充分先方を信じているらしく、「こんどは、前のような人の世話じゃないから……」と、いかに先の養父母となる人が好人物か、土地での有力者であるかなどを、話して聞かせた。けれど誰の世話で、どんな形式でやったのか、その辺は語りもしない。多少、世路の複雑を舐め歩いたばかりには、母の信じ方が、危ぶまれてならなかった。母は養女形式の戸籍移譲が、十五歳の少女に付帯されたばあい、それがどんな権利や利用価値を生むかなども、てんで知ってはいないのである。また旅館料理というものの内容なども分っている母ではなかった。だが、その辺のうとさは父も同様であった。もつとも父にはもうこの逆境から脱しようとする闘志も全く沮喪（そそう）していた。口癖に「ばかにするな、おれだって、今に、もう一旗は」と云っていた、その口癖もなくなっていた。潰瘍だけでなく、心臓もわるい、喘息もと、体じゅう病気の巣みたいにいうこの頃だった。この良人と幼いのを沢山抱えて、母の闘いはもう十年になる。一家心中をしなかったのは不思議である。その点、母はまったく強かった。だがその強さは冬柳の姿のようなものだった。ただ忍受であった。子や良人へするように運命にも抵抗を知らなかった。

無知といえど可憐なる無知の人であり、愛の一型とみれば、ただ子の涙を以て洗うしかない「家」なるものの犠牲碑だった。

母は、まもなく本所の番場町辺に間借を見つけた。そして袋貼（ふくは）りやら仕立て物の手内職を探し、また、子供らの通学やら何やら、曲がりなりにも、馴れない土地での暮しの緒につ

き始めた。

そんな中でさえ、母は用達しの帰りとか、寸暇があると、よく三筋町へやって来て、男世帯の汚い台所や押入れの中まで、よく見てくれた。洗濯物、ほころびの繕い、晩の御飯の仕掛けまでして帰るのだった。もちろん、T氏も母のおせっかいを好意で見てくれたし、よくや弟には、人の家であつても、母が立ち働く姿を見ているだけでも歎（うな）しかった。

だが、とかく病人の父は、母の留守をよるこばなかった。三筋町でつい日が暮れて帰りなどすると、例の癩癖（れび）でよく嘔（おう）鳴られていたらしい。母も、お父さんのそれにはもう馴れっ子になったと云っているが、後は必ず病状が悪いので、それにははらするのであった。

冬の初め頃、母たちは又、その貧しい巣を引っ越した。吉原遊廓にすぐ近いおはぐろ溝（どぶ）のそばだった。その一見、しもたやみたいな周旋屋の二階の六畳二間を借りたのだった。

何で、こんな所へ引っ越したのだろう。昼の妓楼の裏に干し並べである赤い物や、おはぐろ溝の黒さを覗いて、ぼくは母の気もちが分らなかった。弟妹の千代や晋ももう学校へ通い出しているのだ。夕方になれば遊客がぞろぞろ通るし、夜は茶屋のお囃子（はやし）やぞめきに毎晩爛（ただ）れた空をしている。当座、母はそれと明らかに云わなかったが、いつか分った。母は、昼間の幾時間かを、廓内の一妓楼へ、お針さんに通い出していたのである。そこでは、内職以上の賃銀になるし、また妓たちから、手紙の代筆だの小さい用事を頼まれたりして、余分な収入も得られたらしい。そのせいで、父の冬着も小ざっぱりして来たし、二階住居ながら茶ダンスやら火鉢、茶卓の

一つずつも殖えていた。けれどそれだけ母の骨身は削られていたのである。いや、後になって考えると、この折の母のお針さん勤めが、ついに、それから十年後の、母の死因をなしていたように思えてならない。何しろ、妓楼のお針仕事など、考えただけでも、不衛生で危険なことに極まっている。しかも母には、その危険さをも不気味さをも顧みてなどいられなかったにちがいない。

どうやら、およそ二年後に、ぼくはT氏を離れて職を持つことが出来た。

初め、塗師屋のYさんを介しての約束では、一年限りの契約だったが、礼勤めすべきだというので、半年延びた。が、その半年を送ると又、Yさんから苦情が出た。T氏も快くは暇をくれない。その間、多少ごたごたも生じたが、仕事を出す先のO商会の番頭や同業の口ききも手伝って、ともかく暇をとった。けれど弟と同時にでは、T氏の方も困るので、弟はなおT氏の許において、ぼく一人で、下谷西町に間借し、その日から仕事を探した。いちばん先に仕事を与えてくれたのはO商会で、次いで日本橋のH商会でも、励ましてくれた。その頃、H商会主の弟で、大学の制服着の儘、よく下職廻りにも歩いてた笠井政一氏は、いま品川区の区会議長をしている。

東京で初めて、自分の畳として持ちえたぼくの根じろは、下谷西町の髪結さんの二階であった。梯子段の上がり口が三畳、襖隣りが八畳である。だが、ぼくが借りたのは三畳の方だけで、八畳の方には、落語家の夫婦者が住んでいた。

ぼくはその落語家を、先々代の左楽か、又は当時の志ん生であったかなどと考え、よく思い出せないのである。ぼくが二十二、三の頃、つまり大正二、三年頃の、その落語家は誰だったろうか、いちど読売のK氏を介して安藤鶴夫氏に調べてもらった事もあるがよく分らない。が、いずれにせよ、相当な師匠格だったような印象をうけている。ぼくは上がり口の三畳に机とじょうばんをすえて、終日仕事の蒔絵筆をもっているだけなので、よく頭の上を、てん屋物やら酒やらが通ってゆく。粹肌いさいはだなおかみさんと、弟子後輩もよくやって来、朝から陽気になることもある。「どう。お隣りの書生さんも、こちらへ来て、一杯おやんなすっちゃア」なんて、声をかけられたりするが、その人達の洗練された諧謔かいぎやくやア力抜けた小唄など聞いているは、首がすくむだけだった。

しかしぼくの三畳へも、以来とみに訪客は多かった。仕事仲間はずつとして、その頃もう上海から帰っていた川上三太郎氏はすぐ眼と鼻の先の左竹にいたし、柳樽寺同人の誰彼だの、井上剣花坊氏だの、談論風発なら、お隣りにも負けなかった。そして、階下したの余り流行らない髪結さんの御亭主は、キナ粉をまぶした蜜団子はちだんごを売っていたので、こっちはそれを階下から取寄せて、番茶を貰うことにきめていた。

句作や江戸文学研究の上で教えをうけたことを除いても、井上氏夫妻からは個人的にも、並ならないお世話ごまわを蒙った。この事は多年いう折もなかったのでぜひ書いておきたい。

上京前からの御縁だった。井上秋剣の名で、中学文壇その他の文芸誌に、詩や文章の選、また小説評論も書いておられ

た。日本新聞の上では、三宅雪嶺、福本日南などと並ぶ社会評論をも見せていたかと記憶する。論文のばあいは、剣花坊の号を用いず、必ず秋剣であった。お会いしたのは、上京後だが、その前に、ぼくが何かへ投じた漢詩のことで、返書いただいたことがある。新体詩が興り、漢詩などはもう顧みる者も無かったせい、その事は、氏も覚えておられた。

とつぜん、三筋町の長屋へ訪ねて来られたのには、びっくりした。が、そういう見得のない人なのである。長州人の豪朗性そのもので、いつも書生袴、そして手提げ袋の紐を、片手の手頸に巻き、体じゅうで笑い、体じゅうで談じる。そして終日でも倦まない。後には、妙にぼくの親父と気が合ったものだった。どこか一脈通じるものがあつたらしい。

お住居は芝愛宕町で、やがて高輪の東禅寺裏へ移った。「遊びに来給え」といわれ、そのどっちへも伺った。よく電車通りの洋食屋露月亭に伴われた。当時における硬派のジャナリストでもある。じつに話はおもしろい。殊に史学家であり、文壇事情だけでなく、政界にも通じていた。ひとり長州だけでなく、薩州とか、熊本とか、なお日本の社会にはどの部門にも関色の余影があつた。剣花坊氏はそれらの関臭にたいしては常に反逆的口吻を弄していた。堺枯川を大いにみとめていた。柳樽改革をとなえ、新川柳を興し、氏を川柳へ赴かせたものの一因はそこにもあつた事かもしれない。「長州人で多少、文化のわかるものは、ぼくと松林桂月くらいなものだ」と云つたりした。画壇の方にも交友は広がった。その桂月氏とぼくとは、以後交友をつづけたのも、剣花坊氏のお宅からであつたが、そのほか氏の紹介で尊知をえた人々も少なくな

い。松居松葉、笹川臨風、小山内薫、水野葉舟、木下杢太郎、与謝野寛、倉田百三、ちよつと思ひ出しきれない程である。忘れ難いのは、初めてお訪ねしたときの事だ。ぼくは鼻緒の切れかかった汚い下駄をはいていた。奥さんの信子女史が、鰹節の釜飯をたいて御馳走してくれた。その味を忘れていない。又、帰ろうと思つて下駄を穿きかけたら、ピシャンコな泥下駄が、きれいに拭かれて、切れかけていた鼻緒まで、ちゃんとスゲ代えられてあつた。

その井上信子女史は、今も御健在らしい。らしいと云つては、御無沙汰の罪、申しわけない。だが終戦後、高田保が、ぶらりひょうたん”の一文の中に、信子女史の近作一句挙げて——これが何と、八十にちかい老女性の感覚であろうかと、賞めていたことがある。その句は、たしか、

国境も知らず草の実こぼれ合い
というものであつた。それで御健在を知つたわけだった。

徴兵検査は浅草区役所でうけた。一家の戸籍もそのとき東京へ持つて来た。検査日の当日、徴兵司令官というか、さいごの認定をうける所へ来たら、いかめしき人が、つらつらぼくの裸身と検査表とを見くらべて、

「今日の有為な青年が、そんな弱さで君どうするんか。体重といい身長といい、何たるヘッポコか。しっかり鍛えい」

と、大勢の中で、ぼくを見本において、一場のお説教を垂れた。体重十二貫、丙種であつた。

そこでは大いに赤面したが、しかし、この体を、弱虫とは自分では承知しなかつた。働くにも、遊ぶにも、何の不便不

足はないからである。

そろそろ、遊び始めた。自立してから、今まで知らなかった金が入り始めたせいもある。氷雪の下の青春が陽の目に這い出した恰好でもある。何しろ同年配の遊び友達は揃っていたし、夕方になれば夕風へ泳ぎ出すのが習性になり出した。

大勢の吟友と、柴又の帝釈天へ吟行した帰り途の昼遊びに、俗に吉原では伏見河岸とよばれる辺の安女郎に、ぼくの童貞も、五十銭程度の揚げ代で惜しみなく洗礼をうけてしまった。

五十銭は当時にしても最下級の単位である。資金のない時は、三、四冊の書物を携えて、古本屋へ立ち寄れば、ゆうに一夜の書生天下は現出する。日本堤には、大厦高樓が軒をならべ、サクラ鍋の殿堂に、紺タビの女中さん達が、夜どおし、庶民大衆の盛夜の宴の為に声をからしていた。そこでは知識無知識なく、職別老若の差もなかった。大衆の活力を煮立て、人間の赤裸を謳歌し、どの顔も、生き生き燃えていた。——という光景やら時代官能は、高村光太郎の詩「米久」にも歌い高められている。

大学の教授と生徒とも、そこらではよく打つかった。ぼくらは屢々剣花坊氏、あの和尚の姿を、その中で発見した。和尚は金持ちを連れていることがある。吉原で最高級の稲本、大文字、河内屋などの長廊下へ、ぼくらの汚い足痕が残るばあいは、おおむねそういう天恵な機会であった。

花街では、和尚も屢々、浅黄ウラ扱いをうける。事実、あの人の特徴は田舎者たることにあった。敵娼の選択をやりて婆に問われたとき、言下にこう云ったことは有名だった。「ほんとに惚れんでもよいから、惚れたマネをする女をよんでく

れい」

遊蕩は階段の如きものか。金はなくとも上りつめる。ぼくらは自分で引手茶屋遊びまで覚えた。ただぼくの取り得は、どんなに夜更けても、こっそり一人抜けて家に帰ることが常だった。

桐佐の女将には母にあたる年寄りから「あんたはまア、お若いのに、おめずらしい」と、養子にでも欲しいような顔して云われた事がある。何の、お堅いのも何でもない。ぼくの母や病父や弟妹は、つい廓の堀一重の外に、まだ二階借りしていたのだ。それを考え出すと、花魁の寝顔と母の顔を見るのと、どっちがよいか、思い較べずにいられない。結局、夜半でも、つい一と足だから、そっちへ行ってしまうだけの事だった。

母は起き出して、茶を入れたり、戸外へ出て、甘い物を買って来たりする。吉原界隈に灯の絶える深夜はない。明け方近くまで話しこむ。そして母や弟妹たちの間にもぐり込んで寝る。父は遊んだ人なので、すでに、ぼくの持っていた遊蕩の匂いを知っていたであろう。

せっかく自立したのに、これでは、何の為かと、自嘲したくなった。といって、夕風がそよぐと、悪友が恋しくなる。手段として、ぼくは西町の二階を引き払い、一時、母たちと一しょになる事にきめた。六畳二間の一方を仕事場とし、少し辛抱して、そのうちどこか、一軒建ちのよい所へ移ろうという方針である。

ぼくの収入がやや確定してきたので、母も廓なかつのお針さん通いを止め、父も体のよい日は、横丁の隠居みために、近所のごかいしょ碁会所へ出かけたりして、この所まあまあ、家計は小康を得たようなものだった。

ぼくの上京以来、四たび目かの正月もそこで迎えた。だから自分の年齢で二十三の一月十五日だった。

妙にこの事に限って、日まで明白に覚えているのは、生涯の悔いを、ぼくはその日、父へのこしてしまったのである。年々一月十五日になると、ぼくは自分を責めるが、それをここでも父へ詫びておこうと思う。

ぼくは漆筆を持って、一方の六畳で例の絵筆をもって仕事していた。冬なので、間の襖は閉めてあった。ところが、隣りの部屋で、何が、父の機嫌を損じたものか、初めの方は、聞き洩らしていたが、さかんに父が母へ怒りぬいているのである。

めずらしいことではない。しかし、この日のは、ちょっと、どぎつかった。それに、一時間たつても二時間たつてもすまないのだ。母はとうに泣きじゃくっている。また父の病を悪化させてはと、その為に、謝っていると思えない。父の云い分を隣室で聞いていると、子のぼくには、父には母への宥いたわりや愛情などはケチリンも無いように疑われた。そして反対に、ぼくが幼時から覚えている限りな、父の暴君ぶりやら、母への無慈悲やら、親としての無責任さなどが、母の代弁者として、胸のうちに、煮え返っていた。でもまだ、ぼくは、歯の根を cand、筆だけは、うごかしていた。しかし、骨肉の憎悪は、人間が原始に持っていた野性に通じるものがある。

やがて、一だん父の声が荒くなっていた。父自身も、久しく忘れていたであろう、かつての酒狂時代の、あの声に似たものがつづいて聞えた。ぼくは、ふらふらと立っていた。じつは何の考えもなく唯立ってしまったのである。トトトと階段を降りて、下の台所から、水をいッぱいに湛えたバケツを提げて、元の二階へ上がって来た。見ると、父はなおまだ母を前において熱いり立っている。ぼくは父の後ろへ廻った。そして、いきなり父の頭上から、バケツの水をざっと打ッかけてしまった。寒中の冷水である。父も母もアツと云ったであろうが、ぼくの耳にも眼にも残ったものは何もない。空バケツを抛り出すやいなや、ぼくは階段を逃げ降り、凶悪犯人のように、下駄を突ッかけて、戸外へ飛び出してしまったのである。

ぼくは一日中、六区の雑踏をうろついていた。家には恐くて帰れない気がした。十二階の頂上に上がって、腕組みしたり、ルナパークの観覧席で時間を空費したりした。そして夜の十二時過ぎ頃、そっと、家へ帰ってみた。父は寝ていた。母は起きて何か縫物をしていたが、何も云ってくれない。けれど、ぼくの帰るのはやはり信じていたのである、いつもの通りぼくの寝床もしいてあった。

翌朝になつても、父も母も、ぼくのした事には何も触れて来ない。ぼくは父の前へ出て、ひと言、謝った。何か云い出すかと思いのほか、父はふと、間が悪そうな顔をした。いや、もっと複雑な、何とも云い現し難い顔を子のぼくへ見せた。そして「……おい、茶でもお入れよ」と、云った。橋場のおせんべいを茶ウケに、母もそこへ来て茶をのんだ。せんべいをポリボ

り噛みつつ、ぼくは涙がとまらなくなった。

その年、浅草の栄久町に一軒借りた。わずか四間だが、小庭もあり、まだ新堀も埋め立てられない頃の柳並木も近く、父も母も、やっとここでは、やや世間なみの暮らしに、ひと息つけたことと思う。

父はもう完全に、敗者の耐えに馴れ、隠居に甘んじ、小さい弟妹たちの揃った所で「お父さんは、こんな風だから、おまえ達は、兄さんを父と思え。英もそう思ってくれ」と云ったりした。

唯ここに、S市へやられたカエだけが欠けていた。その後、ぼくが知りえた所では、カエを養女にやる仲介をしたのは、母が打ち明けないのも道理で、幾人かいた母の姉妹中の一人だったのである。姉妹じゅうで、その姉（——か、妹かもぼくは知らない）一人だけが、浅草の六区に住み、小料理屋か何かしていたらしいが、後に自分の娘のお和歌さんという器量よしまで店に出して、八区の端（はず）れで銘酒屋を始めていた。

カエは、養女というよりも常識上、売られたというべきだろう。母はその話になると、浜子の前例もあるので身を顛（おの）かせて泣いた。「私は何たる馬鹿だろう」と、悔ゆるばかりだった。ぼくは或る額の貯金を心がけて、それを持って遠いS市へ出かけて行った。そして親元のY館の主人に会った。カエの身を、戸籍ぐるみ返して欲しいと頼んだのである。幸いにも、Y館の主人は夫婦とも善良そのもののような地方人だった。「……あんさんや、カエは返しても、これを御縁に、親類づきあいして下ッさい」と、云ったりした。で、以後も長

年親類同様に往き来していたが、今はその家もつぶれ、その人達もみな世を去った。

六区で銘酒屋を出していた母の姉妹の一人も、すでに世に亡い人だろう。美人だったという娘のお和歌さんもどうしたか。そのお和歌さんには、伯父の斎藤恒太郎の長男の勤が、従兄妹でもあるのに、熱中して、通ったとかいう話も当時小耳にしている。文学士斎藤勤には、「中世における陰陽学（おんようがく）と卜筮（ぼくげい）の研究」の一著がある。それだけで、大学を出てまもなく夭折（ようせつ）してしまった。

すこし話とはぶが、父は大正七年の三月、浜町三丁目の新居で亡くなった。料亭「喜文」の裏門の真向いで、うなぎの寝床みたいな細長い家の奥の間だった。

亡くなる一週間ほど前、父は母へむかって「英のやつ、あんなで、いいのかなあ。……あれでやって行けるかしら」と、ぼくの前途を、沁々（しみしみ）心配していたという。

潰瘍症状も、喘息も、慢性なので、かかりつけの医師も何ら警告はしていなかった。唯一、三日前から、呼吸困難をつけていたので、大森の海岸附近にでも、閑静な家を見つけて、療養したら、と母もいうし、医師も同意なので、友人と共に、心当りの転地先を見つけに行った。

そして、帰って来たら、もう昏睡状態におちており、明日まで、どうかと、医師も首をかしげていた。

——その朝にかぎって、こんな事があった。

父は茶好きで、おまけに、毎朝暗いうちに眼をさます。同時に、湯加減よく、濃い煎茶（せんちや）の一ぷくが、すぐ出ないと、機

嫌がわるい。

多年のその習慣で、今朝も母が未明に起きて、勝手口のガス七輪で、お湯をわかしていると、病床の方から「おい、おい」と人恋しそうに、何度も呼ぶ。「はい、ただ今」と答えながら、とにかく先に、茶を入れて、いつものように、母が枕元へ持つて行くと、父は起き直つて、「なあ、おい。今朝ばかりは、おまえの姿が、観音様のように見えたよ。観音様が台所にいるかと思つた……」と、手を合しかけたので「いやですよ」と、母は笑いにまぎらしたが、そんなに云われたのは、夫婦となつて、今朝が初めてだったので、うれし涙がこぼれたと、母は云つた。

それから、少したつて、「今朝は、むすびにしてくれ」というので、膳にのせてゆくと、手さぐりで、床の上に畏^{かしこ}まつた。もう視覚もきかなかつたものとみえる。それでも、父は畏まつて、むすびを喰べた。病中いちども、あぐらや、寝そべつた儘で、食事した例はない。そういう人であつた。その晩の十一時三十五分に息をひきとつた。ぼくは、父の顔が、色をひくのを見てから、真つ暗な二階に上がつて、唯一人で突つ伏してゐた。そのうちに、知らせで寄つて来た知人の細君が、ぼくを揺り起しに来た。びくつと、我に返つたように、ぼくが顔を上げたら、その細君は悲鳴に似た声を上げて、階段を駆け戻つてしまつた。あとで聞いたら、ぼくの顔が、狂氣したように見えたのだそうである。自分では知らなかつたが、そんな慟^{どう}哭に沈んでいたらしい。

母の死は、なお語るに忍びない。母はそれから三年後の、ぼくが三十歳の六月に死んだ。家は向島の植木場という所へ

移つてゐた。幸田露伴翁の垣のすぐ近くだつた。せめて、父の死後の三年間、それぞれ子供たちも成長した中で、余生らしき日を、たまには熱海や千葉海岸などへ、転地もさせたりして送らせた事が、ぼくらには、些かな慰めだつたが、しかし母はやっぱり口ぐせに「……お父さんが居たらねえ」とか「お父さんて人は……」とか、常に、淋しみを洩らしていた。致命的な病原は腸結核だと、医師が云つた。ぼくはすぐ、母が廊へお針さん通いをした事があつたのを思い出した。病菌はその頃受けたのではないかという傷まじさが今も消えない。

さいごの息づかいらしいのが窺われたとき、ぼくたち兄妹は、ひとり余さず、母の周囲に顔をあつめて、涅槃^{ねはん}の母に、からだじゅうの慟哭をしばつた。腸結核は、じつに苦しげなものである。ぼくは、どうかして、母が安らかな永眠になれるように、という祈りみたいな気持ちから、ついつまらない智恵がうごいて「……お母さん、お母さんは、きっと天国に迎えられますよ。ほら、きれいな花が見えるでしょう。美しい鳥の声がするでしょう」と、耳元へ囁いた。

そしたら、母は、ぼくをにぶい眼で見つめながら「……よけいな事をお云いでない」と、乾いた唇で、微かに叱つた。母はふとんの下で、妹たちの手を握りしめていたのである。「みんな、仲よくしてね」と、次に云つた。それぎりだつた。ぼくは三十で母と別れるまで、母に叱られた覚えは、二度か三度しかない。それなのに、母が、ぼくへ云つたことばの最後は、叱^{しつ}咤^たであつた。

——よけいな事をお云いでない。

それから、三十秒か四十秒の後に、母は子供らの前から、物しずかに去って逝った。

母が生前に「……どうしたろうネ。おまえの兄さんは」と、折にふれ、忘れかねるが如く云い暮らしていた、義兄政広についても、後日の深刻な一挿話があるが、ここではやめよう。ぼくにとつても、故人にとつても、お互い慙愧にたえない事ではない。唯ぼくが十二歳当時に家出したきりだったその義兄も、三十何年振りかで、とつぜん、ぼくの芝公園八号地の当時の住居を、尋ね当てて来たことだった。ぼくもやっと、作家生活に入り出した初期の頃である。

だが、すでに両親共、この世にはいなかった。人生、おおかたは、まあそんなものであろうか。

駄稿、ここで終りとする。

ろくな記憶も、語るべき内容もないのに、四半自叙伝などと烏澁なタイトルを掲げ、気恥かしいことだった。つい、云うまじき事まで云ってしまった気がしてならない。だが、さいごに一言すれば、ぼくの青少年期は、何ともひどい辛酸をなめて来たかのようにだし、読者もそう読まれたか知らないが、ぼく自身は、ちっともそんな気はしていないのである。社会も家も否みよのない時代のワクの中のものだったせいであろう。いわばぼくも、封建の子の一型だったものに過ぎない。現代の太陽族とかいう澆刺たる青年男女には、おそらく事々一笑にも値しまい。けれど人生の真価とまで云わないでも、どっちが、生命の充実とそのよろこびを持続しうるか、それ

はさいごの道まで歩いてみないと分るまい。ぼくとしては、これまで書いた十代から二十代までも、充分愉しかった。いまの青年たちの日々と較べても、悔ゆる思いは湧いて来ない。といって、自分の子や周囲の子弟に、ぼくの過程をひきあいに出して定規に当てようなんていう時代知らずでもないつもりだ。

けれど、過去の親たちが歩いた泥ンこな道にも、振返れば、これからの子が、ぬかるみを歩く用意の足しになるぐらいなものはあろう。ぼくの父は、予期してではあるまいが、偶然、子のぼくをして、ぬかるみを少し歩かせ過ぎてくれたようだ。といつても、父の死までのぼくの体験なども、やっと人生中学の門を卒業して出た程度にすぎない。以上はぼくの人生中学の通信簿といったところだ。父は怖かったが、怖かった父とか先生というものは又、妙に、後ではなつかしく、そして、有難かったりするものである。

あとがき

なぜか、私はよく訊かれる。「あなたは髪を染めていらつしやるので？」と人みなが問うのである。飛んでもない。私は日常髪を洗うことさえしない不精者だ。けれど考えてみると、私も間もなく古稀といわれる年齢になるらしい。人が疑うのは当然だった。——にもかかわらず気持ちにおいては、この「四半自叙伝」中の私から、いまだに大して成長もしていな

い自分に思われて仕方がない。だから人がまま「お若いすなあ」と云うのに対して、このちぐはぐな気持ちをどう現わしようもなく、私はいつもこう答えて笑いはぐらすのであった。「いや幼稚なんですよ。若いというよりは、つまり幼稚というものでしょうな」

正直、私は自分の中に今以て、老来なおさらもどかしい幼稚が失せないのに当惑している。この書が上梓されたすぐあとでは、谷崎潤一郎氏が「幼年時代」を書かれ、また長与善郎氏の「心の遍歴」などもあった。それを見ると、ほぼおなじ時代をやや後から歩いていた自分ではあるのに、両者の高い晩節の嶺から振向かれた過去の整然とした記憶や心象の構造にひきくらべて、私の少年期や「人生中学」の記などは、何とも他愛のない泥濘の回顧に過ぎぬ感の多く、気恥かしいかぎりではない。で、折があつたらもう少し補筆修正しておくべきであるとも思うのだが、どうもいつまでも幼稚が意識にある自分には、自己の過去像を本気で描き残しておこうなどという感興にはなれないのでついそのままになっているのである。

昭和三十六年正月

英治追記